ドーム形を呈する。焚口の上部には幅の広い庇がつき，焚口の対面には煙出しと考えられる円孔が認められる。天井部の中央には釜孔と考えられる直径約20㎝の円孔が認められ，天井部と体部の境，底縁部，焚口の縁に沿って，タガ状の粘土紐で補強を行なう。この竈の器壁は薄く，全体的な構造からみても強度は非常に弱いものと推定される。これまでに知られている竈のほとんどのものが，天井部全体が釜孔の役割りを果たし，竈の体部全体で重量を受け，竈の強度を考えた構造になっているのとは異なる。ところで竈形土器に明確なタガを巡らせる例としては福岡県八女市立山山１号埴輪窯から出土したものがあるが，伏尾遺跡例とは微妙に異なっている。

技法的な特徴をみてみると残存状況が悪く部分的にしか観察できないが，外面には平行タタキ，内面にはナデが認められる。外面にタタキ調整を施す竈としては，現在のところ大阪府東大阪市の神並遺跡出土の縄蓆文が認められる例と鬼塚遺跡の平行タタキ目を持つ例が知られているが、他の出土例は外面をハケ調整，あるいはナデ調整で仕上げるものがほとんどで，この竈は技法的にも特異な部分をもった竈であるといえる。

次にこの竈の時期であるが，谷部での出土層位などから考えることは可能である。竈の谷部での出土層位は弥生時代から古墳時代中期の遺物を包含し，古墳時代中期の堆積層と考えられる第Ⅴ層中からの出土であり，この堆積層の須恵器で更に詳細な時期まで言及すれば陶邑編年のⅠ型式２～３段階の時期に限定でき，現在の出土例では最古段階のものとして捉えることができる。また，これが竈形「埴輪」の可能性もないとは言えないが，現時点では古墳に伴うような積極的根拠がなく，否定的に考えておく。

さて伏尾遺跡の竈は，日本では類例をみないものである。そこで移動式竈の源流である朝鮮半島にその類例を探ってみたが，本例のような形態の竈は近似するものが見い出せない。ただ，あえて挙げるなら，ドーム形を呈するという点では図版153に示す資料が形態的に類似する。これは現在国立晋州博物館が所蔵する資料であるが，かつて伝慶州出土として国立中央博物館に展示してあったものである。ミニチュア４点セットで全体の高さは19.0㎝である。竈形については高さ7.1㎝，底径15～16.5㎝，後部に焼成後穿孔がみられる。釜孔はヘラ状工具でくり貫かれたままで調整を略し，焚口の部分も一部ヘラ状工具の切り取り痕跡を残すが，大半は欠けており庇も残っておらず形状は不明である。胎土・焼成は一般的な日本の須恵器と共通する。以上のようにこの資料では，天井部の形態が伏尾遺跡例と類似するのみであるが，逆にきわめて特徴的なこの形態例は現時点でこの資料しか知り得なかった。近年の研究で，この資料の時期は統一新羅時代の可能性が考えられ時

期も大きく隔たっている。

もうひとつの統一新羅時代の資料では，慶尚北道慶州市仁旺洞・雁鴨池遺跡の竈資料もややドーム状の形態を持つが，伏尾遺跡例とはまた異なっている。この資料は煙突も付けた実用のものらしく，高さ17.6㎝，底径30.0㎝，煙突外径5.4㎝，煙突の長さ4.5㎝を測る。使用された痕跡があり、煤が付着している。

以上のように，現時点で伏尾遺跡の竈と形態を同じくする例は，朝鮮半島でも非常に少なく，系譜の追跡は為し得ない。この竈の位置付けについては使用した集団，伏尾遺跡の評価にも一部関わるのであるが，類例が乏しい現在では明確な議論が出来ない。ただ，この資料について金東鎬氏は「中国山東省にもその類例が知られ，耐久性から考えて特別な儀式の時のみに使用され湯を長時間にわたって保温する器種」ではないかと指摘している。当否は別として日常的な使用に耐えるものとは思えない点は，この時期の竈を考える上で留意すべきである。

日本におけるいわゆる「韓竈」は須恵器とあい前後して渡来人がもたらせたものと考えられている。しかし，伏尾遺跡の例は日本にも大陸にも明らかな類例が求められないので，編年や型式の基準とは未だなり得ない。ただ，すでに知られている多くの竈の例と同様に，本例も日常的な使用という点で耐久性には疑問があり，なによりも煤の付着や二次焼成を受けたような痕跡を見い出せない。このことは竈と呼ぶより，竈形土器として別の用途を考えるべきなのであろう。

伏尾遺跡の例でも圧倒的な掘立柱建物の数に対して，竈は本資料一個体のみである。このことからみても，住居構造が竪穴住居から掘立柱建物へ変わることが，造り付け竈から移動式竈へというような変化は考えにくい。また，住居に伴う実用品であることも否定的である。では，掘立柱建物が主流となる集落での日常炊飯は，どこでどのように行なわれていたのかが問題となるが，遺溝として考古学的に認証しえない状態である。ひとつの可能性として，タイ北東部や韓国済州島の民俗例にあるような建物の板間上に小さく区切った土間に竈や炉を造り付けたものであったかもしれない。

先に述べた竈形土器の別の用途としては，稲田孝司氏が展開された祭祀との関わりで理解しておくのが妥当ではないかと考える。伏尾遺跡が初期須恵器生産と密接に関わり，半島系の遺物を多く出土する点で渡来人との関わりは無視し難く，また陶邑における須恵器生産が当時の王権の意志のもとにあったのであれば，渡来人の竈の習俗と日本特有の祭祀が炊飯道具に融合し，機能した可能性はおおいにあろう。6世紀代になって古墳から多く

出土するミニチュア竈形土器は，墓前祭祀との関わりが考えられるし，集落であればなんらかの祭事のおりおりに使用されたものと理解したい。

伏尾遺跡の特異な形態の竈形土器の位置付けについては，今後類例が増えるのか，伏尾遺跡だけの固有の形態なのかは，今の時点では将来を待たねばならない。ただ，この形態が時期的な一型式なのか，あるいはこのような竈形土器を保有する渡来集団の出自など，なんらかの性格を物語っているのか，同様の資料の増加を期待しておきたい。

第Ⅲ章　参考文献（発行年順）

田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966
八女古窯跡群調査団『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅳ・総集編　1972
稲田孝司「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻第１号　考古学研究会　1978
大阪府教育委員会『陶邑』Ⅳ　大阪府文化財調査報告書　第31輯　1979
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981
田辺昭三「初期須恵器について」『考古学論考』平凡社　1982
近藤義郎『前方後円墳の時代』日本歴史叢書　岩波書店　1983
（財）大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1984
国立晋州博物館『国立晋州博物館図録』　1984，図版153の写真は国立博物館の許可を得て掲載した。
中西克弘「須恵器出現期の土師器」『紀要』Ⅰ（財）東大阪市文化財協会　1985
大阪府教育委員会『陶邑』Ⅵ　大阪府文化財調査報告書　第35輯　1987
大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター『小阪遺跡』（その３）　1987
文化広報部文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書』　1987
韓式系土器研究会『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
埋蔵文化財研究会・（財）大阪府埋蔵文化財協会編『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』　1987
大谷女子大学資料館編『陶質土器の国際交流』柏書房　1989
都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店　1989

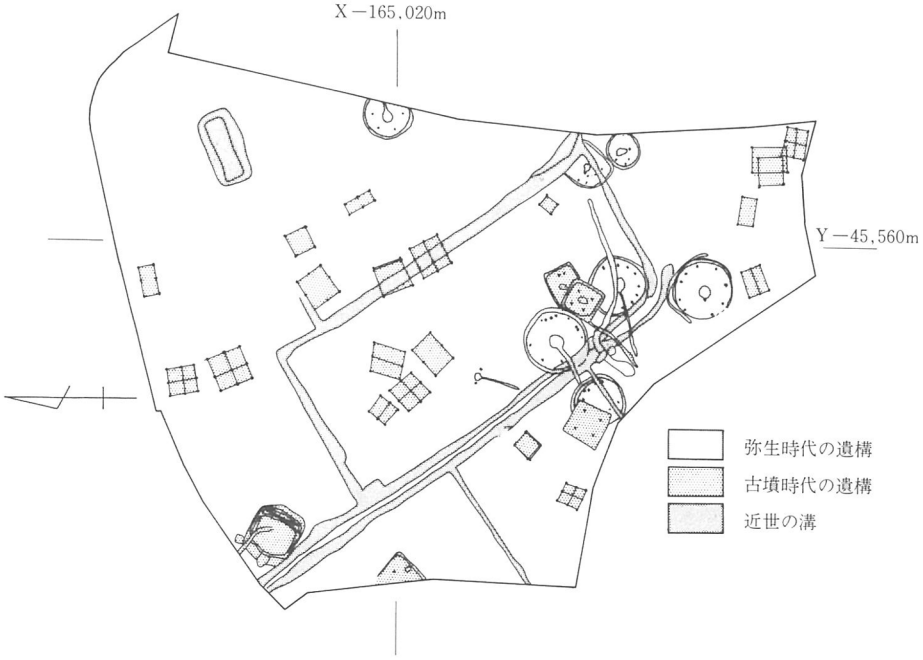
第Ⅳ章　第Ⅱ区の調査成果

第１節　概要（第84図）

第Ⅱ区は伏尾丘陵の先端部に位置し，調査地の南側には比較的大きな開析谷が走り，西側は舌状に緩やな丘陵が延びる。調査地の微地形は北側および南西側に向かって徐々に低くなり，調査地内で最も標高の高い場所は約35ｍを測る。遺構は後世の耕地化により削平の著しい場所もあったが，調査区のほぼ全面で検出された。検出された遺構の時期はほとんどのものが弥生時代と古墳時代を中心とした時期のものである。

弥生時代に属するものとしては竪穴住居，土坑，溝などがある。竪穴住居は，調査区の東端と南西端の丘陵の傾斜変換線付近で計９棟が確認された。時期は中期と後期に属するものとがあり，拡張を行なったものや火災を受けたものなども認められた。

古墳時代の遺構としては竪穴住居，掘立柱建物，土坑，溝，窯跡などがある。竪穴住居は古墳時代前期に属するもの３棟，中期に属するもの２棟の計５棟が確認された。掘立柱



第84図　第Ⅱ区主要遺構配置図

建物は，確実ではないが建物として復元できる可能性のあるものを含めると計約20棟を確認した。いずれも古墳時代中期に属するものと考えられる。土坑は約20基検出されたが，ほとんどのものが古墳時代中期に属するもので，これらの土坑の中には，土器が多く出土するものなど特徴的なものも認められた。溝は４条検出されている。窯跡は時期は明確ではないが南西の斜面で１基確認した。他にも多数のピットが検出されているが，この中には弥生時代の遺物のみが出土するものもあり，当該時期の建物の存在が予想されるが，今回の調査では明確にはできなかった。また，調査地の東側にはさらに丘陵の平坦面が広がり，遺物の散布状況から見ても遺跡がさらに広がることは確実である。

第２節　基本層序（第85図）

第Ⅱ区は，丘陵尾根上に位置するため第Ⅰ・Ⅲ区と同様，現地表面から遺構面までは非常に浅いものである。調査区は尾根の斜面西側に位置し，調査区東側が尾根の稜線に近くなっている。弥生・古墳時代の遺構面は近世・現代の造畑による削平を受けており，基本的には耕作土直下が遺構面である。しかし，調査区の所々においては各時期の堆積土が存在する場所もある。それらは調査区内でも北辺沿いの丘陵の先端部に向かう標高の低い場所である場合が多い。以下，基本的な層序について簡単に記述しておく。

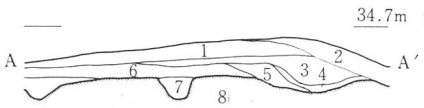
第１層　現耕作土

第２層　旧耕作土

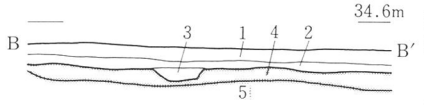
第３層　古墳時代遺物包含層（調査区北辺沿いの非常に狭い範囲に認められる。平均の厚さは約10㎝である。この層から切り込む近世の遺構がみられる。堆積の時期は明確にはわからない。この層に含まれる遺物はこの周辺で検出された遺構出土の遺物の時期と大きくかわることはない。）

第４層　段丘構成層（砂礫と粘土の場所がある。ほとんど遺構はこの面で検出された。）

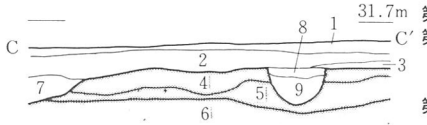
第４層上に遺物を含まない二層が堆積し，その面から古墳時代の遺構が掘り込んでいるところもみられる。この部分は調査区内でも最も標高の低い場所である。以上のことから考えると，標高の低い所では堆積層が厚く古墳時代以前の包含層も残存しているが，調査区の一部には各時期の包含層が広がっていた可能性もある。ただ遺構の残存状況からみても近世以降の造畑による削平が激しく，それ以前の包含層が失われている。



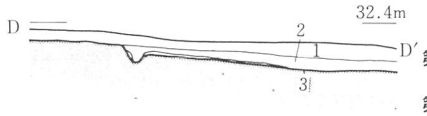
第1層
1．現代耕土
2．現代耕土
3．10YR5/6 にぶい黄褐色砂質土
4．10YR4/2 灰黄褐色砂質土
5．明青灰色土
近現代水路
第2層
6．10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土(旧耕作土)
7．10YR5/2 灰黄褐色粘質土(古墳時代中期の遺構)
第4層
8．橙色混り黄色粘土



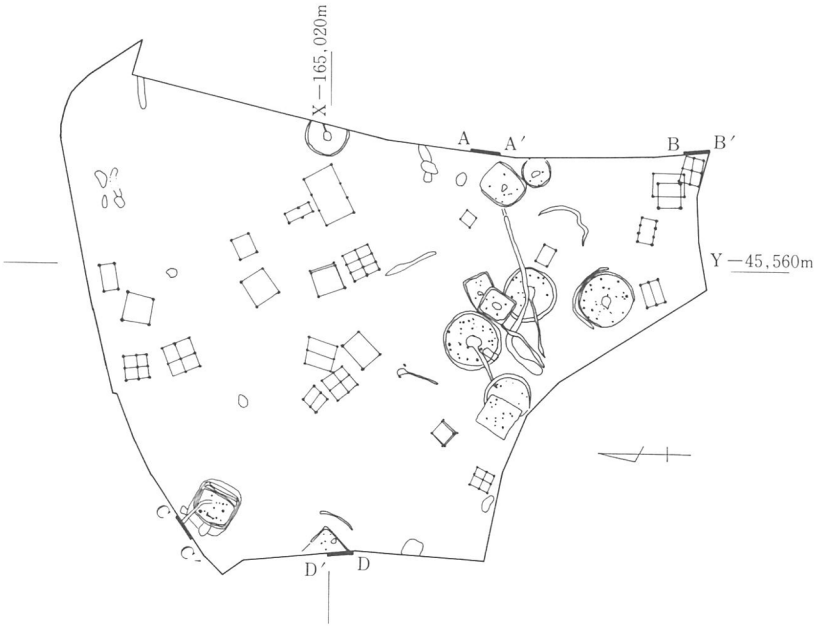
第1層
1．現代耕土
第2層
2．黄灰色土
3．灰黄褐色土(古墳時代中期の遺構)
4．明黄灰色砂礫混り土
第4層
5．橙色粘土



第1層
1．現代耕土
第2層
2．10YR5/8 黄褐色粘質土
第3層
3．10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
4．10YR6/6 明黄褐色粘質土
5．10YR5/6 黄褐色粘質土
第4層
6．黄橙色粘質土
7．黄灰褐色粘質土(古墳時代中期の遺構)
8．10YR6/6 明黄褐色砂質土
9．10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
古墳時代中期の遺構



第1層
1．現代耕土
2．3402－OD(古墳時代前期の遺構)埋土
第4層
3．10YR4/6 褐色粘質土



第85図　第II区基本層序図 (1/80)

第３節　遺構と遺物

第１項　弥生時代

１．竪穴住居

第Ⅱ区の弥生時代に属する竪穴住居は，3406－ＯＤのように古墳時代の竪穴住居とほぼ完全に重複していてその可能性のあるものを含めて総数９棟を数える。その中には後世の削平を受けて炉とこれから延びる排水溝の部分のみが遺存していた303－ＯＤのような例があり，他にも炭・焼土の入っていた土坑もいくつかは認められたので，全体としてはあと１・２棟はあった可能性がある。住居は基本的に東から西に下る斜面に位置している。その分布は調査区中央東端の稜線に近い傾斜変換点付近の一群と，その西斜面下方に集中する一群とに大別される。両群ともに中期と後期の住居を含むが，斜面に位置するものの大半は中期末頃に属し，後期前半の住居は絶対数が少ないものの丘陵上部付近に集まっている傾向を指摘できるようである。

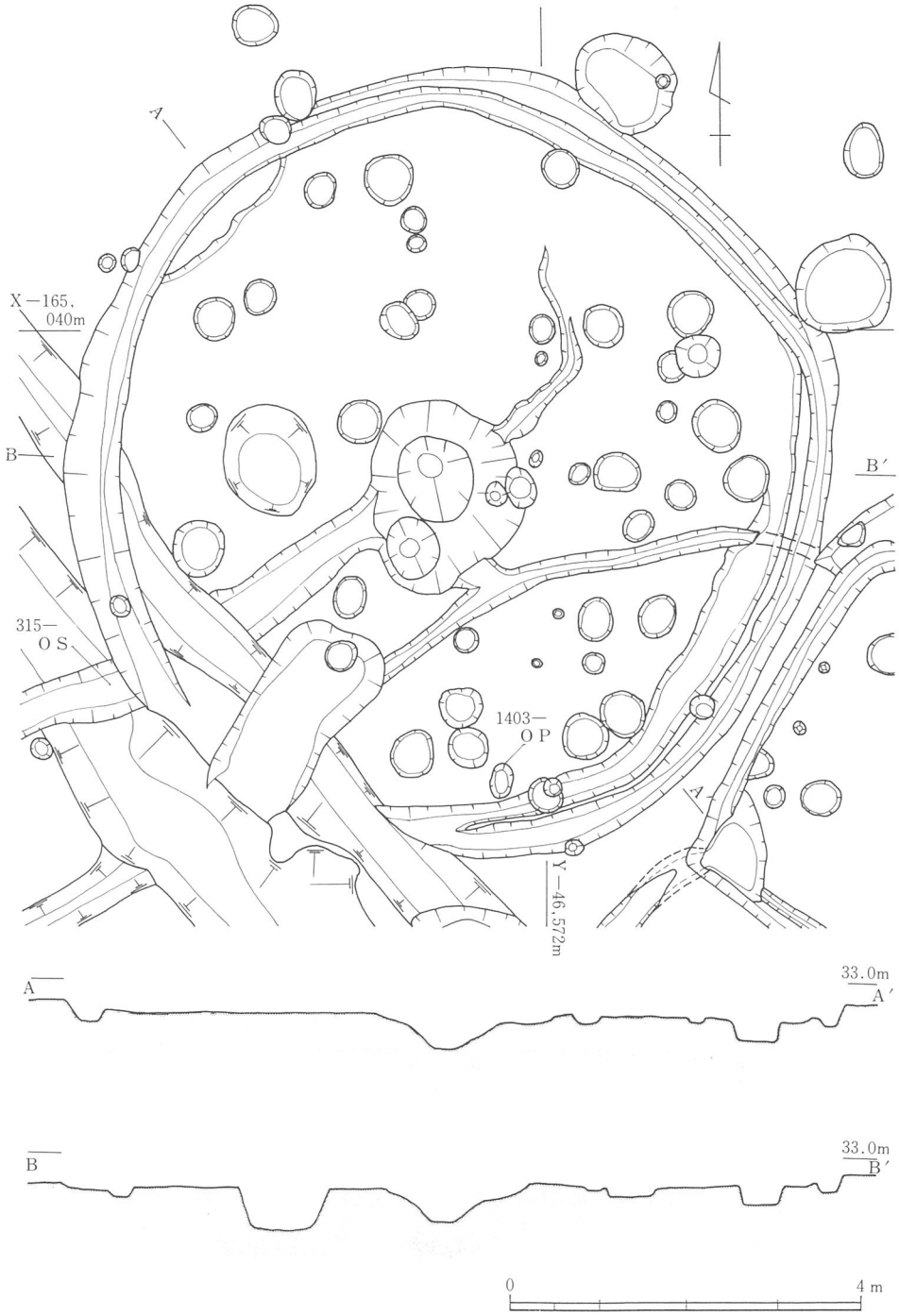
126－ＯＤ（第86・87図，図版34・106・127）

第Ⅱ区南寄り中央のＣ05ＫＧに位置し，六角形に近い円形を呈する大型の竪穴住居である。西側の一部は中近世の畑区画溝で削られている。斜面下方にむけて排水溝（315－ＯＳ）が壁体の外へ約3.5m程延び，その先端は154－ＯＤに切られている。

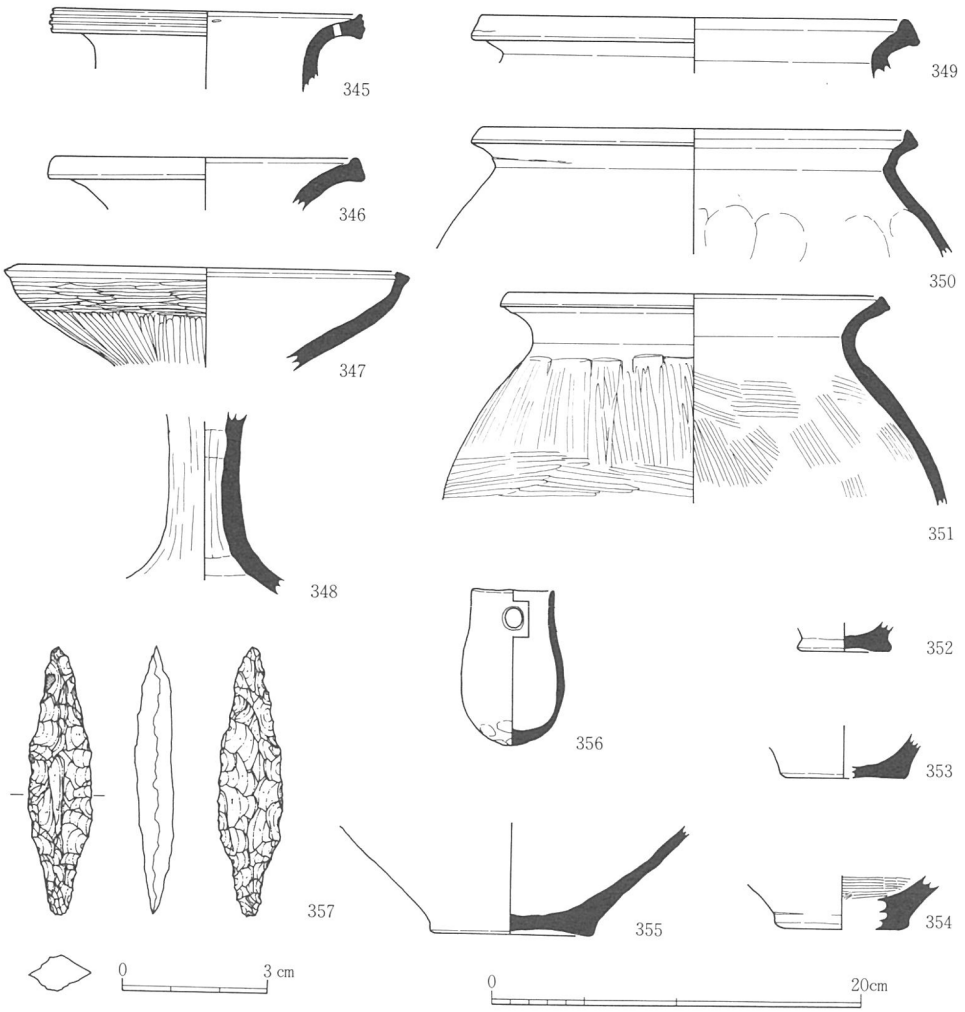
北から東側にかけて２本の重複する壁体の溝が検出されており，建て替えを行ったと考えられる。切り合い関係は明確ではないが，北では内側，東で外側を巡る溝（131－ＯＳ）の方が新しいと思われる。新しい溝の外径は約9.0mを測り，古い溝（321－ＯＳ）の外径で約8.6mを測る。面積的には新しい方が少し大きい。壁体の溝は131－ＯＳで幅約0.3m，深さはよく残っているところで約0.1m，321－ＯＳで幅0.35m前後，深さ0.05m弱を測る。

竪穴内には多数の柱穴が検出されているが，一部古墳時代のものも含まれ，対応関係は明確でないものの，二時期の竪穴ともに６～７本で構成されるようである。確実に住居にともなう柱穴の規模は径約0.5m，深さ約0.2m程度である。

床面の地山のレベルは東西方向で約0.2mの落差があり，西が低くなっている。中央には長径約2.1m，短径約1.8m，深さ約0.6mの土坑があり，土坑内に径約1.0mと約0.7mの尖底状の二個のくぼみがある。坑内には炭焼土が入っていた。炉と考えられ，周辺に計３条の溝が検出されている。その内315－ＯＳは幅約0.6m，深さ約0.05m，総延長の約７m，溝底の高低差約0.2mの規模をもつ。炉の南側の溝は112－ＯＤで記す。



第86図　126－ＯＤ平面・断面図（1/80）



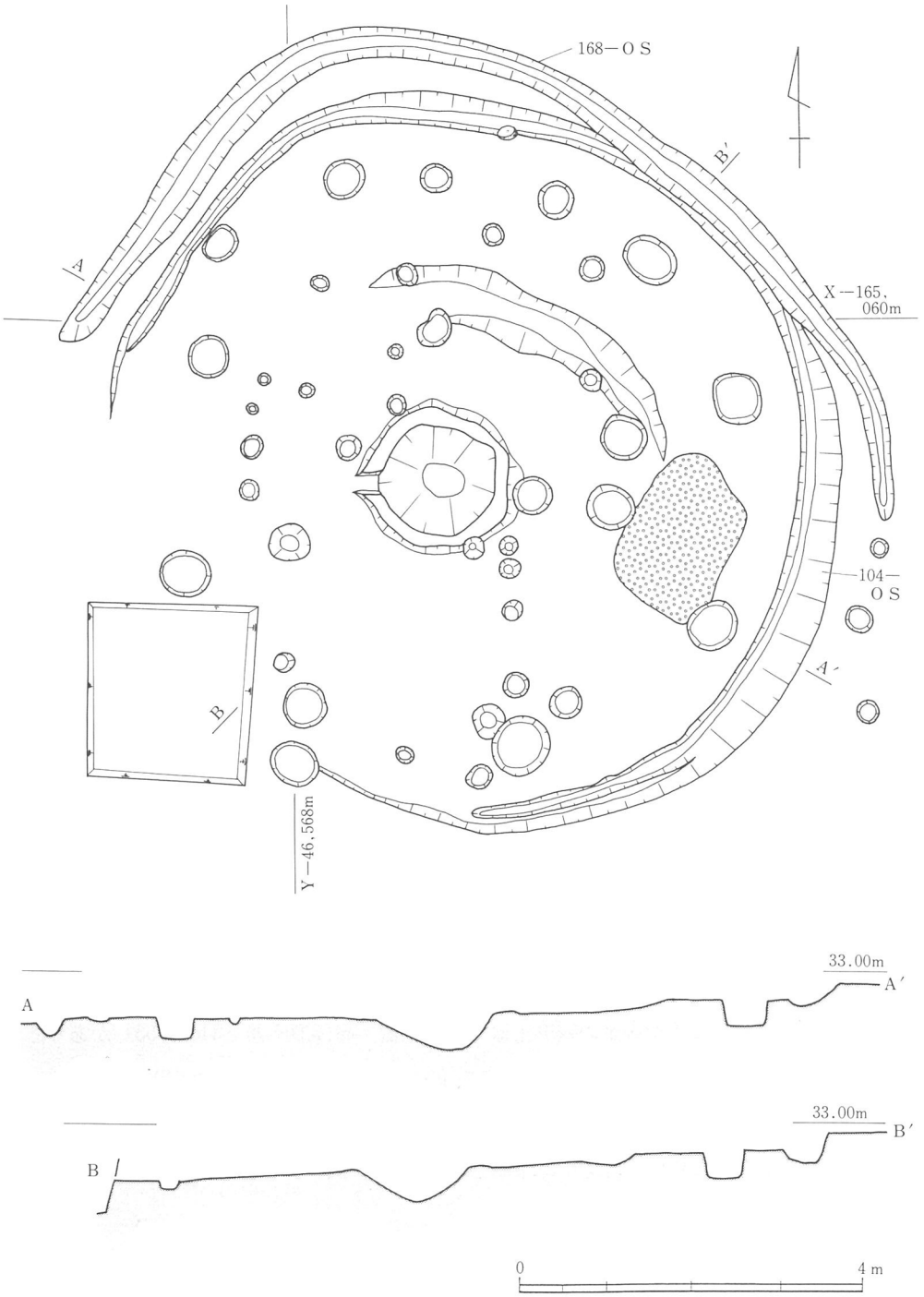
第87図　126－ＯＤ出土遺物（1/4，2/3）

住居内出土遺物には中期後葉の壷形土器・甕形土器・高杯形土器（345～355）があり，他に蛸壷（356）が住居南寄りの壁体の溝脇の小ピット（1403－ＯＰ）から出土している。遺物の多くは炉から出土しており，特に時期差を認めうるほどのものはない。

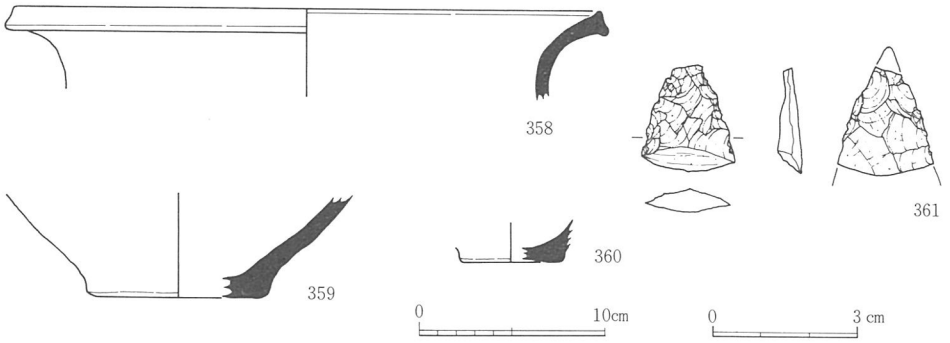
住居の建て替えを含めいずれも中期末頃の住居と考えられる。第Ⅱ区では最も古い段階の時期に属する住居である。

104－ＯＤ（第88・89図・90図の362，図版35・127）

第Ⅱ区南寄り中央付近，先述の126－ＯＤから11m程離れたＣ05ＰⅠに位置し，円形を呈する竪穴住居である。斜面下方にあたる南西縁は壁体の溝は残っていない。北側部分で



第88図　104－ＯＤ平面・断面図（1/80）

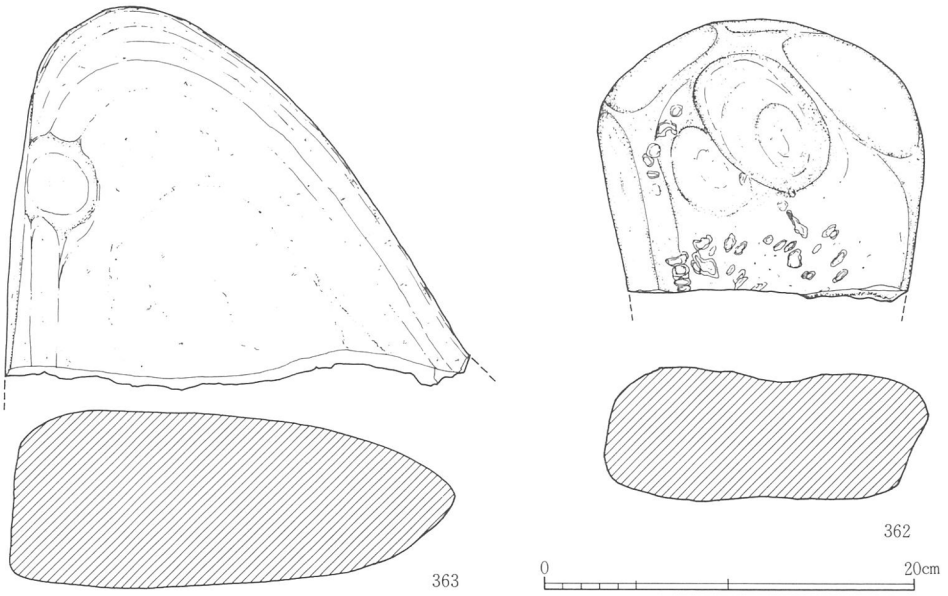


第89図　104－ＯＤ出土遺物（1/4，2/3）

は壁体の溝に沿って，その外側にもう１条の溝（168－ＯＳ）が巡っており，拡張のために建て替えがなされたと考えられる。

竪穴の規模は古い方の壁体の溝（104－ＯＳ）の外径で約8.9mを測る。南東部では壁体が残り，残存高約0.2mを測る。104－ＯＳは幅約0.3m強，深さ約0.1m弱を測る。168－ＯＳは104－ＯＳよりも高い位置に検出されており，幅約0.4m，深さ0.1～0.25mを測る。部分的に矩形を呈する。

竪穴内には多数の柱穴が検出されており，対応関係は明確ではないが，６～８本程度で構成されると思われる。柱穴の規模は平均的に径約0.5m，深さ0.2m程度である。



第90図　104・105－ＯＤ出土遺物（1/4）

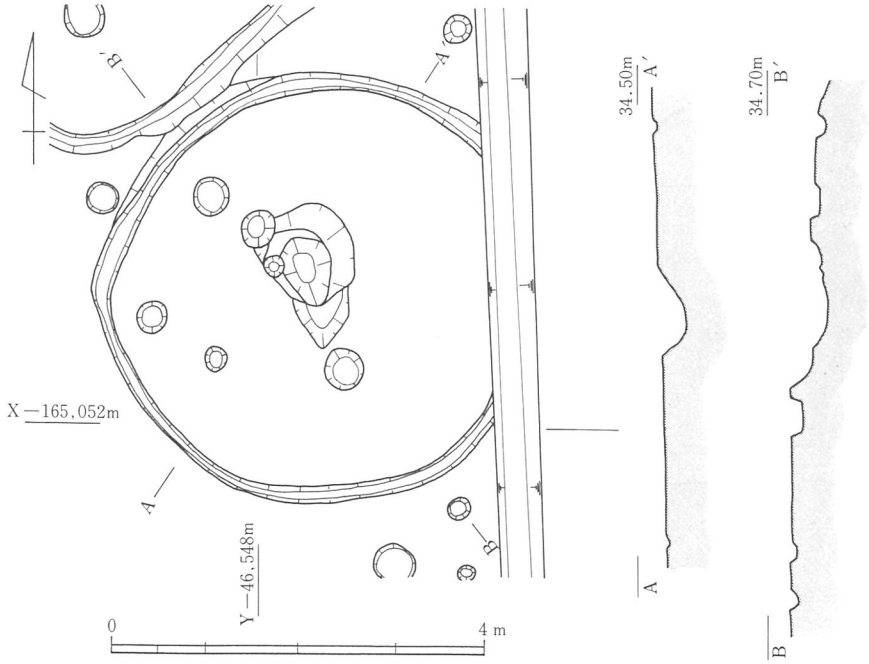
床面の地山のレベルは東西方向で約0.4mの落差があり，西側が低い。中央に径約1.2m，深さ約0.4mの坑があり，最下部に炭層が認められた。炉と考えられ，図版35では炉内に二箇所のピット状の窪みがみられるが，平面図では整った一つの土坑として表現されている。床面の東よりには地山土を混じえる数㎝程度の高みがある。この下面の地山は少し窪んでおり，貼床の痕跡の可能性がある。検出地山面はかなりの凹凸があり，床面中央付近にも溝状の窪みがあるが，住居にともなう施設であるかどうかははっきりしない。

住居内出土の遺物は少なく，甕形土器の小片（358～360）がある他は壁体の溝（104－ＯＳ）に接して砂岩製の台石（362）が出土している。台石は片側平坦面に二箇所の使用による窪みがあり，その周辺に小さな敲打痕が多数観察される。

住居の時期の判断材料に乏しいが，少量の土器片からみると中期末頃と考えられる。

105－ＯＤ（第90図の363・91・92図，図版36・106・127）

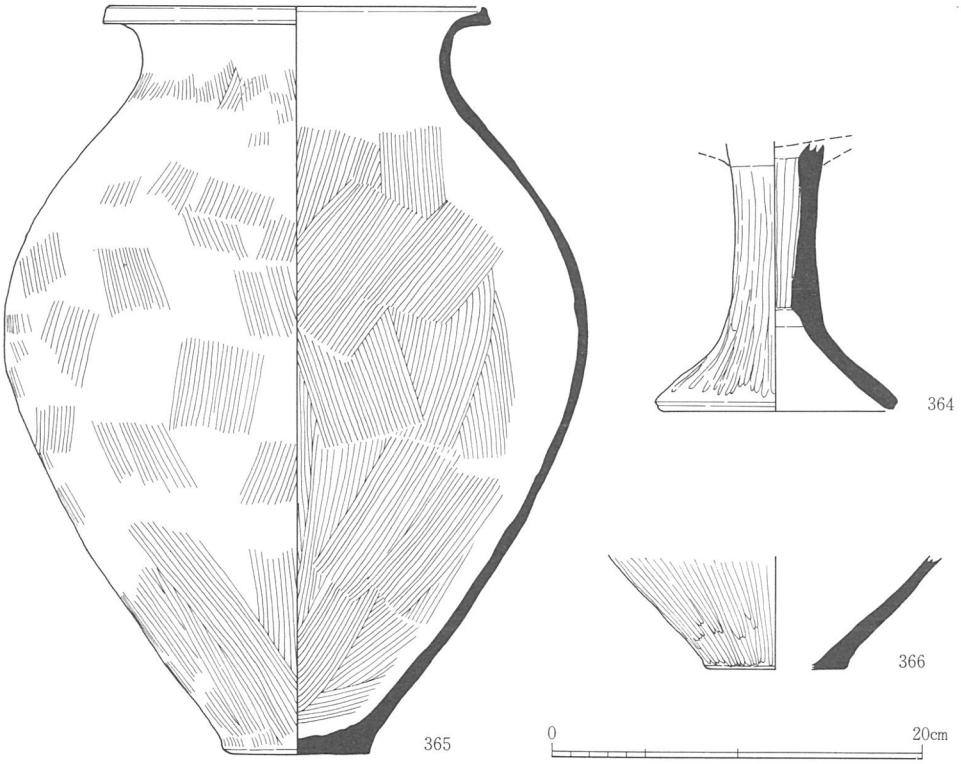
第Ⅱ区南寄り東端Ｃ05ＭＮで検出された円形の住居である。106－ＯＤと接しているが，後の削平を受けているためか，平面的には検出面での直接の切り合い関係は認められない。削平の時期については不確かであるが，106－ＯＤの検出状況とも関連するので，その項で記すことにする。



第91図　105－ＯＤ平面・断面図（1/80）

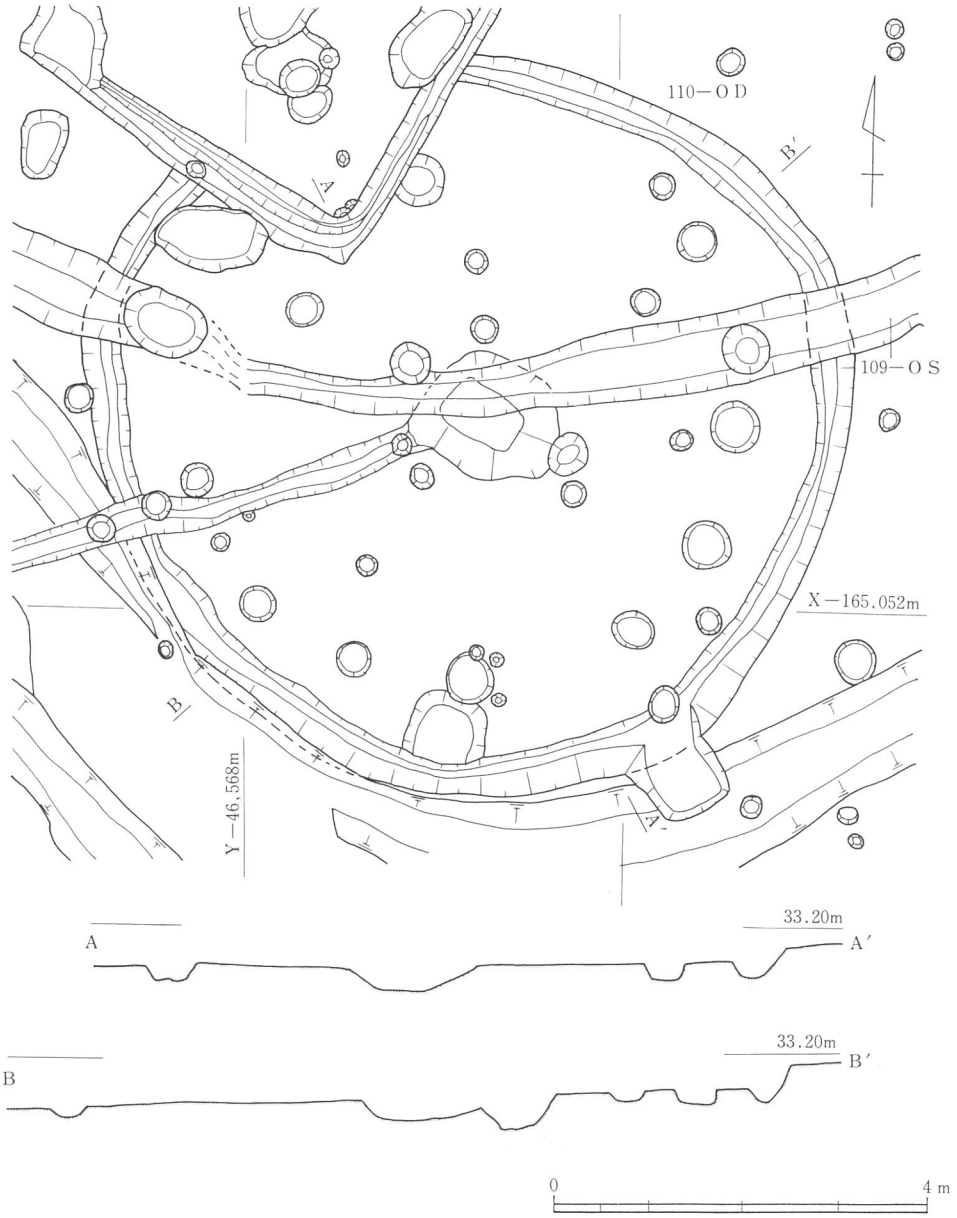
遺構の検出は傾斜地の関係もあって壁体の溝を中心に地山面で行っているため，断面図では壁体縁辺の土層は薄く，竪穴中央付近では厚く記録されている。竪穴の規模はこの壁体の溝の外径で約 4.6mを測る。平面的な記録は竪穴内においても地山面で行われているため断面観察の結果と若干の齟齬をきたしている。壁体の溝は断面図によると竪穴内で地山面よりも0.03～0.12m立ち上がり，幅約0.2m，深さ約0.15mを測る。溝内から炭焼土が検出されており，後述する二次的な火を受けている台石も出土遺物中にみられるが，火災を受けた住居かどうかは判断しがたい。

断面図によると中央の土坑とピットは地山面よりも0.1～0.15m高い位置から掘り込まれており，その高さの付近が床面に近いと思われる。竪穴内のピットは計５個検出されているが，写真等の記録ではいずれも地山を浅く掘り窪めた程度の深さで，床面の高さを考慮して復元的に考えると，ピットの深さは約0.2m程度であったかと思われる。住居にともなう柱穴の構成については不確かであるが，中央の土坑の南北に対応するように位置する二つのピットは径0.5m前後で他のものよりしっかりしている（図版36上段）。



第92図　105－ＯＤ出土遺物（1/4）

竪穴内中央に約1.0×2.1m，復元的な深さ0.5mの不整形の土坑があり，炭・焼土が入っていた。これは炉と考えられるもので，炉の中にいま一つの小さなピットが検出されている。炉内には，横転して上部を破損した壷形土器（365）が検出されている。この壷形土器は煤が付着している。



第93図　110－ＯＤ平面・断面図（1/80）

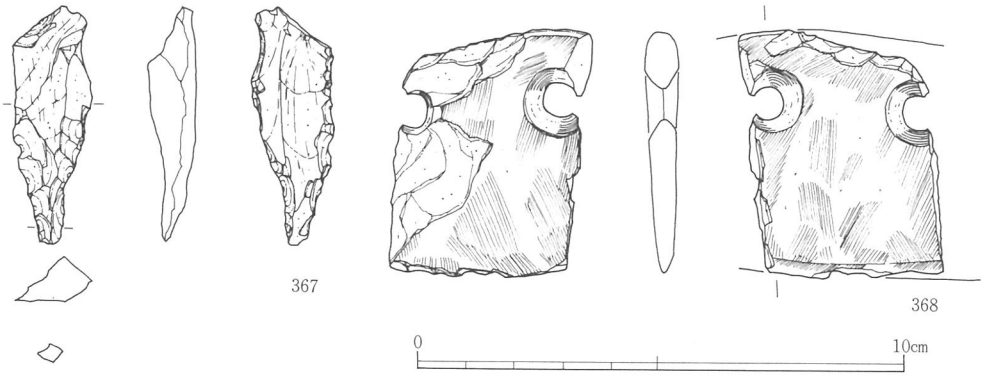
出土遺物は壺形土器の他，高杯形土器脚部・甕形土器底部（364・366），砂岩製の台石（363）がある。台石は二次的な火を受けた形跡があり，検出時５片に割れていた。住居に確実にともなうと判断される壺形土器からみて，この住居の時期は中期末と考えられる。

110－ＯＤ（第93・94図，図版36・126・127）

第Ⅱ区南寄り126－ＯＤと104－ＯＤの中間のＣ05ＭＩで検出された。斜面下方の南西部は偏平気味で少し変形しているものの，ほぼ円形を呈する竪穴住居である。斜面の下方の谷に向かって竪穴の外へ約７ｍ程排水溝が延びている。古墳時代前期の住居によって北端の一部が切られ，さらに古墳時代中期の溝が住居を縦断するように竪穴の一部を削って流れている。その浸食は床面にまで達している。

竪穴の規模は壁体の外側で長径約8.3m，短径約7.8m，壁体のよく残っている北西側で床面から現存高約0.25mを測る。壁体の溝は幅約0.3m，深さ約0.1mを測る。住居内には古墳時代のピット・土坑などを含め多数のピットが検出されており，対応関係は確かめられない部分があるが２個ずつ一対になって計10個程度のピットが住居にともなう可能性がある。一軒の竪穴住居としては柱数が多すぎるようであるが，建て替えの痕跡か時期の違うピットを扱っているのか，壁体の溝等他の痕跡からは判断できない。

床面は東から西に傾斜しており，地山面のレベルは約0.2mの高低差がある。床面中央には径約1.5m，深さ0.5m程の土坑があり，最下層に炭層が認められた。炉と考えられる。この炉から始まる形で西側に流れる溝が検出されている。この溝は排水溝と考えられるもので，竪穴の外まで続いている。排水溝は幅約0.4m，深さ0.1m，総延長9.5m，溝底の高低差は約0.6mを測る。



第94図　110－ＯＤ出土遺物（2/3）

住居内からは甕形土器，高杯形土器などの土器小片多数と磨製石包丁の断片（368）が，また炉の南の床面近くから石錐（367）が出土しているほか，サヌカイト剝片も多数出土している。図示した遺物は２点だけであるが，他に中期後半の様相を示す土器片がかなり含まれている。

住居の時期は特定しがたいもののほぼ該期のものと考えておきたい。

154－ＯＤ（第95図，図版37・106・127）

第Ⅱ区南寄り西縁の谷に面したＣ05ＬＦで検出された円形を呈する住居である。西北側は古墳時代の竪穴住居（153－ＯＤ）に削られ，南寄りにも中近世以降の畑区画溝が横切っている。南西部の一部は調査区外に延びており，全体を検出できていないが，南端は小さな谷に削られ，西側も斜面のため欠失しているようである。北から東にかけて壁体の溝と思われる２条の溝が同心円状に巡り，建て替えがあったと考えられる。

竪穴の規模は外側の溝（130－ＯＳ）の外径で推定約７ｍ前後，内側の溝（154－ＯＳ）の外径で推定約6.5ｍ程度であったと思われる。後世の削平のためか壁体はほとんど残っていないようで，いずれも顕著な部分で0.05ｍ程を測る。130－ＯＳの幅は約0.4ｍ，深さ0.1～0.15ｍ，154－ＯＳの幅0.3ｍ弱，深さ約0.1ｍ前後を測る。154－ＯＳは東側では，はっきりしないが，痕跡的に溝の続きかと思われるものが南端にわずかに認められる。

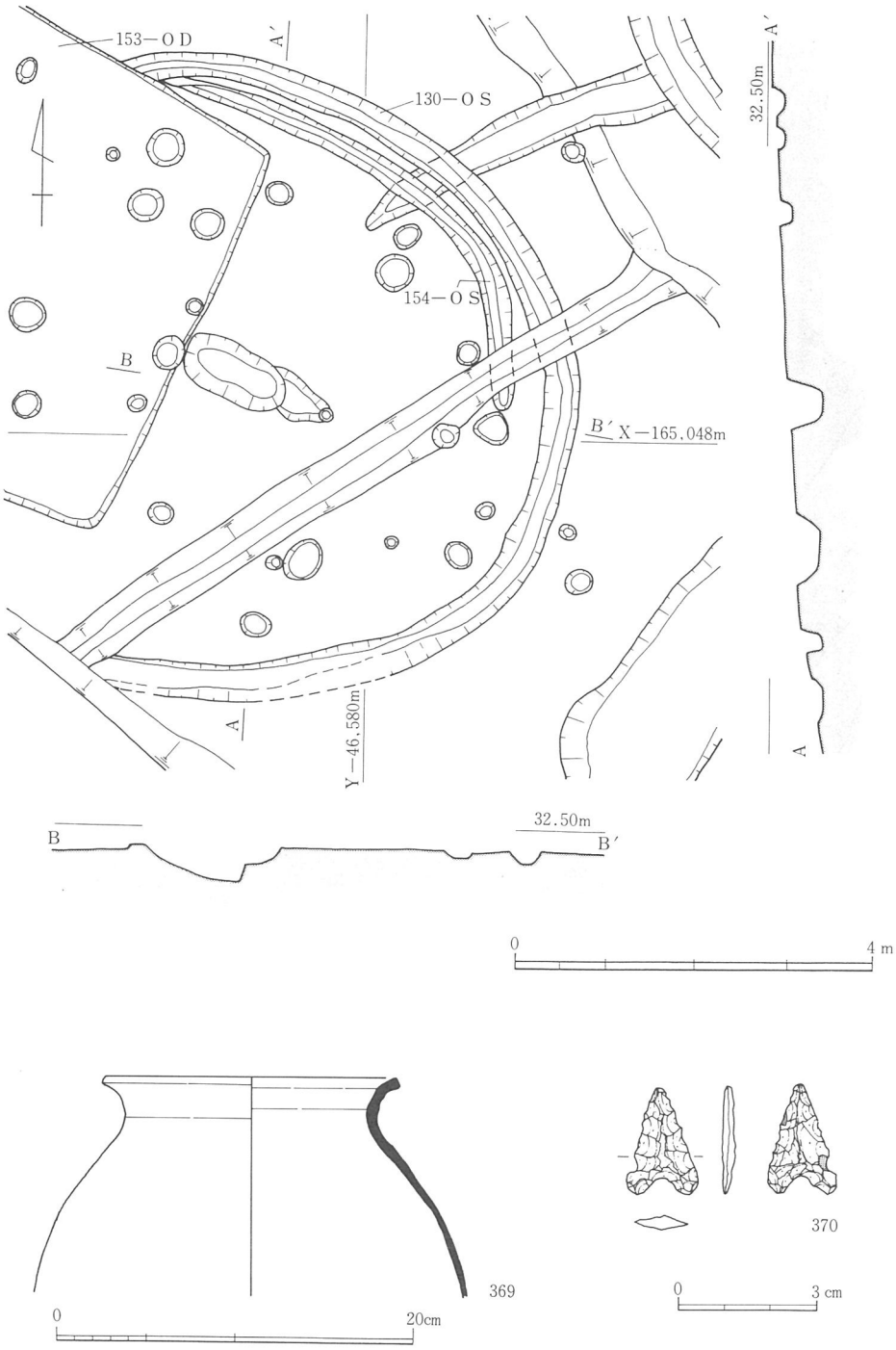
住居を構成する柱穴は，切り合い関係にある153－ＯＤ内検出のものを含めその対応関係に不確実なところがあるが，６～７本程度であったと思われる。柱穴は平均径0.3ｍ前後のようである。

床面は北から南に傾斜しており，約0.35ｍの高低差を測る。床面の中央に長径約1.8ｍ，短径約0.6ｍ，深さ約0.3ｍの土坑があって，炉と考えられる。炉の中央付近の上面で甕形土器（369）が検出されている。

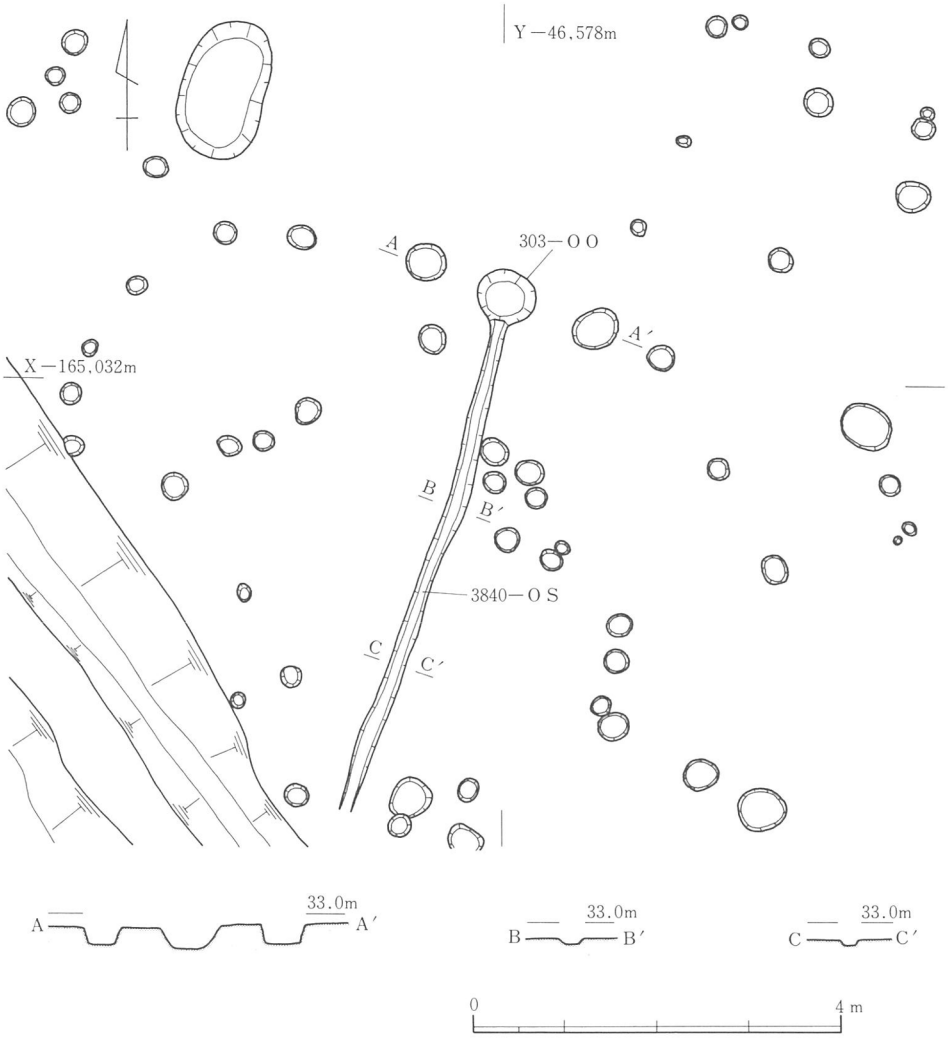
住居内出土の土器は炉内の甕形土器の上半部を除くといずれも小破片で30片程ある。他に石鏃（370）が一点出土している。住居の時期は炉内出土の甕形土器から中期末から後期初頭の時期と考えられる。

303－ＯＤ（第96図，図版37）

第Ⅱ区南寄り，126－ＯＤの北西に隣接してＣ05ＨＦで検出された住居である。後世の削平のためか壁体の溝等は検出されず，炉と考えられる土坑（303－ＯＯ）とこれから延びる長さ5.5ｍの溝（3840－ＯＳ）が検出されたのみである。この形状が隣接する住居の炉と排水溝の関係に近似することから住居と判断した。



第95図　154－ＯＤ平面・断面図（1/80）．出土遺物（1/4，2/3）



第96図　303－ＯＤ平面・断面図（1/80）

303－ＯＯは径0.65m，深さ約0.2mを測り，他の住居で検出されている炉より小さく浅いが，それだけ削平が著しかったことを物語るのかも知れない。第II区で検出されている通常の炉は，地山の検出面でも径１mを越え，深さも0.4m以上ある。建て替え等で二時期の炉が重複していることがあるので平面の大きさは多少考慮の外におくとしても，壁体の溝の底のレベルまで削平を受けている可能性が強く，竪穴内の地山面が10㎝程度は十分削られている可能性がある。とすれば，この土坑の検出規模も本遺跡の竪穴住居の一般的な規格から外れるほどにはならない。

住居を構成する柱穴については削平のためもあって，単に周辺で検出されたピットの位

置関係からだけではその対応を求めがたい。土坑の南北0.5m程離れた位置に径約0.4m，深さ約0.2mの２個のピットが認められる。土坑の本来の規模を考えると，余りに接近した位置になるので疑問が残るが，一応住居に関連する可能性をもっている。

この土坑から南に向けて溝（3840－ＯＳ）が長く続いている。溝の検出規模は幅約0.2m，深さ0.05～0.09m，溝底の高低差は0.05mを測る。地山面がかなりの削平を受けているとすれば，この排水溝の本来の深さはかなりの規模であったと考えられる。

303－ＯＯと3840－ＯＳから数片の土器小片とサヌカイトの剝片が出土している。時期を決め得る資料にはならないが，126・110－ＯＤや後述の103－ＯＤの例からみて中期から後期の中で考えておきたい。

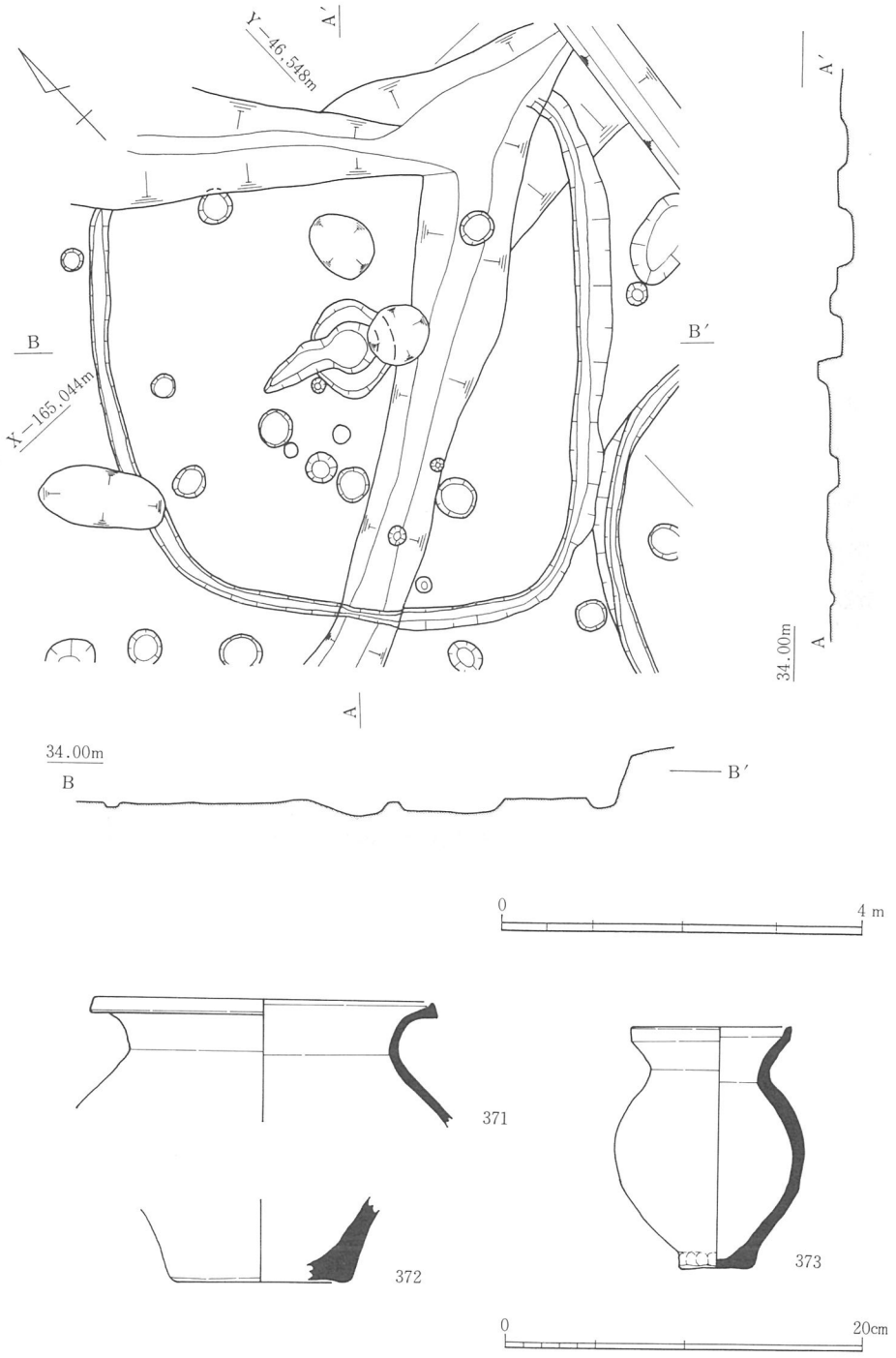
106－ＯＤ（第97図，図版38・106）

第Ⅱ区南寄り東縁Ｃ05ＬＭで105－ＯＤに接して検出された隅円方形の竪穴住居である。北側と中央東よりの一部は近世以降の溝，土坑によって削られている。火災に遭っており，南西側は比較的よく残っていたものの，北西側はおそらく近世以降の時期の削平を受けて，壁体の溝がわずかに残っている程度であった。

竪穴の規模は一辺5.7～6.0m程，壁体のよく残っている部分で高さ約0.3m，溝幅約0.2m，深さ0.1mを測る。南東側では多量の炭化材が焼土に混じって検出されている。炭化材，焼土は壁体に沿って竪穴の中に落ち込むような状態になっており，部分的には壁体の肩を覆っていた。壁体を覆っていた炭と焼土が後の攪乱によるものでないとすれば，焼失時の壁体の高さを残していることになり，南接する105－ＯＤの検出面は本竪穴住居の外側の地表面の状態に近いものであったことになる。仮に105－ＯＤの北縁で削平が行われたとすれば，106－ＯＤの存続期間以前のことであって，この付近の地山の傾斜に特に不自然なところが無いことから，削平は地山面にはほとんど及んでいなかった可能性がある。また105－ＯＤの造作そのものも地山面より上の層で行われていたことになろう。

炭化材は竪穴中央から放射状に，壁体に直交する形で検出されている。よく遺存しているもので材の検出長は0.5m程，検出幅は0.1～0.15mである。圧密を受けているため，材の幅が必ずしもその径を示すわけではないようである。検出状態からみて垂木材が焼け落ちた可能性が強い。

焼土と炭は竪穴内の地山直上にも堆積しており，少なくとも南東部分の高いところでは地山面が床面になっていたと思われる。地山面は南東から北西に向けて傾斜しており，削平の著しい北東部検出面との高低差は約0.2mを測る。



第97図　106－ＯＤ平面・断面図（1/80），出土遺物（1/4）

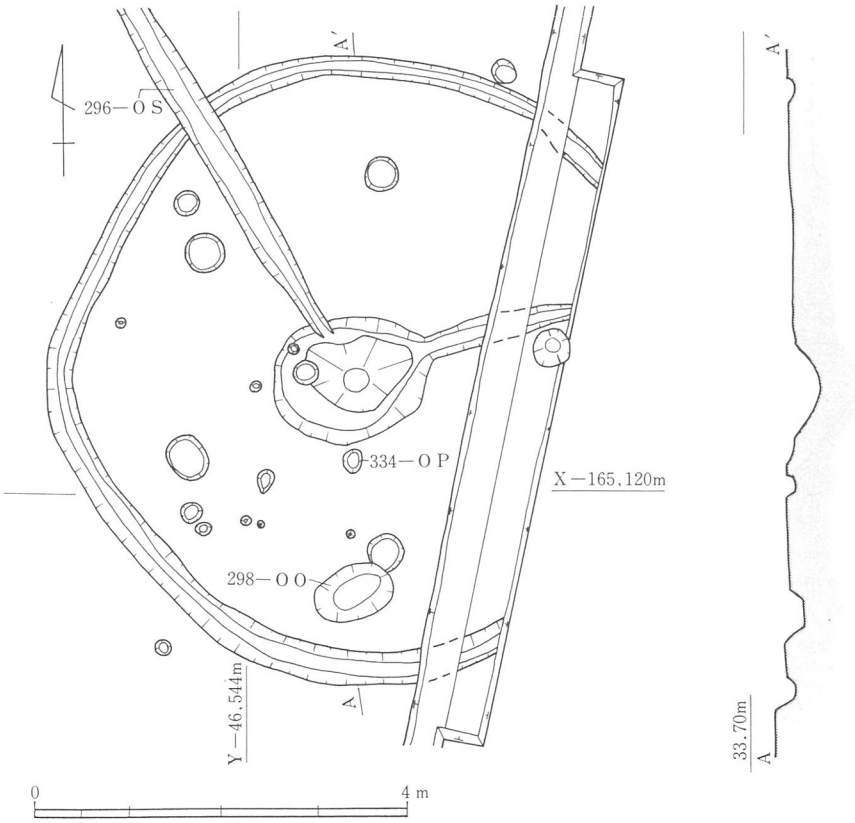
竪穴内には大小11個のピットがあるが，住居を構成する柱は四隅からそれぞれ１ｍ程中に位置する４本で構成されると思われる。柱穴は最も残りのよいもので径0.3ｍ前後を測る。南隅の柱穴の脇の床面から小型の壺形土器（373）が出土している。

竪穴中央部には径0.55ｍ，深さ0.15ｍ程の土坑がある。西に向かって溝状に窪みが延びている。坑底には炭と焼土が認められる。上面が削られているとしても，他の例よりも浅めであるが，炉と考えてよいであろう。西に延びる部分が排水溝の痕跡であるかどうかは不明である。

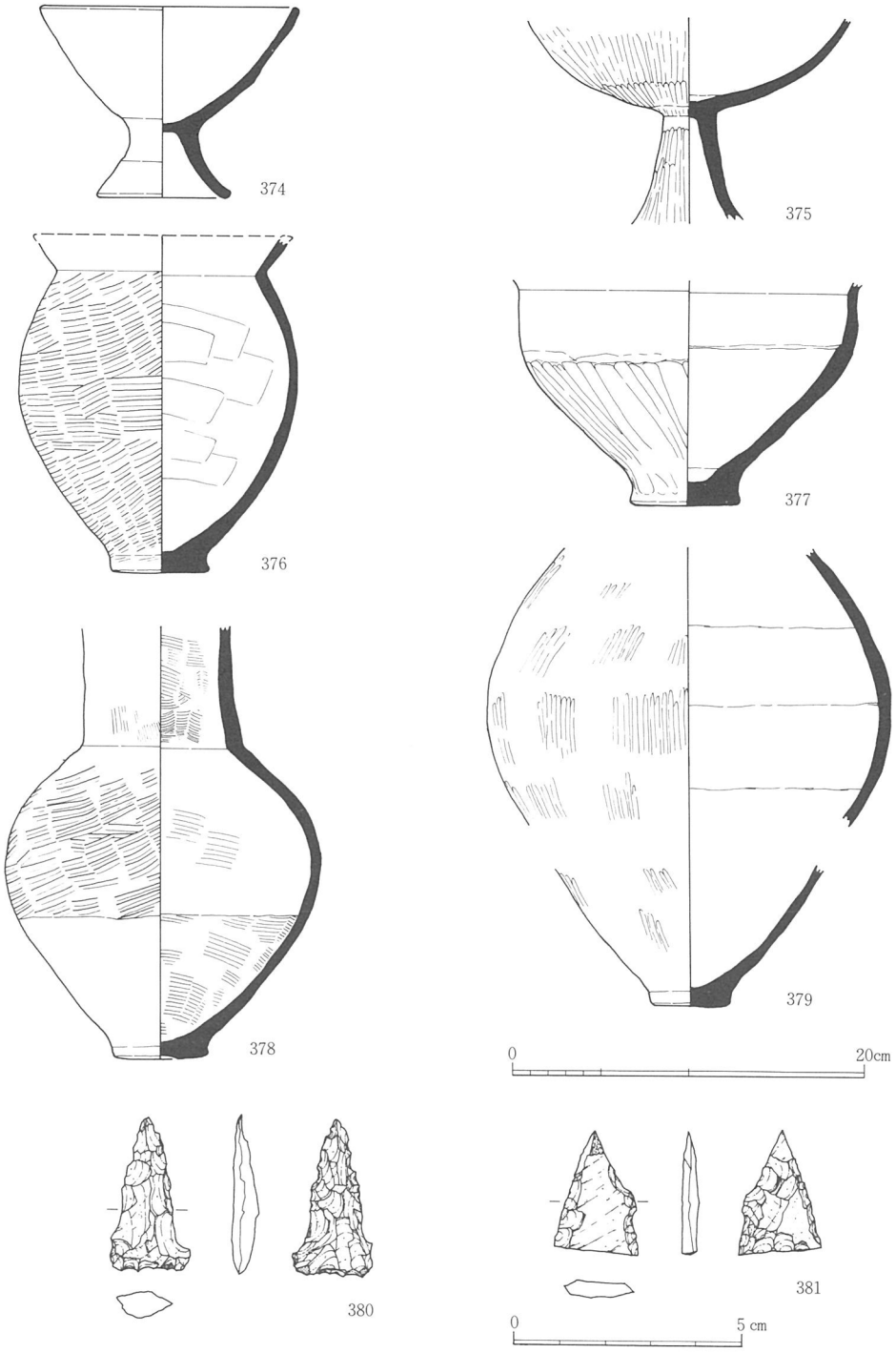
出土遺物には先述の壺形土器の他に甕形土器（371・372）などが少量みられる。南東部分から出土しているもので，火災時の遺物と考えてよいと思われる。甕形土器にやや古い様相がみられるものの，遺物からみた住居の時期は後期初め頃と考えられる。

103－ＯＤ（第98・99図，図版39・40・107・127）

第Ⅱ区中央東縁のＣ05ＥＯの耕土直下で検出された円形の住居である。東側の一部は調



第98図　103－ＯＤ平面・断面図（1/80）



第99図　103－ＯＤ出土遺物（1/4．2/3）

査区外に続いている。この付近は傾斜の方向が西から北向きに変わり，さらに調査区外では緩やかに東に下がっていく，丘陵の小さな尾根筋先端部に当たっている。そのためかこの住居では他の住居の排水溝の方向と異なって，東の方向に流れ出るように排水溝が検出されている。壁体の溝は調査区内では全周しているが，壁体の上部が表土直下で検出されていることから上部は相当の削平を受けていると考えられ，南側では壁の立ち上がりをわずかに観察できた程度である。また，竪穴内の北側に長径0.8mほどの古墳時代の土坑と中央から北西方向に流れる古墳時代の溝が重複している。

火災を受けたと思われる住居で，遺構上面の検出時に壁体の溝部分と南西から北東にかけて炭と焼土の広がりが帯状に観察された。その下部には焼土塊，炭化材が検出されている。特に壁体の溝に沿って壷形土器などの完形品が集中的に認められた。

住居の規模は壁体の溝の外径で約6.8m，壁体の現存高はよく残っているところで0.1mを測る。壁体の溝幅は平均約0.3m，現存の深さ0.04～0.08mを測る。

床面の地山の傾斜は南西から北東にかけて低くなり，0.15m程の高低差がある。竪穴内の地山面検出のピットの状況から住居は５本柱で構成されていたと思われ，それぞれ壁体の溝の外側から0.8m程内側に寄った位置で検出されている。柱穴はいずれも径0.4m前後，深さは0.2m程である。

床面中央には長径1.6m，短径1.3m，深さ0.3mの土坑があり，下層に炭，焼土が含まれており，炉と考えられる。炉からは東に向かって幅約0.3m，深さ0.08～0.15mの排水溝が延び，調査区外へ続いている。

住居内出土の遺物は炉のすぐ北の柱穴（334－ＯＰ）内，炉内，排水溝を中心に少量の土器片，サヌカイト剝片，石鏃などがみられた他，壁体の溝から完形に近い土器と石鏃等が出土している。壁体付近の土器はおもに溝肩から溝内に落ち込むような状態で炭化材，焼土，焼土塊と入り混じって検出されている。各種の土器７個体分がみられ，北側の二箇所では外面に平行タタキをもつ甕形土器（376）と内面にハケ目を持つ壷形土器（378），高杯形土器（375）が，西側では胴下半部に縦方向のヘラミガキを持つ鉢形土器（377）と壷形土器の底部（379）がそれぞれ個体ごとにまとまって出土した。379の壷形土器の胴部分は南西の柱穴の近くで検出されており，底部と地点は離れているが同一個体と思われる。いずれも壁体のごく近くに置かれていたものが，火災に会って材が崩壊する際に溝の中に落ち込んだ結果と思われる。374の台付き鉢形土器は334－ＯＰで出土している。

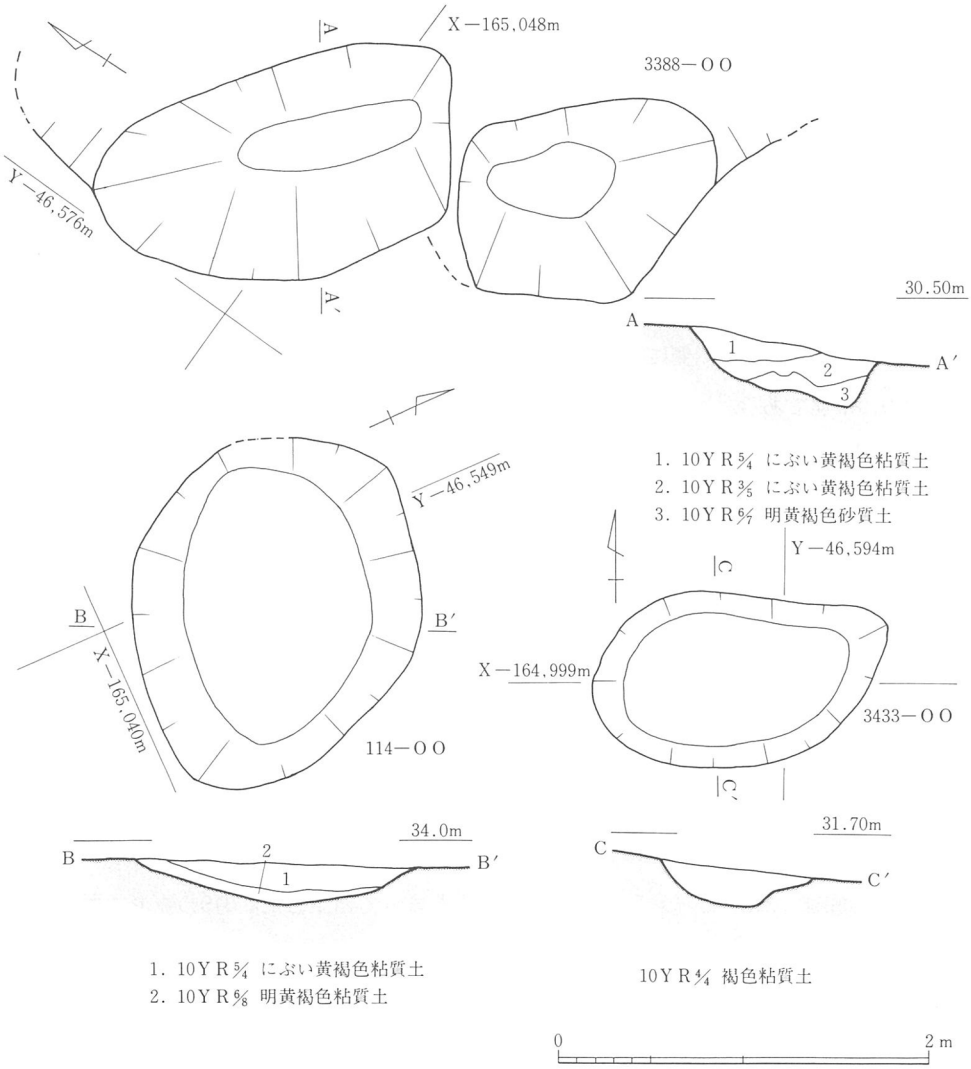
これらの出土遺物から住居の時期は後期前半と考えられる。

２．土 坑

弥生時代の土坑は第Ⅱ区の全体にわたって検出されている。いずれも不定形のもので分布も規則性はみられないが，竪穴住居の縁辺に点在する傾向がある。袋状を呈するものはなく，浅いＵ字形の断面を持つものが多い。ここには示さなかったが，北西隅に検出された竪穴住居の縁辺にも数基まとまって検出されている。

114－ＯＯ（第100・101図）

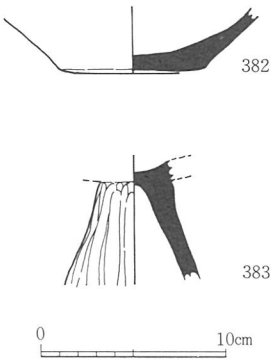
第Ⅱ区中央付近東寄りのＥ05ＪＭで検出された楕円形の土坑である。後期前半の竪穴住



第100図　114・3388・3433－ＯＯ平面・断面図（1/40）

居106－ＯＤの北２ｍ程の所に位置する。西側は小さなピットで肩の一部を切られている。上部は削平を受けていると思われ，その度合については不明であるが，検出面での長径約2.0m，短径約1.6m，深さ約0.2mを測る浅いすり鉢状を呈する。

埋土は二層に区分され下層の西南部は検出面にのぞいている。上下両層とも黄褐色系の粘質土である。土坑内からサヌカイト片２点の他，壺形土器底部・高杯形土器などの遺物が約90片出土している。いずれも小片のため時期の確定は困難であるが，弥生後期に属すると考えられるものである。



第101図　144－ＯＯ出土遺物（1/4）

出土遺物の内容からこの土坑の時期は弥生後期と考えておきたい。

3433－ＯＯ（第100図）

第Ⅱ区北寄りのＫ25ＹＢで検出された楕円形の土坑である。弥生後期と古墳時代の二時期の竪穴住居が重複している可能性の強い3406－ＯＤの東約３ｍの所に位置する。周辺には他に数基の弥生時代に属すると考えられる土坑が点在している。この土坑の南北に接した位置にも２基の不整形の土坑があり，これを切って作られている。後世の上部の削平については明らかでないが，検出面での長径約1.5m，短径約1.0m，深さ0.2mを測る。すり鉢状を呈するが南側は二段に掘り込まれている。南から北に下がる傾斜地にあるため南北の肩で約0.1mの落差がある。

埋土は単一で褐色の粘質土である。出土遺物には壺形土器の底部をはじめとする25片の土器小片がある。後期の様相を持つ。

3388－ＯＯ（第100図）

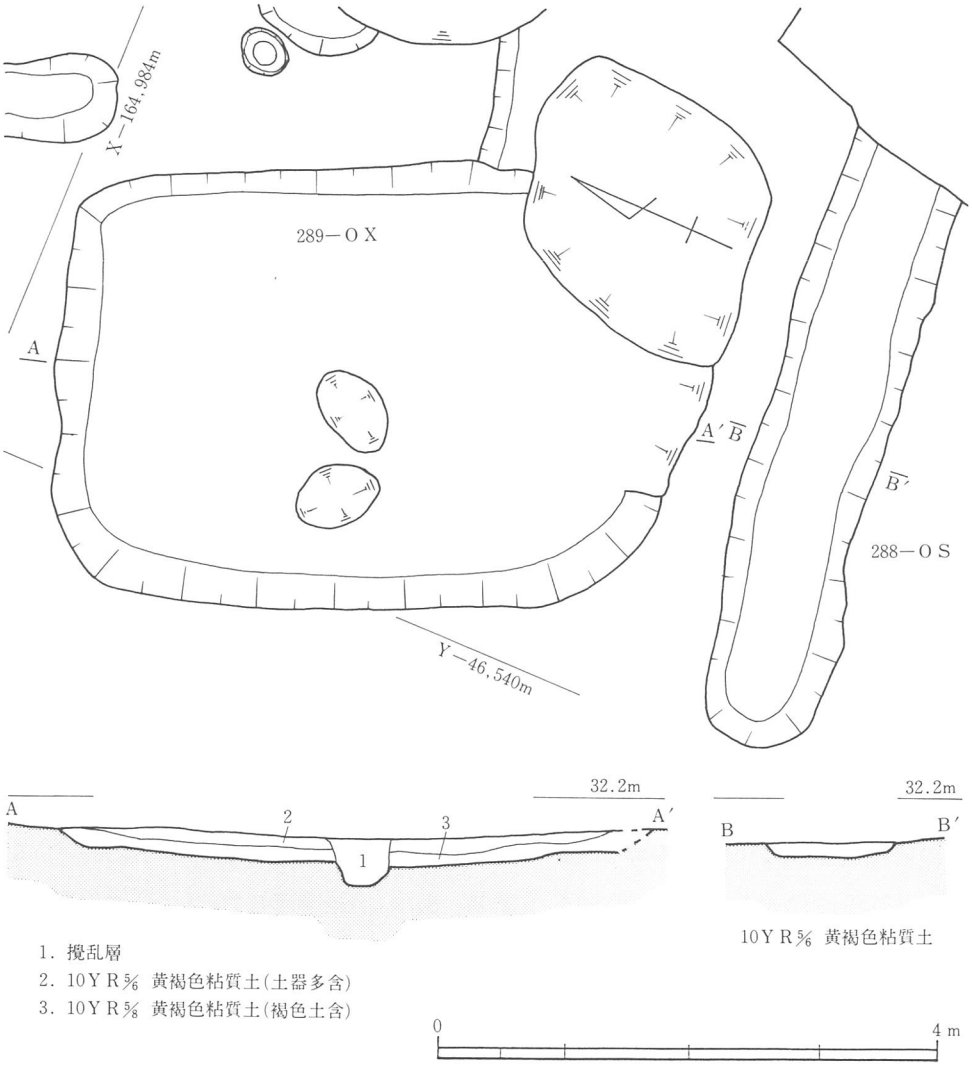
第Ⅱ区南寄りのほぼ中央，中期の大型の竪穴住居が集中するＣ05ＭＧで検出された不整形の土坑である。154・126・110－ＯＤからそれぞれ３ｍほど離れた中央に位置する。土坑の東側は近世頃の畑の区画溝や細長い土坑に切られ，北側にも古墳時代の溝109－ＯＳや楕円形の土坑が錯綜して本土坑を切っている。図はこれを整理して示したものである。東から西に下る傾斜地に立地しているため，両側で0.1m強の落差がある。長径約1.5m，短径約1.0m，深さ約0.15mを測る。

埋土は三層に分かれ，多少の凹凸はあるものの水平な堆積をしている。黄褐色系の粘質土，砂質土を基調としている。サヌカイト１片と少量の土器片が出土している。

3．溝，その他

288－ＯＳ（第102・103図の392～394，図版108）

第Ⅱ区北東部のＫ25ＷＰで検出された溝である。この付近は北に緩やかに傾斜する斜面になっており，溝は等高線に沿って走る。東側は調査区外に続いている。その延長線上に位置する調査区隅の三角形の拡張部分では古墳時代の土器溜りがあり，その地点では弥生土器片も出土しているものの溝の痕跡は確かめられていないので，溝自体は多少等高線に沿ってカーヴしている可能性がある。



第102図　288－ＯＳ，289－ＯＸ平面・断面図（1/60）

上部はかなり削平を受けている可能性があり，現存の検出全長は約2.5m，幅0.25m，深さ0.05mを測る。東端はやや深くなり，西端の溝尻は丸く終わっている。溝の断面形は浅いU字を呈している。

溝内からは完形の高杯形土器の他，水差形土器・壷形土器（392～394）などの少量の土器片が，おもに検出部の中央付近から出土している。壷形土器（393）は口縁上面に櫛目の刺突文を巡らせ，端面に凹線を施している。水差形土器は粗い簾状文を現存部で三段に巡らせている。高杯形土器は椀状の杯部の口縁外面に三条の凹線を施している。

出土遺物に若干の時期差を認め得るが溝の時期は中期後葉と考えておきたい。

289－ＯＸ（第102・103図の384～391，図版41・108）

第Ⅱ区北東端のＫ25ＶＰで検出された隅円方形の遺構である。288－ＯＳのすぐ北に接している。上面は近・現代の耕作時の削平を著しく受けており，さらに南東部の一部と，中央付近から西半部は新しい時期の植木穴などによって削られているため遺構の遺存状態は芳しくないが，ほぼ全体の規模を知ることができる。

現状では南北約2.5m，東西約1.8m，深さ0.1mを測る浅い長方形を呈する。底面は平坦である。東西の長さについては底面の西半部が一段低くなっていてこの部分まで削平等の影響が及んでいる可能性も考えられるため，検出面が本来のプランの全体的な形状をとどめているのかどうか判断できない。埋土は二層に細分され，上下両層とも黄褐色系の粘質土を基調としている。

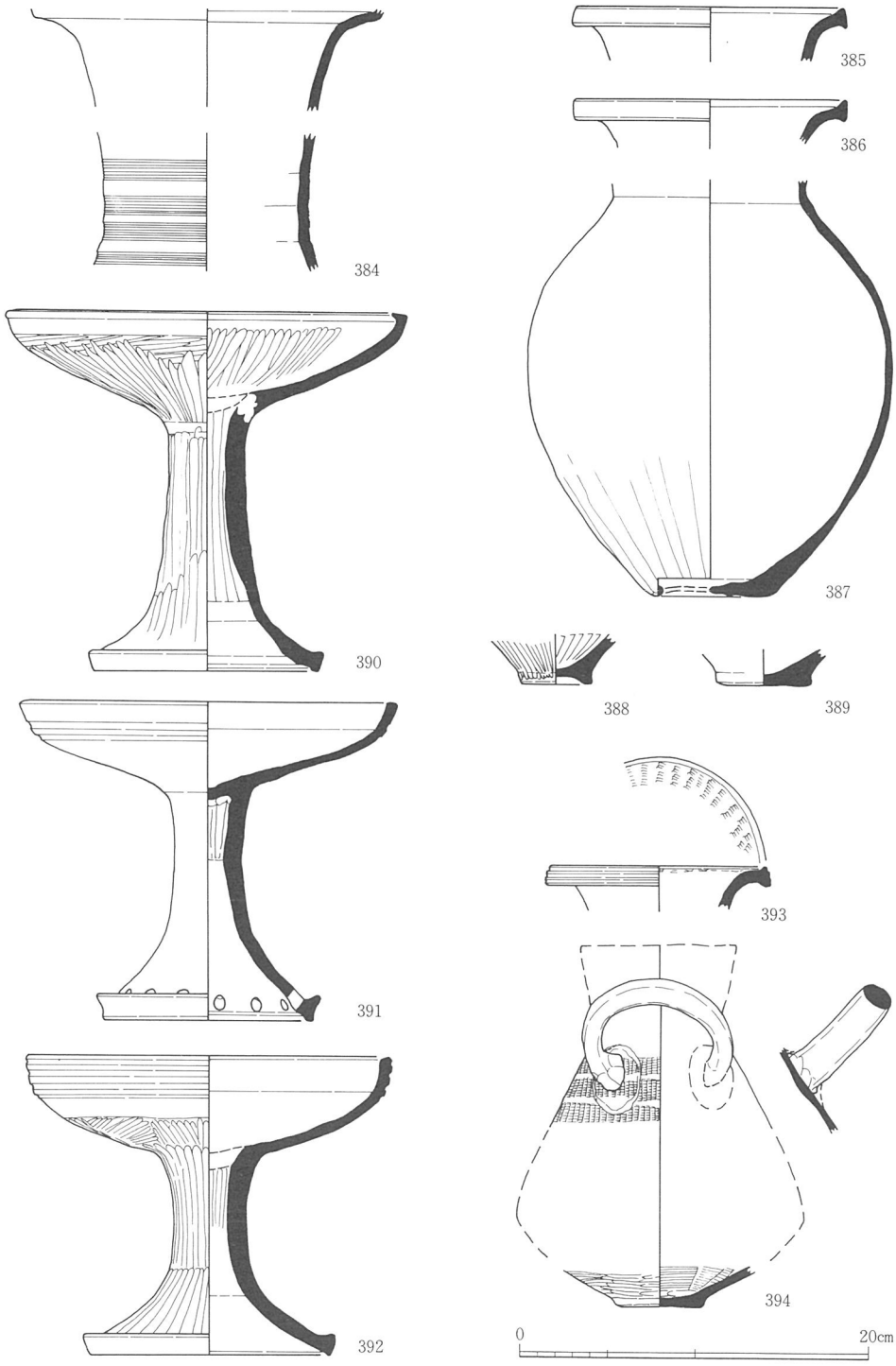
遺構内からほぼ完形の高杯形土器２個体と壷形土器がまとまって出土しているほか甕形土器などの破片約150片が検出されている。壷形土器には長い頸部に櫛描き直線文を四段に巡らせているものがある（384）。高杯形土器は二種あり，口縁端を内側につまみ出して肥厚させ，杯部内外面に放射状にヘラミガキを加えているもの（390）と，口縁がやや外方に立ち上がってその下寄りに凹線を施し，脚裾部に円形の透かし孔を施したもの（391）とがある。全体としては中期後葉の様相を持つ。

本遺構については竪穴住居の痕跡の可能性もあるが，結論は保留しておきたい。

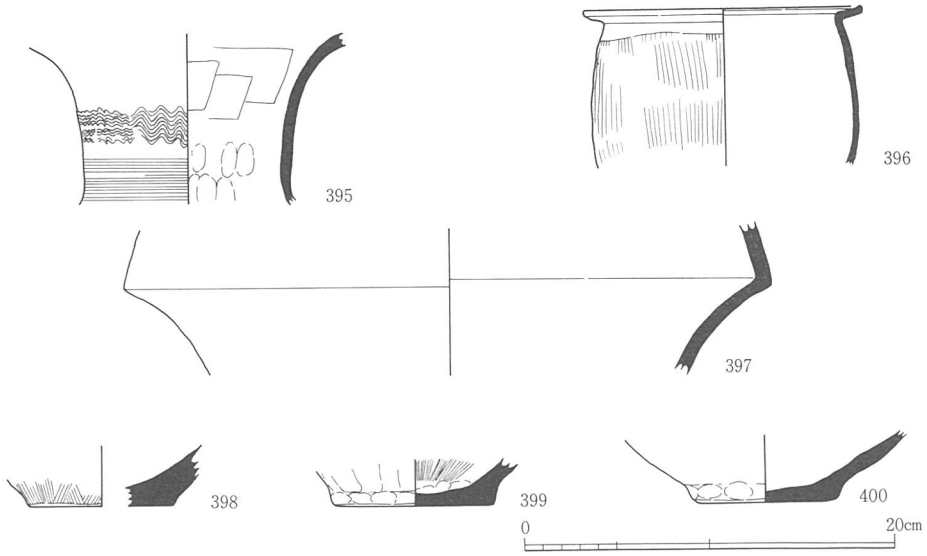
133－ＯＳ（第133図・付図２，図版108）

第Ⅱ区中央のＣ05ＨＪで検出された溝である。東から西に下がる傾斜面のほぼ等高線に沿って直線的に走る。検出全長約９ｍ，幅約0.5m，深さ0.1mを測る浅い断面U字形の溝である。埋土は単一で黄褐色系の砂質土である。

出土遺物には口縁立ち上がり部が屈曲して内傾する壷形土器（397），櫛描きの波状文と



第103図　288－ＯＳ，289－ＯＸ出土遺物（1/4）

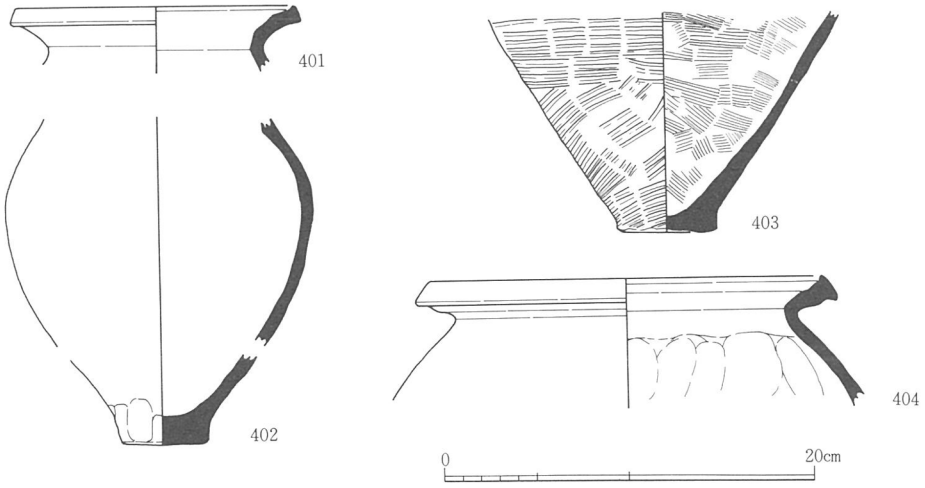


第104図　133－ＯＳ出土遺物（1/4）

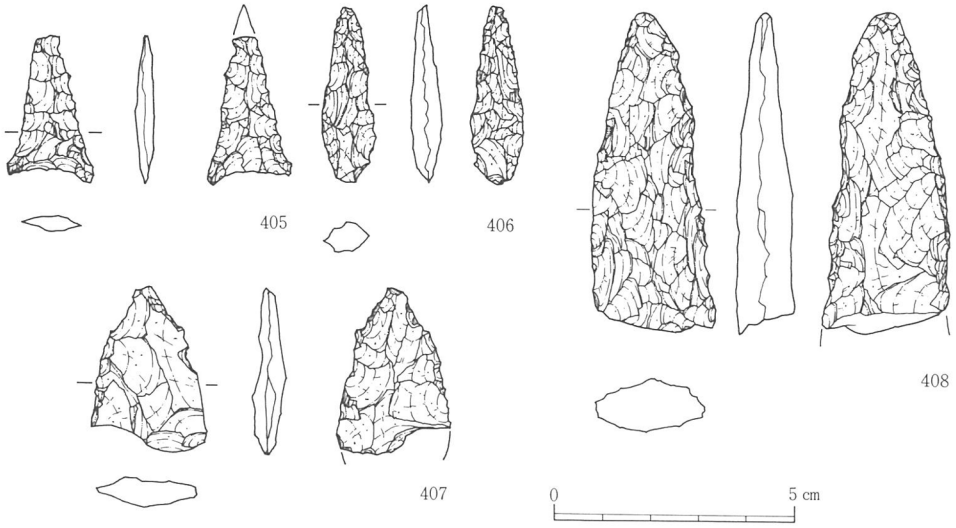
直線文を長頸部に巡らせた壷形土器（395），端部を肥厚させず丸く納めたままの口縁部を持つ甕形土器（396）などが約40片ある。

702－ＯＰ（第105図の401～403・付図２，図版109）

133－ＯＳの南３ｍのＣ05ＪＫに位置する径約0.2mほどのピットである。この南北にほぼ0.5m間隔で同規模の３基のピットが検出されている。壷形土器１個体（401・402）と



第105図　702・3221－ＯＰ出土遺物（1/4）



第106図　147・470・459－ＯＰ，149－ＯＳ出土遺物（2/3）

平行タタキを持つ甕形土器（403）が重なって検出されている。

3221－ＯＰ（第105図の404・付図２）

第Ⅱ区南寄り中央のＣ05ＰＬで検出されている径約0.3mのピットである。口縁端部を肥厚させ，胴部内面に押圧痕をとどめる甕形土器（404）が出土している。

147－ＯＰ（第106図の405・付図２，図版127）

第Ⅱ区中央のＫ25ＨＨで検出された径約0.4mを測るやや大型のピットである。炉と排水溝だけが検出された303－ＯＤの東に位置するが，炉からは８mほど離れており，住居にともなうピットではない。サヌカイト製の石鏃（405）と剥片が３点出土している。

470－ＯＰ（第106図の407・付図２，図版127）

第Ⅱ区中央南寄りのＫ05ＫＪで検出された径約0.3mのピットである。粗い剥離を持つサヌカイト製の石槍先端部（407）が出土している。

459－ＯＰ（第106図の408・付図２，図版127）

第Ⅱ区南寄り東端のＣ05ＯＮで検出された径約0.2mのピットである。弥生土器片１点と残存長6.5㎝，厚さ1.2㎝を測るサヌカイト製の打製石槍（408）が１点出土している。

149－ＯＳ（第106図の406・付図２，図版127）

第Ⅱ区中央のＣ05ＪＥにある検出長約４mの溝である。溝南端で少量の土器片とサヌカイト製の柳葉形の打製石鏃（406）１点が出土している。

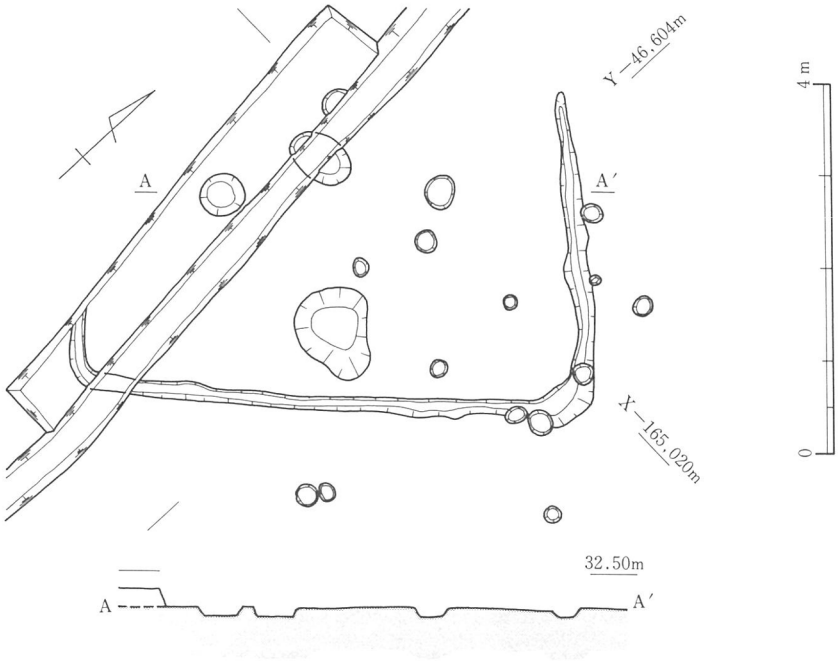
第２項　古墳時代

１．竪穴住居

竪穴住居は布留式期に相当する古墳時代前期のものと，多くの掘立柱建物と同時期になると考えられる中期のものとに分けられる。前期の竪穴は第Ⅱ区中央付近と西端にあり，中期のものは斜面下方の西端に位置している。

3402－ＯＤ（第107・108図，図版42・109）

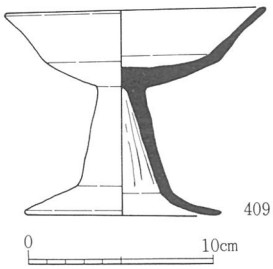
第Ⅱ区西縁のＣ04ＦＸに位置する隅円方形の竪穴住居である。西側は一部調査区外に続いている。北西に下がる傾斜地に立地し，表土直下で検出されているため遺構の残り具合



第107図　3402－ＯＤ平面・断面図（1/80）

いは悪く，地山面の高い南東半部では壁体の溝が半周しているものの，低い方の北西半部では遺存していない。南東半部も壁体の溝が辛うじて残っている程度である。

このすぐ東に隣接して幅0.2m，深さ0.1m弱の弧状に続く浅い溝が検出されている。この溝も竪穴住居の壁体の溝になる可能性があるが，現状ではそのような遺構とは断定できない。



第108図　3402－ＯＤ出土遺物(1/4)

竪穴の規模は一辺5.7m，壁体の溝は幅0.15m前後，深さ0.1m程である。断面図では溝は竪穴内で地山面よりも0.05m程立ち上がっており，地山面より高いところで竪穴がつくられていた可能性もしくは貼床があった可能性が考えられる。

竪穴内には計７個のピットと２個の土坑が検出されている。このうち南東よりの４個のピットと土坑は溝肩の検出面に相当する地山面より高い位置で検出され，北寄りの３個のピットと土坑は地山面で検出されている（図版42)。地山を覆う土層が薄いので両者の遺構の検出状態がそのまま時期差を示しているのかどうかは解釈の余地がある。中央付近に対になって認められた２個のピットと土坑以外は地山面にその痕跡をとどめていない。

105－ＯＤのように地山面よりも上層で住居が形成されていたとすれば，これらのピットの内にも住居を構成していた柱穴がある可能性を持つが，ここでは地山面に深く痕跡をとどめる２本のピットが本住居の主柱穴を構成していたと考えておきたい。

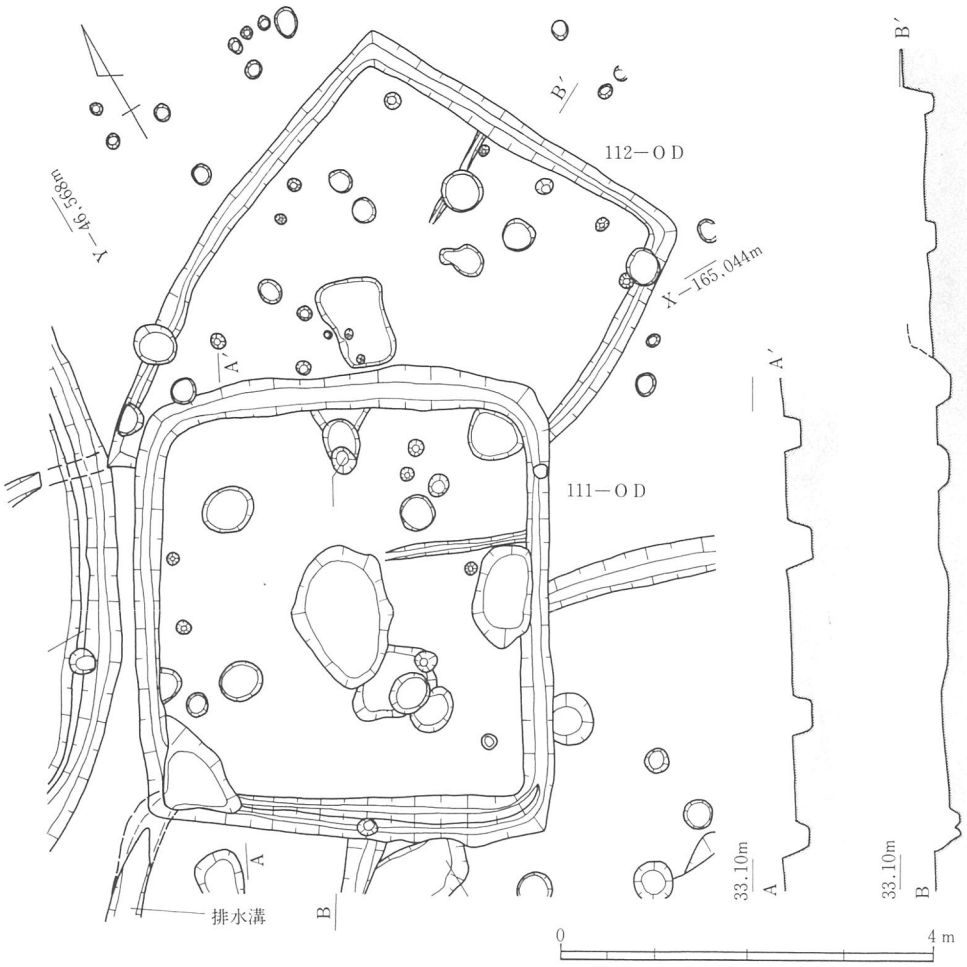
竪穴内の２基の土坑のうち，中央の土坑は地山面で検出され現存径0.7m弱を測り，深さは0.05m以下で極めて浅い。南寄りの土坑は地山よりも上の層から掘り込まれており，長径１mを測る。図版（42下段）では坑底に少なくとも２個のピット状の痕跡が認められ，肩部から底にかけて１個体分の土師器高杯（409）が出土している。遺構検出面が表土直下であったため住居との関係は確実ではないが，住居にともなうもの，あるいは住居の下限を示す遺構と考えられる。

住居に関連し得る遺物は409の１点だけで，ここではこの高杯から判断して布留式期の住居と考えておきたい。

112－ＯＤ（第109・110図の414～419，図版43・44・126）

第Ⅱ区中央南寄りのＣ05ＫＩに位置する方形の竪穴住居である。西半を111－ＯＤに切られている。この重複部分を除けば概して遺構の残存状況はよい。北西角から西の斜面下方に向かって126－ＯＤの中を走る溝状の遺構があり，本竪穴の排水溝である可能性がある。

南北4.4m前後を測り，竪穴内は壁体検出面から0.25～0.3mほど地山を削り込んでいる。地山面は西側がやや低いものの比較的平坦に作られている。竪穴内には三層の埋土が認められ，壁体の溝は断面図によると地山面より0.15～0.2m高い中層上面から掘られている。壁体の溝は幅約0.2m，深さ約0.2～0.25mを測る。壁体の溝肩からみるとこの中層が床面を構成しているようであるが，中央付近の炭，焼土混じりの浅い窪みは下層の上面から形成されている。この炭と焼土は本住居に伴う炉の可能性もあることから，貼床等の床面の判断にはいま少しの問題が残されている。壁体の溝内には径0.1m前後の浅い窪みが連続

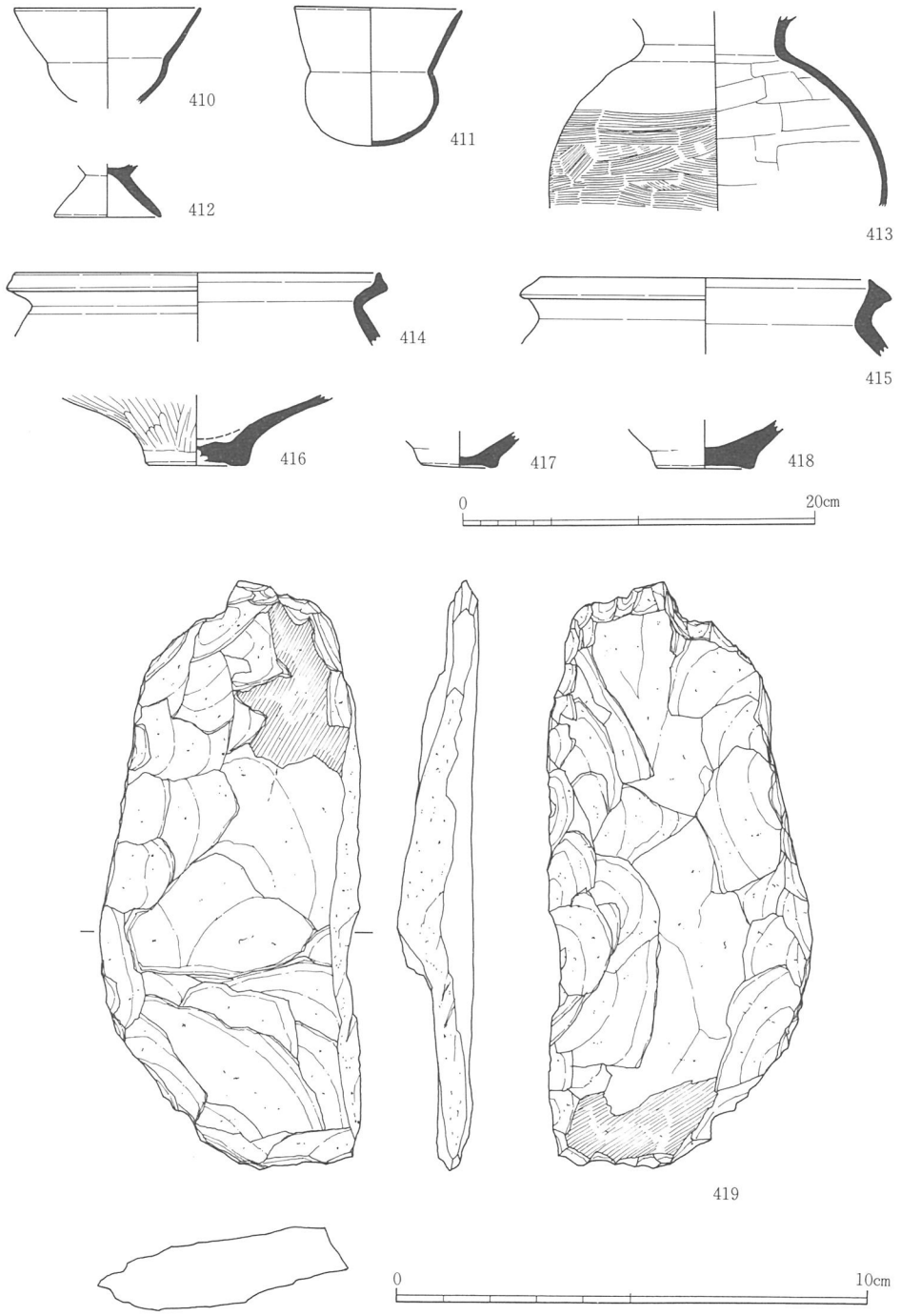


第109図　111・112－ＯＤ平面・断面図（1/80）

的に検出されている（図版44下段左）。

竪穴内には大小の多数のピットが検出されているが，このうち東寄りの大きめの５個のピットは埋土の上面から認められ，地山面に達しているのは南寄りの２個だけである。住居を構成する柱穴数については明らかではないが，中央東寄りのしっかりした１個をもとにして，西側は116－ＯＤで削平されていることも考慮して２本程度の主柱穴で構成されていたと考えておきたい。

住居の北西角は111－ＯＤとの切り合いもあって正確には検出できていないが，平面的にみても少しばかり西に突出したようになっている。この部分から126－ＯＤの中をよぎるように小溝が続いている（第86図参照）。調査途上の観察，記録から考えて，この溝は



第110図　111・112－ＯＤ出土遺物（1/4，2/3）

111－ＯＤに伴う溝と同様な排水溝であったと考えられる。壁体の一部をトンネル状に穿った溝であったかどうかは現状では不明である。溝幅約0.2m，検出長約７ｍを測る。

住居内出土遺物は少なく，埋土，壁体の溝部分などの遺物には弥生中期末から後期にかけての甕形土器などの小片（414～418）のほか砂岩系の石包丁未製品（419）が含まれているのみであった。この遺物からだけでは住居の時期は弥生中期になる可能性を持つが，むしろ整然とした方形のプランを持つこと，本竪穴を切って作られている111－ＯＤの形状と近似することなどから，古墳時代前期の住居と考えておきたい。

111－ＯＤ（第109・110図の410～413，図版43・44・109）

第Ⅱ区中央Ｃ05ＬＩで112－ＯＤ，110－ＯＤと一部重複して検出された方形の住居である。切り合いのある部分を除いて全形がほぼ完存し北西角から一部トンネル状に作られた排水溝が斜面下方に延びている。この排水溝は一部109－ＯＳに切られている。平面図では顕著でないが断面図と調査途上の記録等ではほぼ同じ位置に重なって，同じ規模の建て替えの痕跡を持っている。

4.5×5.0mの規模を持ち，最もよく残っている部分で検出面から竪穴内地山面までの深さ0.3mを測る。壁体の溝は南北両辺では２本の溝が顕著に認められ，内側の方が深く掘削されている。東西両辺にあってはやや不明瞭で，写真から判断すると西側斜面下方で痕跡的に認められる。南北両辺にある溝の前後関係については断面観察では不確かな要素もあるものの，内側の溝の方が後出的である可能性が強い。

住居プランは東西方向が南北方向よりも幅が狭いので，建て替えの際の造作は主に南北両辺において行われた可能性がある。東西両辺の溝の改変の跡が不明瞭なのもそのためと考えられる。

竪穴内の地山面は，住居の東西にみられる弥生時代と古墳時代の２棟の住居よりも深く削り込まれている。断面観察では竪穴内の地山面は多少の凹凸があるものの，ほぼ水平で厚さ0.04mほどの地山混じりの貼床らしい面が認められる。

竪穴内には大小10数個のピットが認められるが，このうち四隅からそれぞれ１ｍほど中に位置する４個で主柱穴が構成されていたと思われる。東側の南北二箇所ではそれぞれ１個づつのピットが対になって認められる。建て替えに伴う柱穴と思われるものである。柱穴掘方は0.4m前後を測る。ほかに床面には土坑状の窪みが数箇所みられるが，いずれも極めて浅く，出土遺物から別の時期の土坑の可能性もあり，住居に伴う施設であったかどうかはっきりしない。

北西隅の部分は壁体の溝や床面よりも一段深くなった三角形の窪みが掘られ，ここから壁体の下部を穿って，トンネル状に竪穴の外に続く排水溝を設けている（図版44下段右）。排水溝は少なくとも壁体の外0.6mほどまではトンネル状に掘られており，そこからはオープンな溝になっていた可能性がある。幅約0.4m，深さ0.2～0.5m，総延長約９ｍを測る。この溝からも少量の土器片が出土している。

出土遺物は多くないが，土師器壷・小型丸底坩（410～413）が埋土から出土している。412は残片の遺存状態から脚部と判断した。砂粒の少ない均質な胎土を持ち，小型丸底坩の台脚部になるかと思われる。住居覆土の遺物であるが，これらの遺物から判断して本住居の時期は布留式期と考えておきたい。

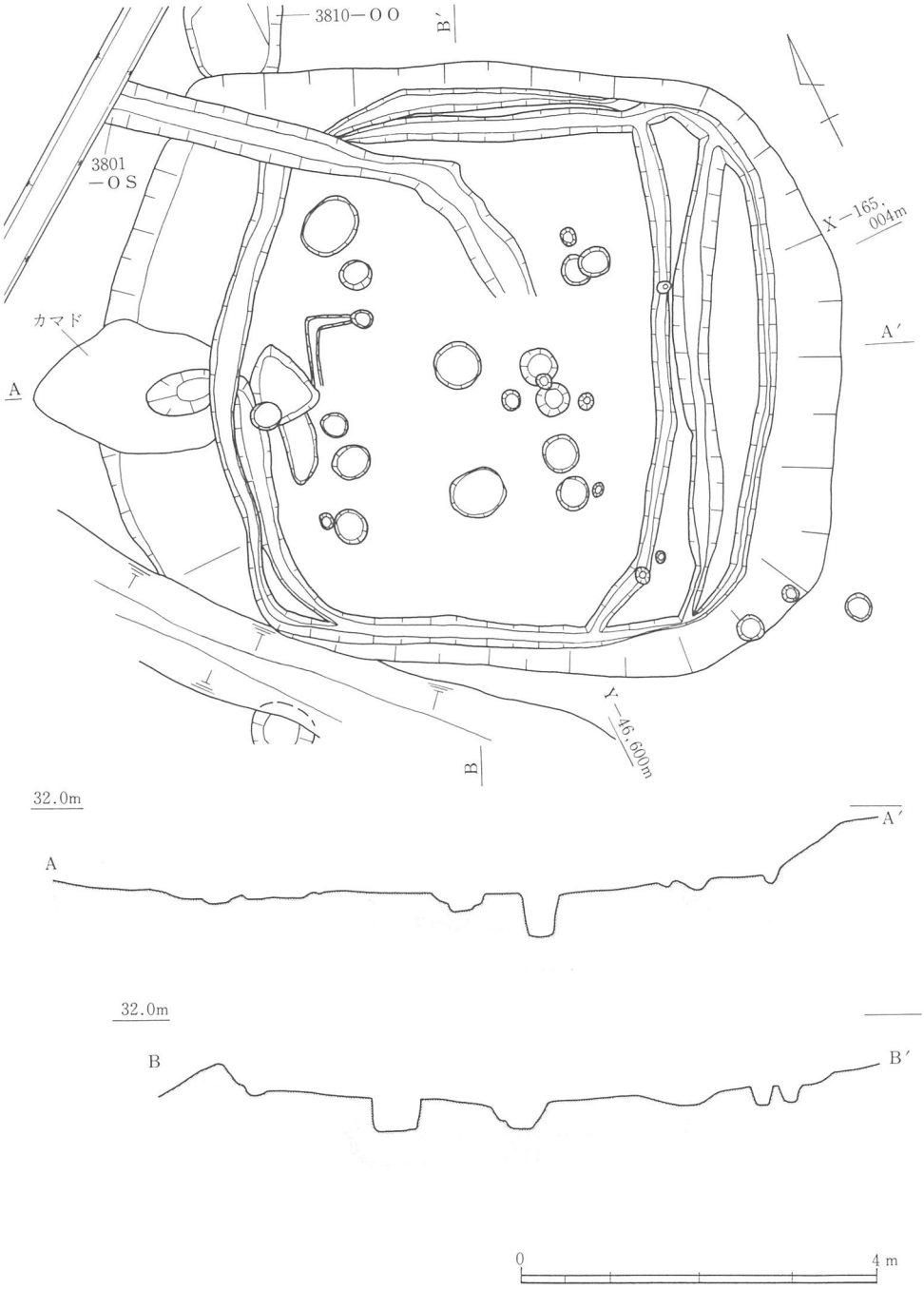
3406－ＯＤ（第111～114図，図版45・46・110～114・127）

第Ⅱ区北端のＣ05ＡＡで検出された方形のプランを持つ住居である。ほぼ同じ位置に弥生時代後期の住居と古墳時代中期の住居が重複していた可能性があり，さらにほぼ同じ時期の溝が錯綜していたため，調査中には個々の遺構を十分に弁別して調査できていない。したがってここで一括記載することにしたい。

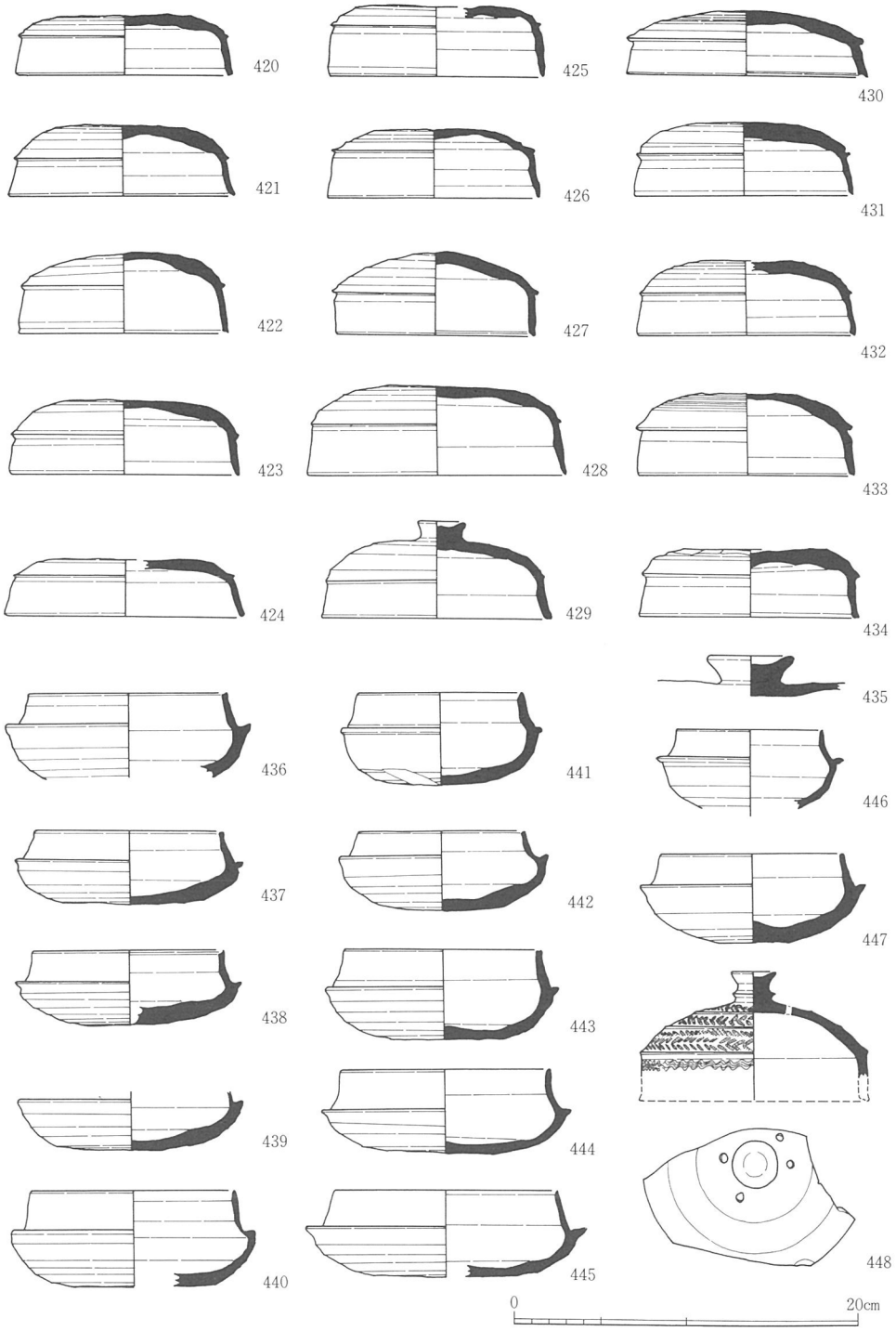
平面的に検出した住居の規模は東西約8.2mないし7.8m，南北7.0m弱の長方形を呈する。南東から北西に下る斜面に位置するため見かけの深さはかなり異なるが，東側は上部が緩やかに傾斜し，0.7mほど内側に入ったところで壁体の溝が認められ，この部分で0.2m下がり，さらに西側に0.2m下がる。地山面での観察では東側では３条，北側と西側の一部で２条，南側で１条の壁体の溝を検出している。それぞれの対応する溝の肩部のレベル差は0.04mほどで竪穴内地山面の最大の高低差は0.2m弱である。

住居の重複は弥生時代，古墳時代のものを含めて少なくとも三時期のものがあると考えられるが，個々の対応については確定することはできない。しいて対応させるとすると溝の内側の地山面の高さなどから東側の外側２条の溝と西寄りの幅の広めの溝で一つの時期を，西端の壁体と東寄りの最も内側の溝とを一時期の住居と考えることもできる。

竪穴の中央付近から北に続く溝は竪穴平面の検出時頃は不明瞭な痕跡しか認められていなかったもので掘削中の写真などにも記録されていたが，検出時には十分にその形状を認識できないまま掘り下げ，床面近くで図化したものである。溝の南端付近は上部が広がり，多量の須恵器が検出されている（図版46下段）。このためこの溝の須恵器と竪穴に本来ともなった須恵器とは必ずしも十分に峻別できていないが，両者の遺物には時期差は認められない。確認面での溝幅は0.3～0.5mを測る。



第111図　3406－ＯＤ平面・断面図（1/80）



第112図　3406－ＯＤ出土遺物１（1/4）

壁体の溝はいずれも幅0.2～0.35m，深さ0.1～0.5m前後を測る。西側壁体の溝の一部からは弥生後期の壷形土器と高杯形土器が検出されている（471・472）。東側の壁体の溝付近からは須恵器杯・高杯などが出土している。

北辺の壁体中央付近には幅1.5mほどを浅く二段に掘り窪めた炉があり，その中央付近に炭・焼土が堆積していた。これは据え付けの竈と考えられるが，通常みられる竈外縁に粘土等で作られた堤は検出されていない。ただ中央の小さい窪みの周縁は東側が部分的に高くなっており，土師器高杯（466），須恵器甕などの破片が検出されている。竈から１ｍほど離れた床面付近からも須恵器杯が出土している。この須恵器出土地点と竈との間にある溝は，竈との近接性からみても別時期の溝と考えるのが妥当で，先後関係については把握できていないけれども，弥生時代の住居に伴う壁体の溝と考えた方が自然であろう。床面中央付近にも炭，焼土の認められる部分がある。炭の広がりはやや不明瞭な点があるが，弥生後期の住居の時期の炉と考えておきたい。

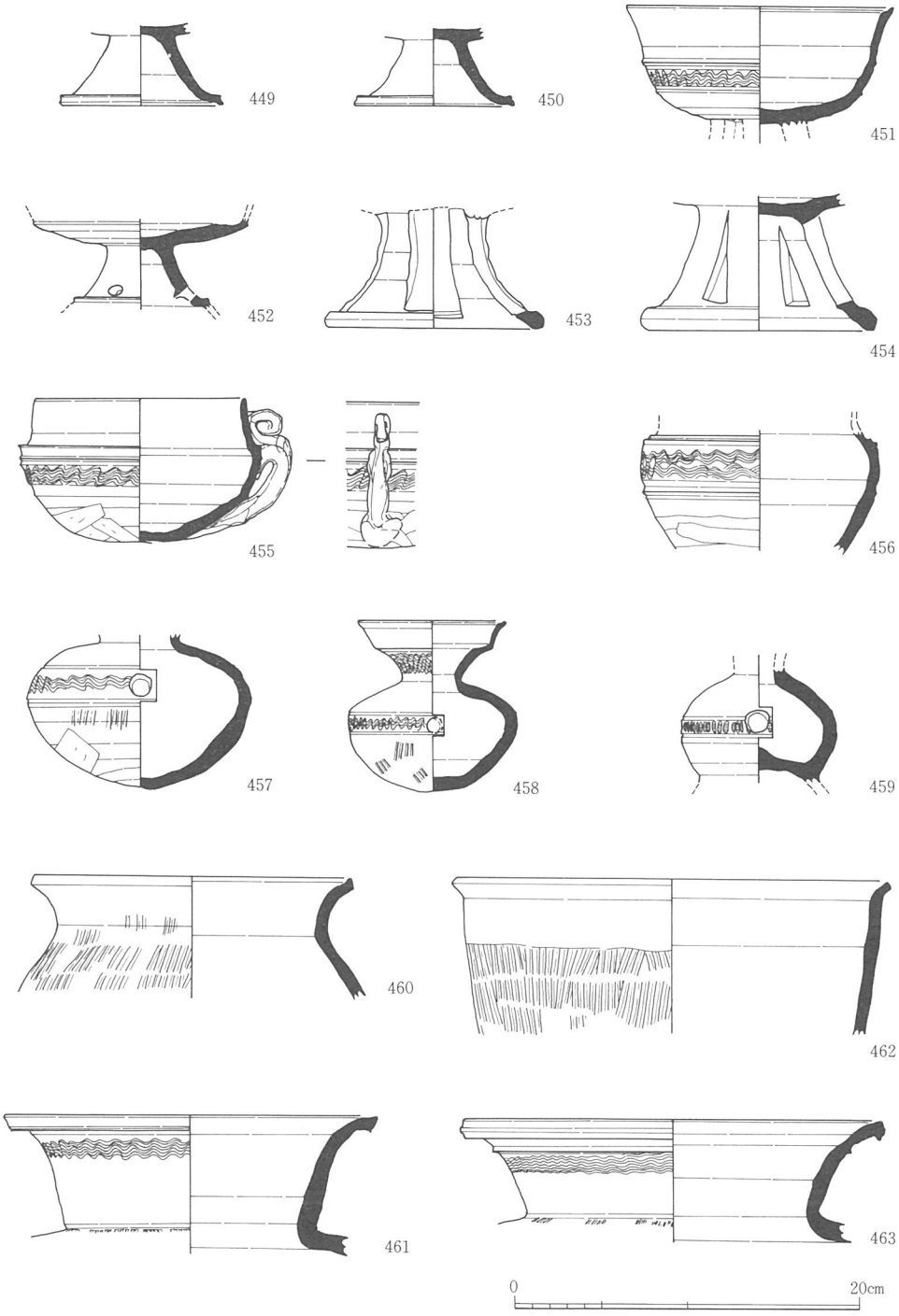
床面には多数のピットや窪みが検出されている。個々の対応関係は明らかにできないが外よりの四箇所に３ｍ前後離れて位置するピットはいずれかの時期の住居の主柱を構成する可能性が強い。

出土遺物については前述のように複数の遺構にともなったと考えられる遺物があり，個々には峻別できていない。したがって全体をまとめて紹介するが，基本的には弥生後期の土器と古墳時代の土器に分かれる。

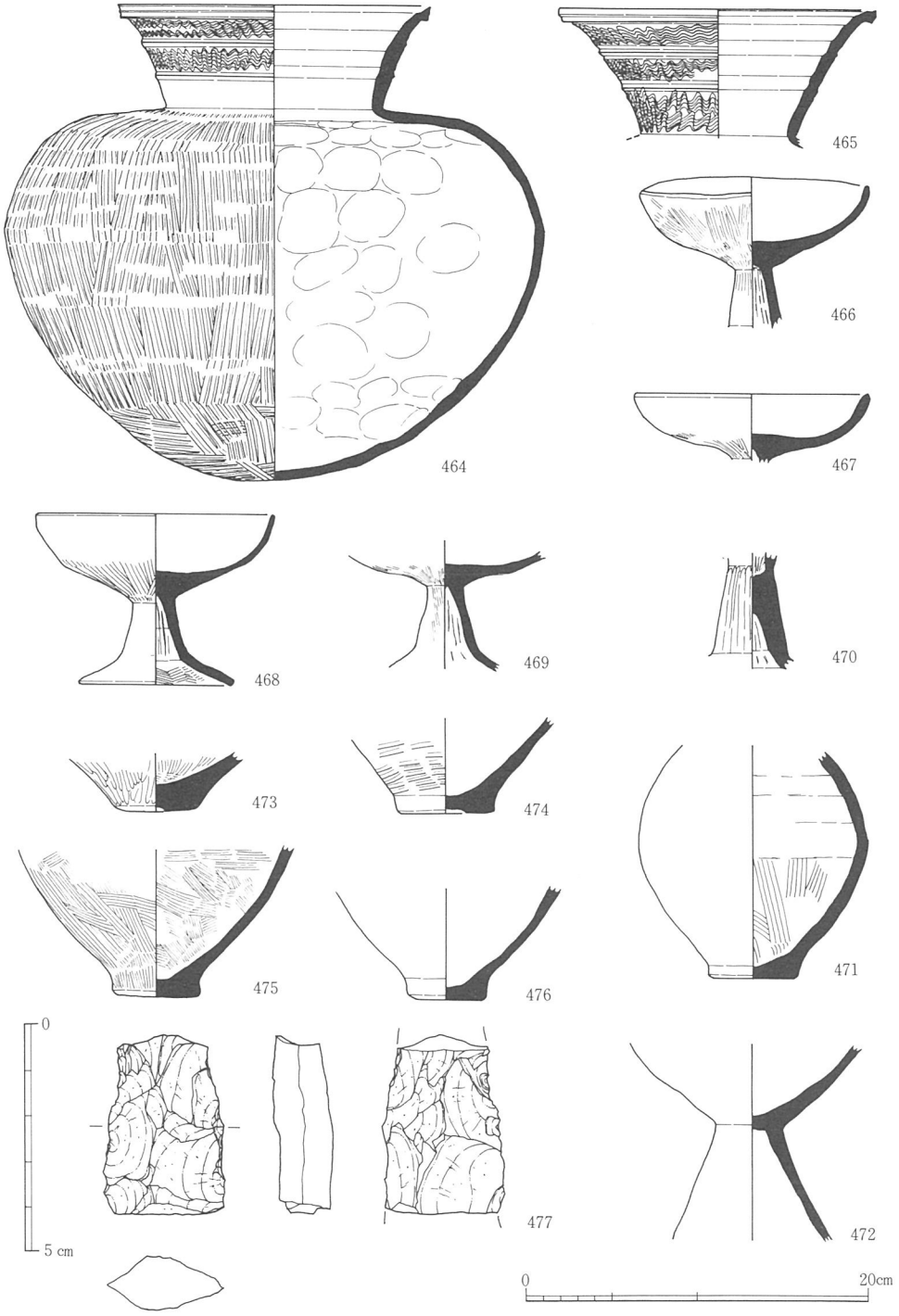
弥生時代の土器は竪穴の南寄りと西寄りに多く認められ，壷形土器，甕形土器，高杯形土器などがある。471～477は西側の壁体の溝の中から出土している。平行タタキのある底部もみられ，いずれも後期前半に属すると考えられる。

古墳時代の土器は竪穴の中央から西縁を走る溝付近に集中的にみられ，確実に壁体の溝にともなうものもあった。また竈付近でも少量検出されている。各種の須恵器と土師器のほか甕（460）と甑（461）と思われる陶質の土器がある。肩部・体部に平行タタキを施している。448は特異なつまみを持ち，表面は砂粒の目立つ胎土で，陶邑周辺の従来の資料にはみられない例である。搬入品の可能性を持っている。ほかに底部の一部を粗く削る把手付き椀（455），台付きの甕（459）が出土している。

全体的にみてこれらの須恵器は陶邑編年のＩ型式２～３段階にあたる。遺物の上からは溝3801－ＯＳと古墳時代の住居とには時期差を認められない。弥生時代の遺物については当該期の住居があった可能性の強いことを指摘しておきたい。



第113図　3406－ＯＤ出土遺物２（1/4）



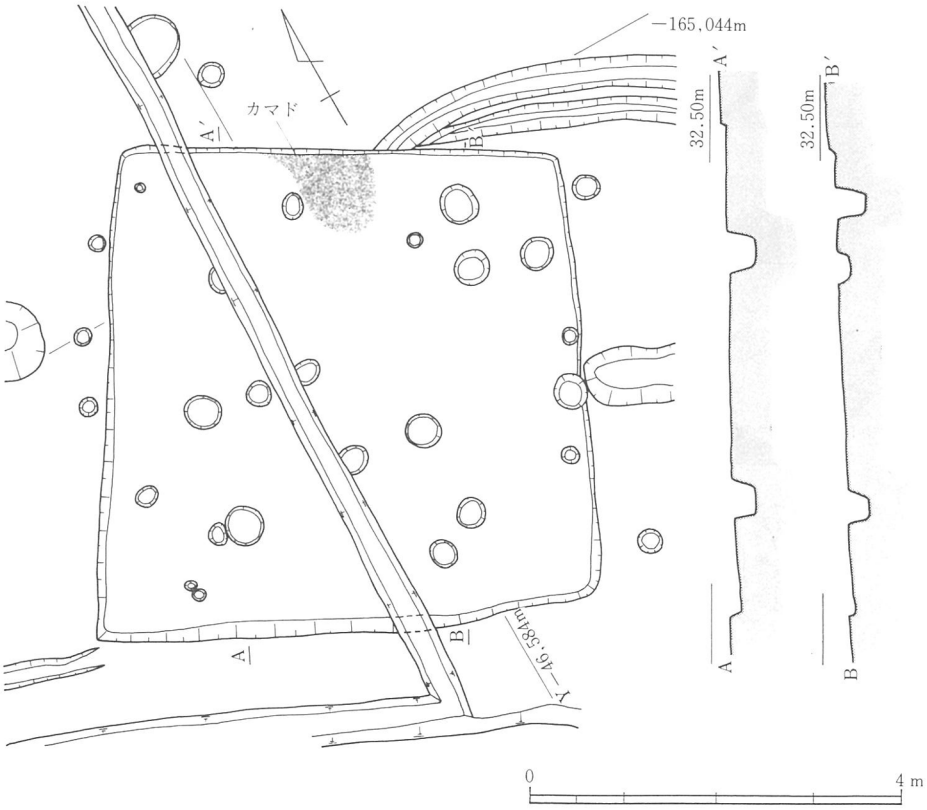
第114図　3406－ＯＤ出土遺物３（1/4，2/3）

153－ＯＤ（第115・116図，図版47・114・115）

第Ⅱ区中央西寄りのＣ05ＬＤに位置する方形の竪穴住居である。東側は154－ＯＤと重複している。遺構の残りは浅く南西隅に一部不明瞭な部分があるものの，ほぼ全形を検出できた。一辺4.8～5.4m，深さ0.04～0.1mを測る。北東から南に向かって緩やかに傾斜し，竪穴内検出地山面の高低差は0.1mほどである。南西隅がはっきりしないのはこの部分のすぐ西に細い溝が走りその前後関係等が十分に把握できなかったためである。壁体の溝は確認できなかった。

北辺の中央部には壁体にかかるように焼土などの含まれた面があり，その中央部に491をはじめとする朝鮮半島系の軟質土器，二次的な火を受けたと考えられる土師器片などがまとまって検出されている。竈の痕跡と考えられ，竈に残っている支脚ないしは竈に据えられていた土器の潰れた痕跡の可能性も考えられる（図版47下段）。

床面には多数のピットが認められる。このうち四隅からそれぞれ1.5mほど内側にある

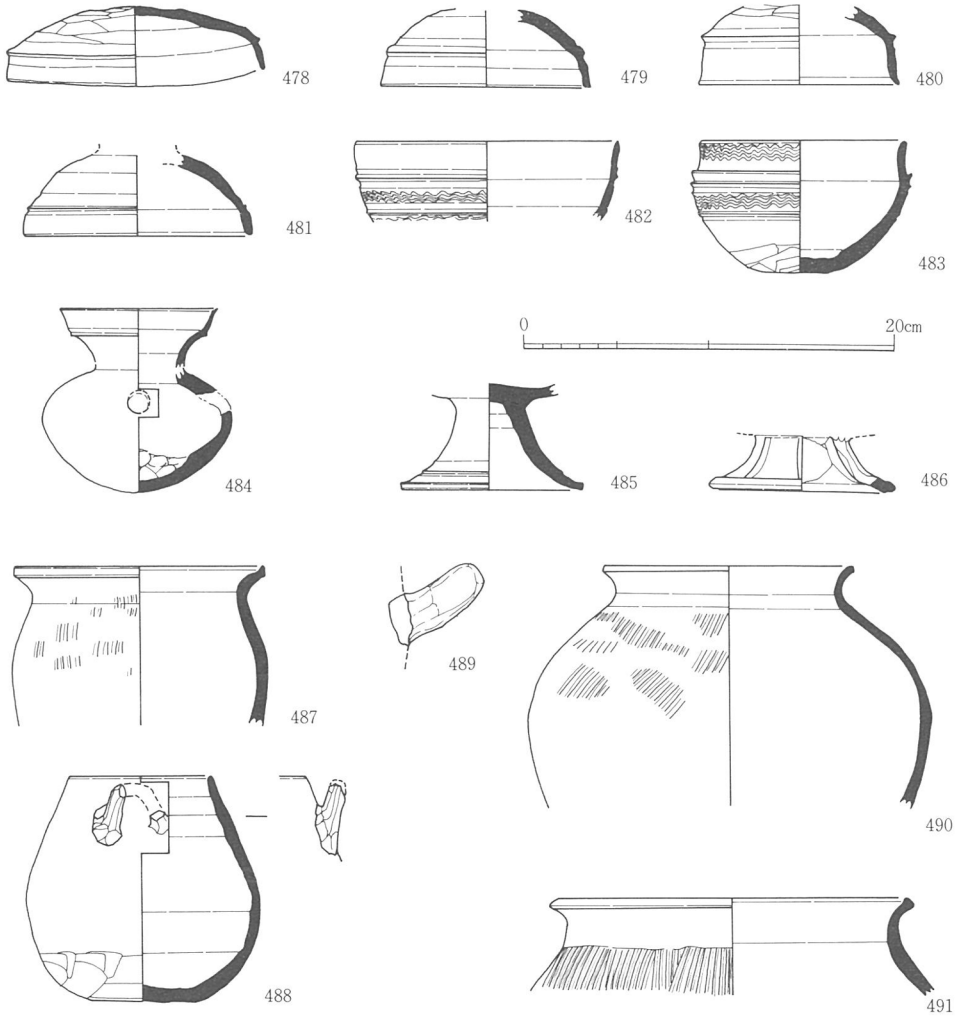


第115図　153－ＯＤ平面・断面図（1/80）

４個のピットが住居の主柱を構成すると思われる。柱穴間の距離は2.5m前後である。柱穴の掘方は0.3～0.4mを測る。竈西寄りの床面から須恵器杯が出土している。

出土遺物は前述のほかに須恵器椀・高杯・甕や平行タタキをもつ朝鮮半島系の甕・壺・環状把手付きの坩がある（487～491）。このうち491は軟質で，487・490は堅く焼きしまっている。坩は平底で体部の最大径付近をナデ，下半の一部をケズっている。一部を欠いているので把手が対になるかどうか不明である。遺物の時期は須恵器から陶邑編年のⅠ型式２～３段階に当たると思われる。

これらの遺物から住居の時期もこの時期に考えておきたい。

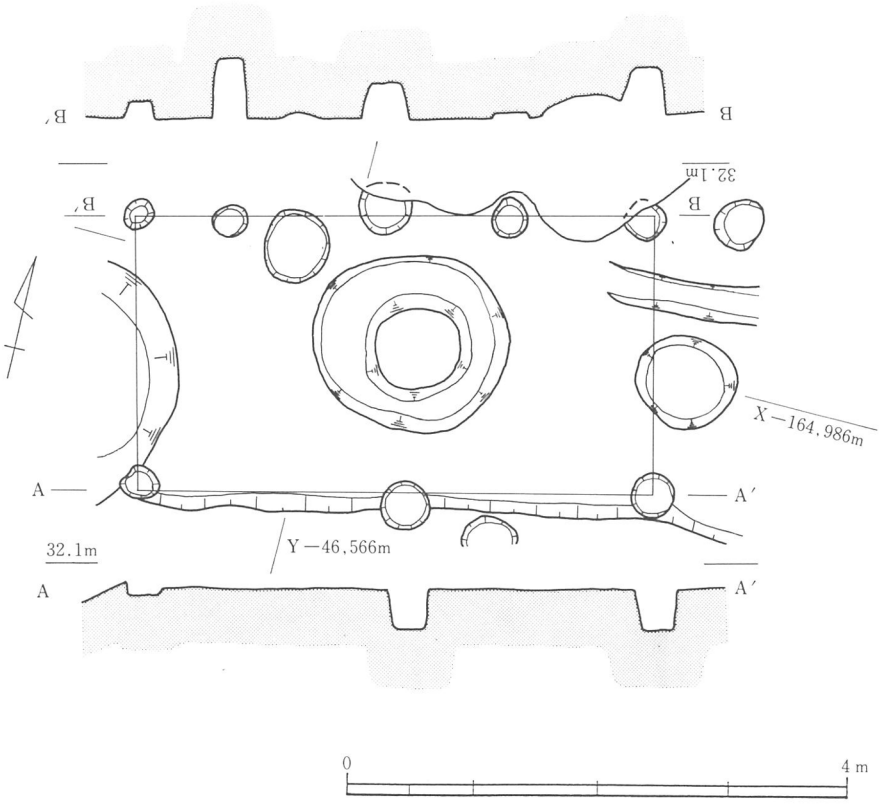


第116図　153－ＯＤ出土遺物（1/4）

２．掘立柱建物

第Ⅱ区の掘立柱建物は少なくとも19棟以上が検出されている。他に建物としてまとめることはできなかったが，柱穴が多数密集する地点は数箇所検出されており，本来はもっと多くの建物があったと考えられる。遺構の遺存状態からその時期については必ずしも一時期に特定する根拠は少ないが，柱穴埋土の状態から古墳時代に属するものと考えられる。調査区のほぼ全域に広がって検出されており，２棟で一対になる傾向がある。南端付近に集まるグループと中央付近に集まるグループ，北端寄りに集まるものとに分けられる。

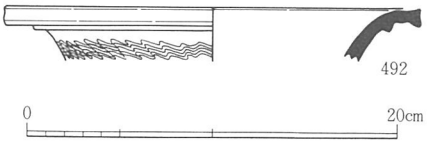
ここでは図上復元から確かと思われるものだけを報告し，他は保留しておきたい。



第117図　363－ＯＢ平面・断面図（1/60）

363－ＯＢ（第117・118図）

第Ⅱ区北端中央のＫ25ＶＩで検出された，東西に長い２間（4.2m）×１間（2.0m），面積8.4㎡を測る建物である。建物長軸の方

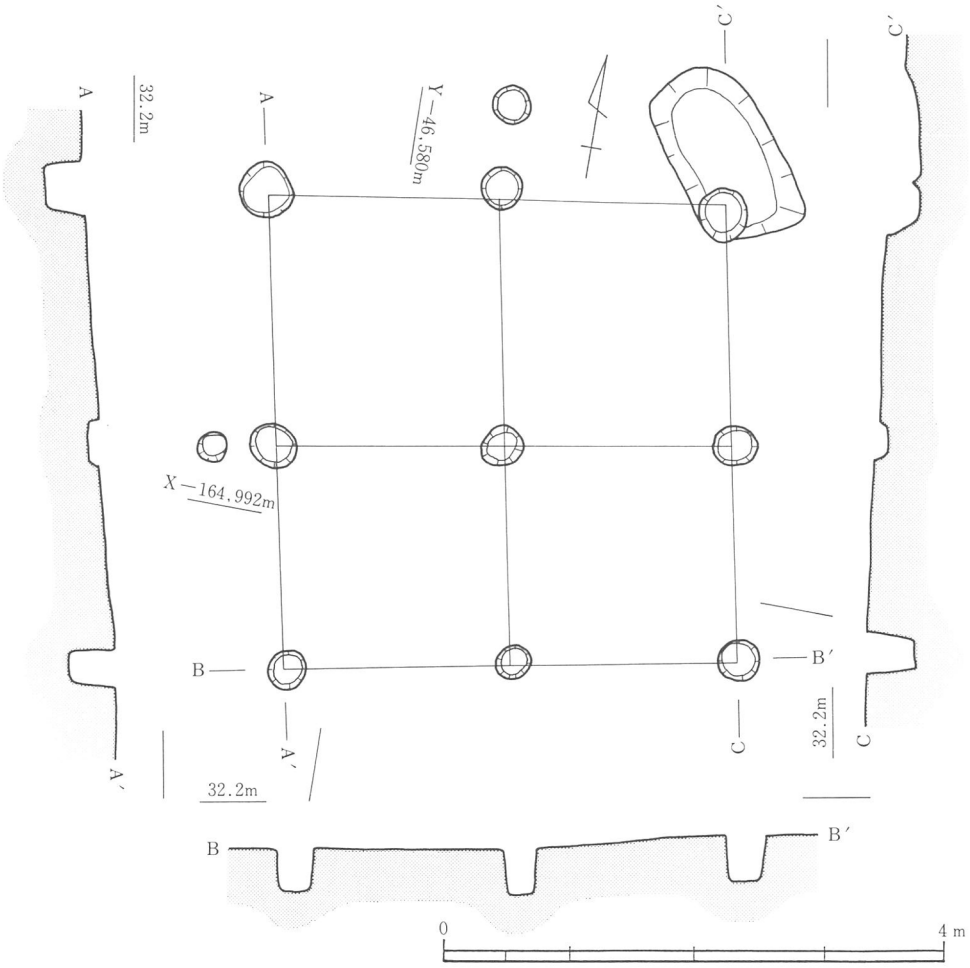


第118図　363－ＯＢ出土遺物（1/4）

向はＥ－12°－Ｎを指す。北側の柱列には中間に束柱状にさらに１本ずつの柱を持つが，柱掘方の規模はほぼ同大で径0.3～0.4ｍを測る。北側の柱穴間距離は0.75～1.3ｍ，東西と南側の柱穴間距離2.0～2.1ｍを測る。東端の２個と南側中央の柱穴で２～３片の須恵器・土師器片が出土している。492は北東隅の柱穴出土の須恵器壺口縁部で陶邑編年第Ⅰ型式２～３段階に属する。

760－ＯＢ（第119図，図版48）

第Ⅱ区北西隅のＫ25ＷＦで検出された２間×２間の総柱の掘立柱建物である。すぐ南に近接してやや規模の大きい総柱の建物（765－ＯＢ）が存在する。他の建物に比べて傾斜の強い位置にあり，等高線に対してやや斜行して作られている。南北の柱筋は，ほぼＮ－11°－Ｗを指す。北東隅の柱は長方形の土坑と重複している。



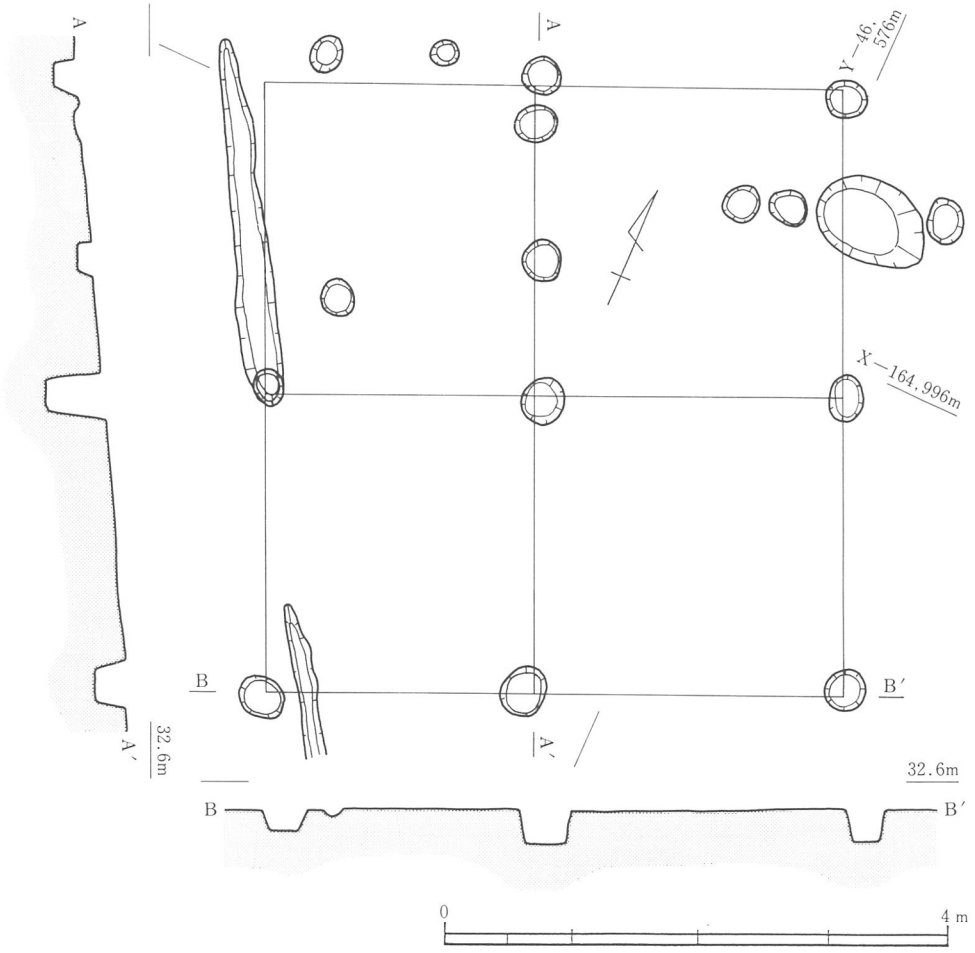
第119図　760－ＯＢ平面・断面図（1/60）

南北長3.9～3.7m，東西長3.7mを測る。面積約14㎡である。傾斜地の低いところに位置するためか，北側の柱筋は東西と南の辺に対してやや歪んでいる。柱間は2.0～1.7mまで偏差があるが1.8m前後を測るものが多い。柱穴掘方は円形を呈し，径0.3m前後を測る。斜面下方の柱穴はやや大きく，径約0.4mを測る。概して中間の柱は南寄りの斜面の高い方に寄っている。東西二辺の中央の柱は四隅の柱に比べて浅めである。

いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

765－ＯＢ（第120図）

760－ＯＢの南に接するＫ25ＹＦで検出された，２間×２間の総柱の掘立柱建物である。等高線に沿ってほぼ平行に作られ，南北の柱筋は760－ＯＢと少しずれてＮ－29°－Ｗを指すが，同時並存の可能性がある建物である。建物の西側の柱穴に沿って後世の溝が走って



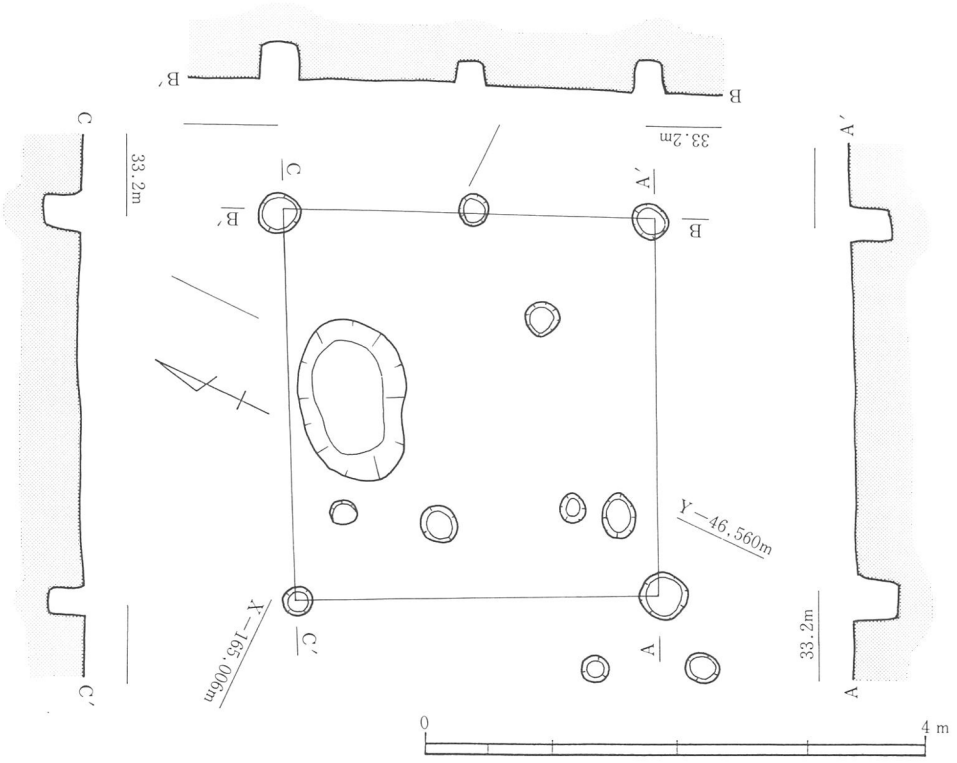
第120図　765－ＯＢ平面・断面図（1/60）

いるためか，西北隅の柱とそのすぐ南の柱が欠けている。西側中央の柱は溝の南端に痕跡的に認められている。南北長4.9m，東西長4.7mを測り，面積は約23㎡である。柱間は2.1～2.5mまでかなり偏差があり，南側中央の柱は少し西に寄っている。柱穴は東柱がやや浅いほかはほぼ同規模で、掘方径約0.3mを測る。柱穴出土遺物は少なく東柱と東側柱列中央の柱穴掘方から土師質土器片が少量出土している。

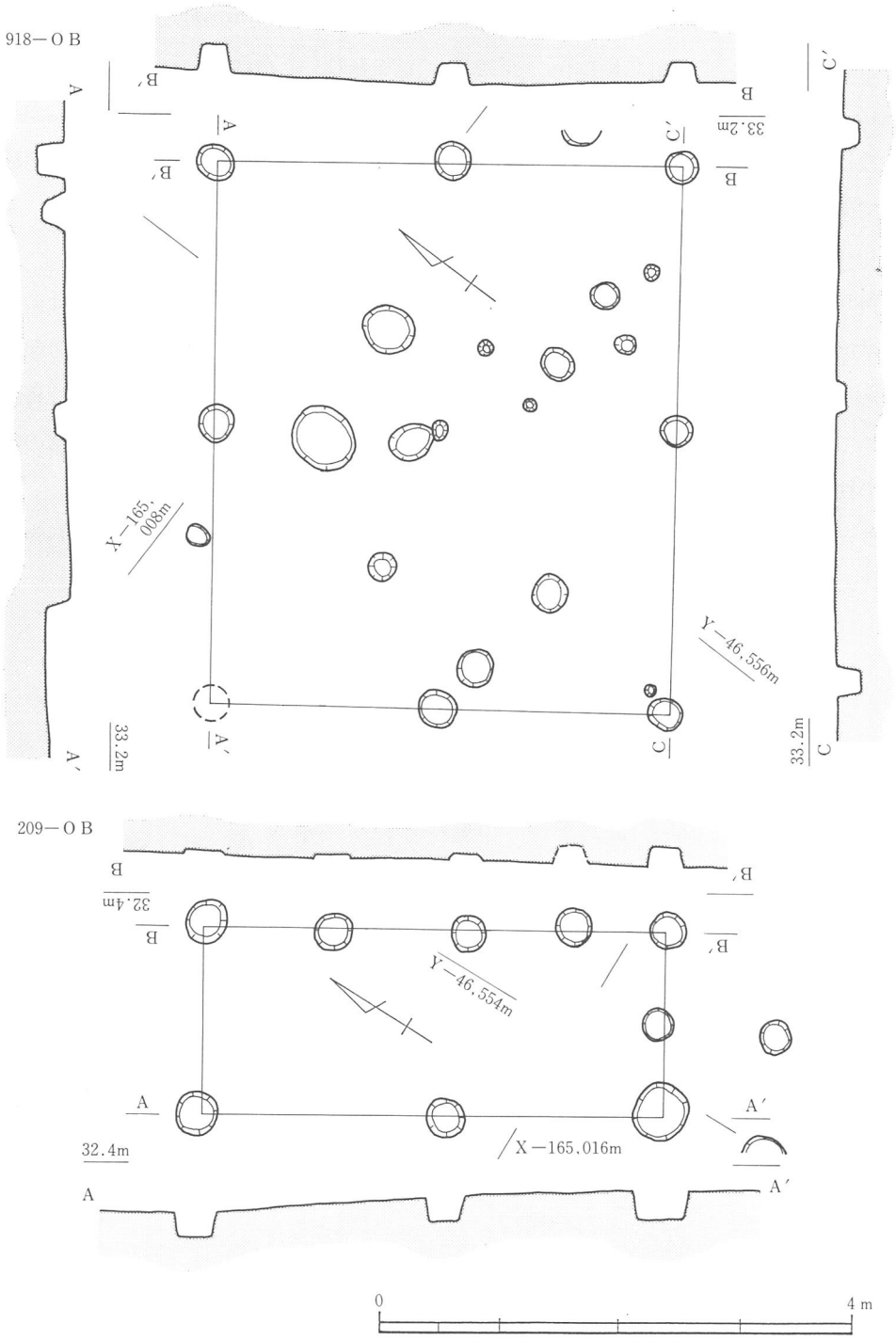
841－ＯＢ（第121図）

第Ⅱ区中央北寄りのＣ05ＢＫで検出された斜面の傾斜に平行する建物である。南北の柱筋はほぼＮ－27°－Ｗを指す。南北２間（3.0m），東西１間（3.1m），面積約9.3㎡の建物である。南北の２間分の柱は東側柱列においてのみ検出されている。南北と西側では確認されていないが四隅の柱間隔がほとんど等間隔であること，１間分が約３ｍあり通常の建物の柱間に比べて長すぎることから，本来は２間×２間の建物の可能性もある。

柱穴掘方の大きさはやや不揃いで径0.25～0.4mを測る。南東と北西隅の柱穴から弥生時代の可能性もある土師質の土器小片が出土している。



第121図　841－ＯＢ平面・断面図（1/60）



第122図　918・209－ＯＢ平面・断面図（1/60）

918－ＯＢ（第122図）

調査区の中央付近Ｃ05ＣＩを中心に検出された掘立柱建物である。報告からは省いたが，この建物のすぐ北側にもやや小さめの２間（3.0m）×１間（3.4m）もしくは２間×２間にまとまる可能性のある小ピット群（付図２参照）があり，本調査区の他の例と同じように２棟一単位を構成する建物のひとつになるかもしれない。

918－ＯＢは等高線に沿って建てられているためか，南北の軸線は磁北からかなりずれてＮ－37°－Ｗを指す。西側隅の柱穴を欠いているが，試掘時には検出されていたという。２間（4.7m）×２間（4.0m）の建物で，面積は約19㎡である。中央部には0.1×0.15mの小さなピットがあり，束柱の痕跡とも考えられ，総柱建物であった可能性がある。

柱間はそれぞれの柱列ではほぼ等間隔で長辺で2.3m前後，短辺で2.0mを測る。柱穴掘方は中央の束柱に当たるものを除くといずれも0.3m前後を測る。

柱穴出土遺物には西柱列の柱穴からそれぞれ１～２点の土師質土器片と須恵器小片が，北西の中央の側柱からサヌカイトの剝片が出土している。

209－ＯＢ（第122図）

第Ⅱ区中央東寄りのＣ05ＤＬで検出された建物である。前述の363－ＯＢと同様な柱穴列を持ち，等高線に短辺を平行させる建物である。南北の柱筋は磁北からかなりずれており、918－ＯＢ等と同じ方向のＮ－31°－Ｗを指す。２間（4.0m）×１間（1.6m）の細長いプランを持つ。面積約6.4㎡である。本地区の建物としては特異な形態であり，通常の掘立柱建物としてよいかどうか問題があるがここで報告しておきたい。

東側柱列は0.8～1.2mの間隔で計５個の柱穴が並んでいる。対して西側柱列は1.9～2.1m間隔の計３個の柱穴からなる。東西の柱間は南北の柱間に比べてかなり狭く，南側は中間に0.8m等間隔で３個の柱穴が並び，北側は中間の柱穴はない。東側柱列と南側柱列の束柱風のピットが本来的な構造物としてよいかどうか判断しえない。柱穴掘方は南側の方形プランの１個を除きほぼ同規模で0.3m前後を測る。

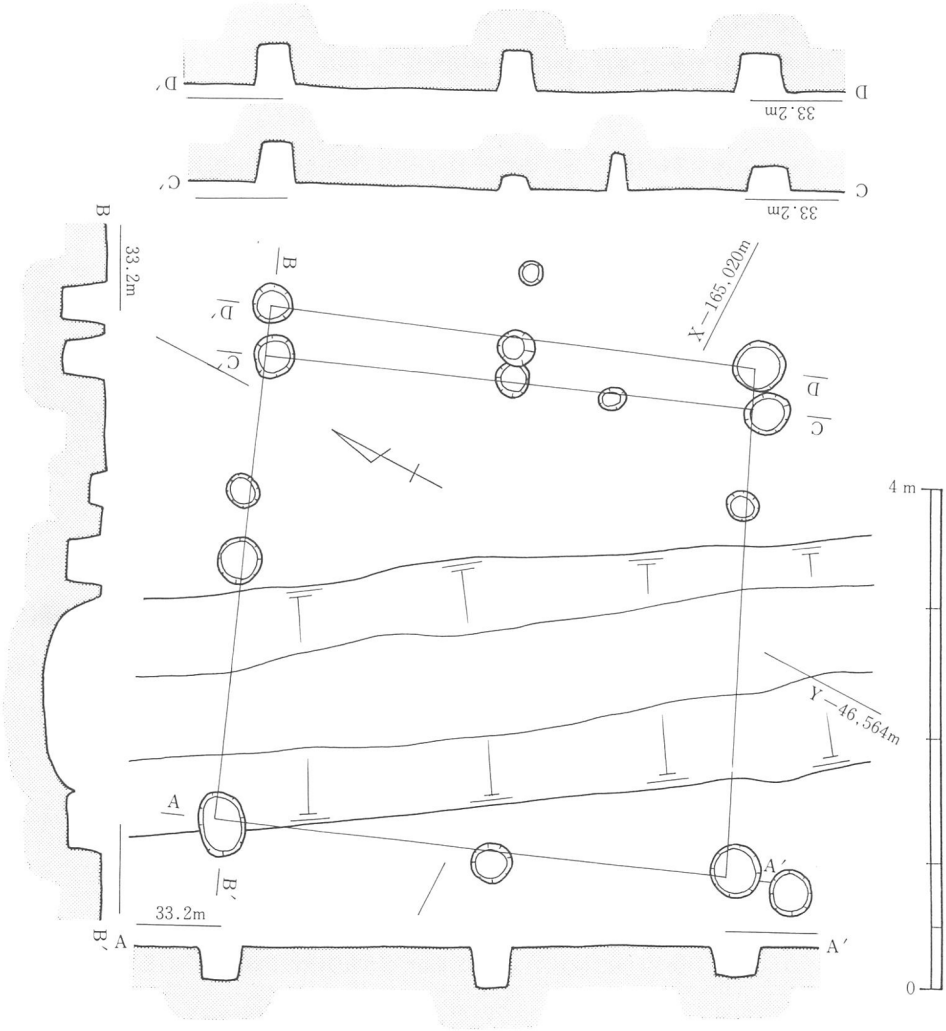
出土遺物はほとんどなく北東隅の柱穴掘方から弥生土器の可能性のある土師質土器小片が少量出土している。

258－ＯＢ（第123図，図版48）

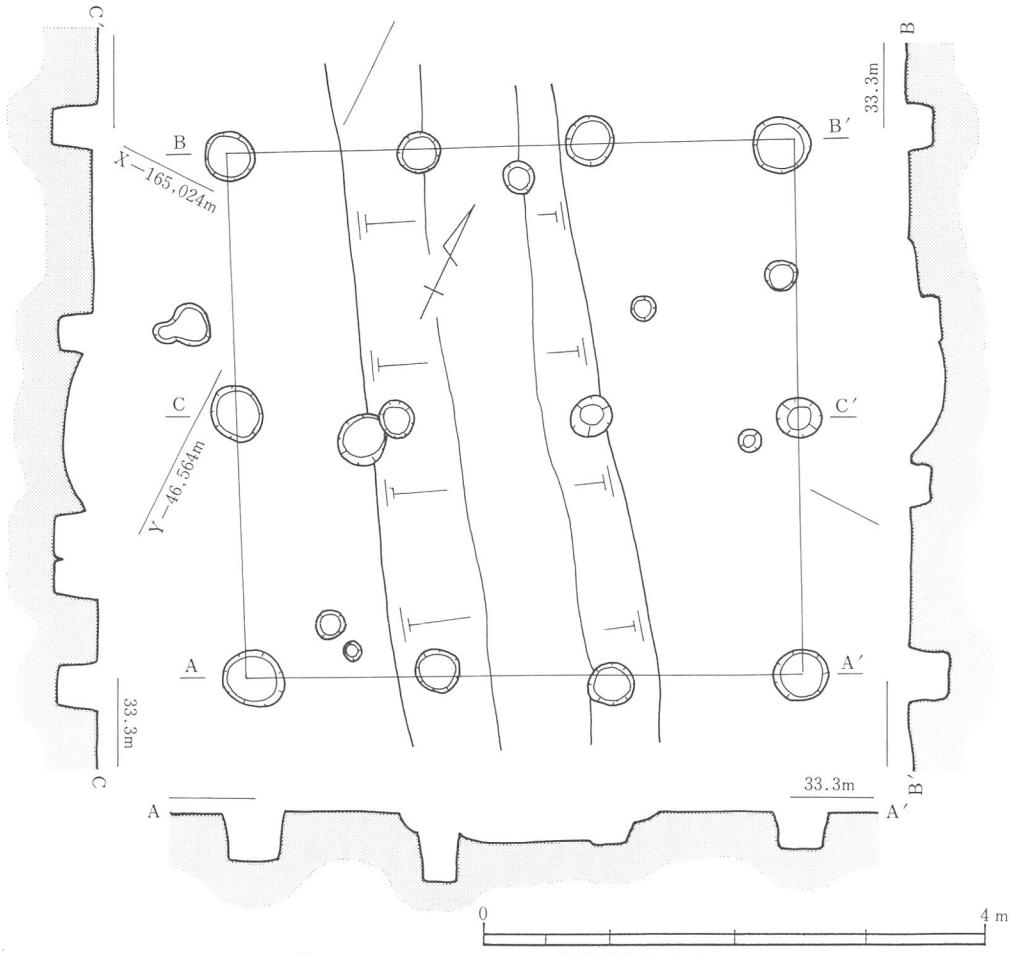
第Ⅱ区中央のＣ05ＥＩを中心に検出された２間×２間の総柱の建物である。すぐ南側により大型の建物があり，２棟一対になっていたと思われる。中央部分に後世の畦境の大きな溝が走り，このため南側柱列中央の柱穴を欠いている。東側柱列は0.3～0.4m離れた位

置にほぼ同規模の柱列が平行して検出されている。等高線に対して平行して作られ，南北軸はＮ－20°－Ｗを指す。

南北長4.0m，東西長は外側の柱筋で4.2m，内側の柱筋で3.8mを測る。面積は16.8㎡ないし15.2㎡になる。東側柱列の二列の柱穴は外側の柱列が庇になる可能性もあるがその間隔が狭すぎること，外側の柱列でみると柱間が等間隔になることから東側柱部分での建て替えもしくは補強が行われた可能性を考えておきたい。柱間はほぼ等間隔で2.0～2.1mを測るが，東の内側柱列の場合東寄りの柱間だけが1.8mと狭くなっている。柱穴掘方はいずれも0.4m前後を測る。北西隅の柱穴から土師質土器の小片が出土している。



第123図　258－ＯＢ平面・断面図（1/60）

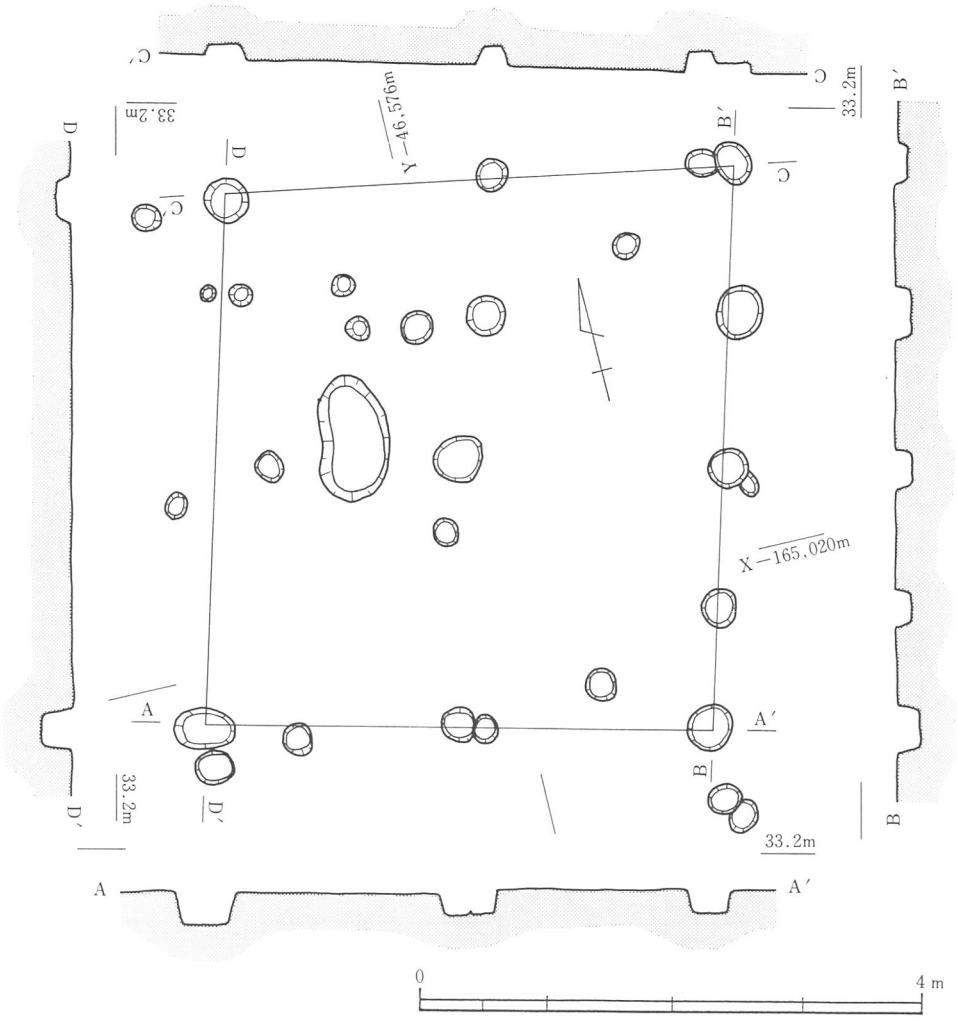


第124図　211－ＯＢ平面・断面図（1/60）

211－ＯＢ（第124図，図版49）

258－ＯＢの南に接してＣ05ＧＪを中心に検出された建物である。建物の中央に後世の畑区画溝が流れていたが，痕跡的な柱穴を含め全ての柱穴を検出している。等高線にほぼ平行し，258－ＯＢと南北柱筋の軸線がほぼ揃っており，Ｎ－27°－Ｗを指す。東西３間（4.5m），南北２間（4.2m），面積約19㎡の総柱の建物である。

南北の柱間はほぼ等間隔で2.1m，東西の柱間は1.5m前後を測り，西側の束柱が少し西に寄っている。四隅の柱穴掘方は他の柱に比べてやや大きめで径0.4m強を測り，中間の柱穴掘方は径0.3m前後である。束柱は上部が後世の畑区画溝で削平されているため掘方の規模は明らかでないが、ほぼ同じ規模であったと考えられる。西側の束柱のすぐ脇に接していま一つのピットが認められる。束柱の補助的なものであったかも知れない。



第125図　1040－ＯＢ平面・断面図（1/60）

南側柱列の西寄りの３個の柱穴と北側柱列の隅の柱などから少量の須恵器片、土師質の土器片が出土している。

1040－ＯＢ（第125図）

第Ⅱ区中央西寄りに４棟分が集中する中の東端の建物でＣ05ＥＧで検出されている。等高線に沿って建てられており，近接の３棟とは大きく方向がずれて南北の柱筋は東に振れている。Ｎ－17°－Ｅを指す。南側両端の柱は隣接の２棟の建物に近すぎることからこの１棟は並存しないと考えられる（付図２参照）。西側柱中央の柱穴を確認できていないが２間（4.3～4.6m）×２間（4.1m），面積18m²強の総柱の建物である。

南北の柱間は約２ｍの等間隔になっている。東辺は西辺より長く少し歪んだプランになっており，1.1～1.2m間隔で５個の柱穴が並んでいる。中間の２個の柱穴は束柱の可能性もある。柱掘方は径0.3～0.4m前後を測り，四隅の柱はやや大きめである。北東隅と南側中央の柱には径0.2m程の小さなピットが伴っており，支柱があったのかも知れない。

南側中央の柱穴から土師器片が少量出土している。

776－ＯＢ（第126図）

1040－ＯＢの西側Ｃ05ＥＥに位置する。南北に３棟並んで検出された建物群の北端の建物である。３棟の中では最も小さい。すぐ南の建物（889－ＯＢ）と最も接近している部分で１ｍしか離れていない。緩やかな傾斜地に位置し，889－ＯＢの柱筋よりも少し西にずれて座標北とは50°強ずれている。

南西辺の中央の柱を欠き，北西中央の柱穴が西に寄りすぎているが，２間（3m）×２間（2.7m），面積約８㎡の総柱の建物になると思われる。北東側の中央の柱はやや南に寄っている。南東側の柱間は2.0mの等間隔である。その中央の柱穴掘方は楕円形を呈している。柱抜取り跡かどうかは不明である。柱穴掘方は径0.3m前後であるが，東と西隅の柱穴掘方は少し大きく0.4～0.5mを測る。北隅と西隅の柱穴から土師質土器片がわずかに出土している。

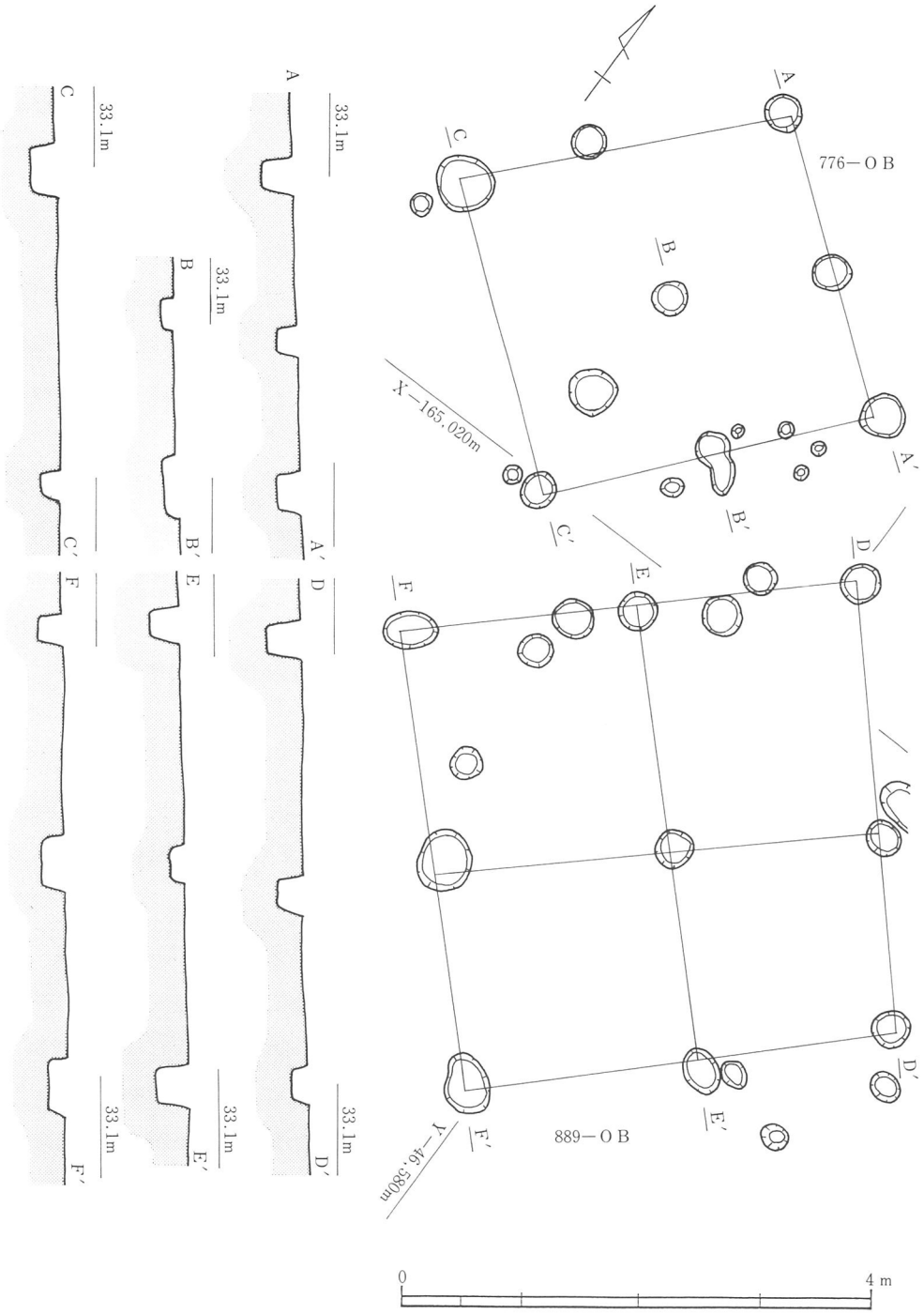
889－ＯＢ（第126図，図版49）

776－ＯＢの南に接してＣ05ＦＦを中心に検出されている。南北に３棟並ぶ内の中央にある。柱筋は座標北と45°ずれている。２間（4.0m）×２間（4.0m），面積約15.5㎡の総柱の建物で南の建物より少し小さい。

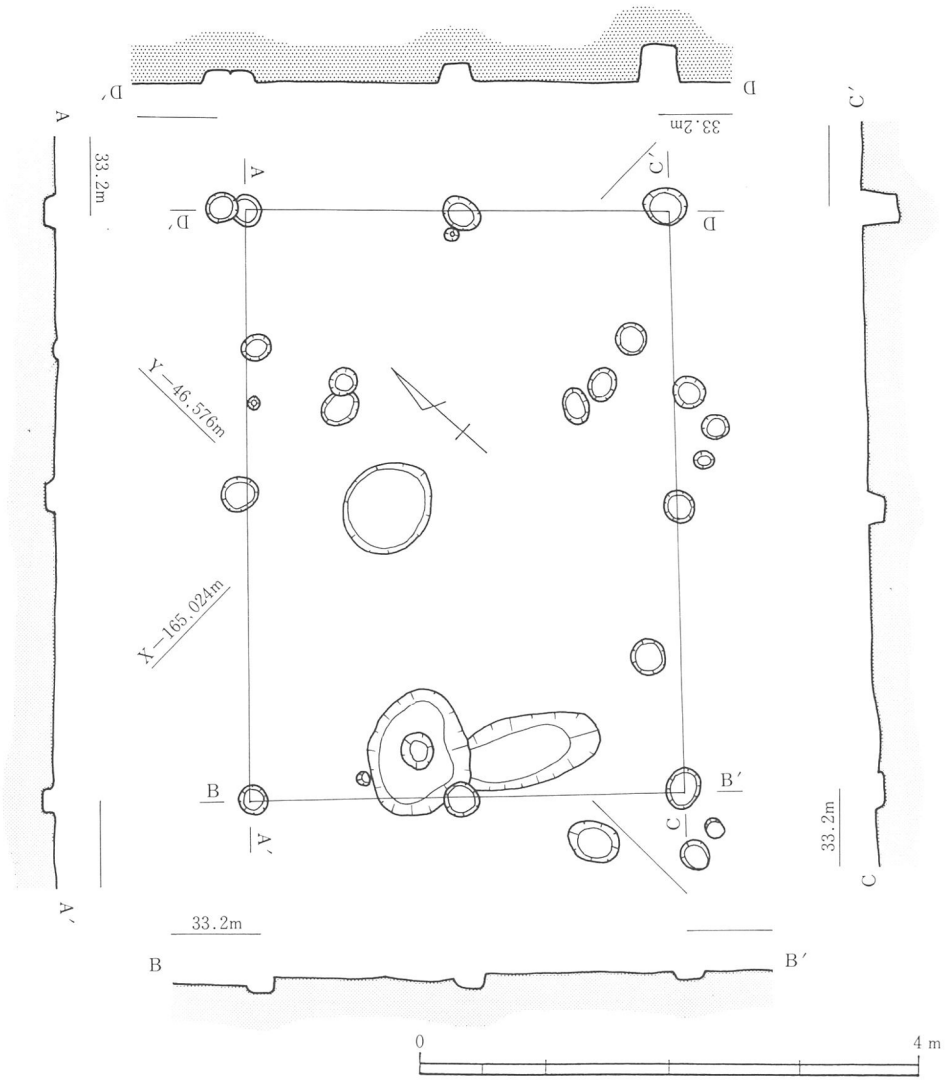
建物プランは北西側よりも南西側の辺の方が短く3.8m弱で少し歪んだ形になっている。柱間は南東辺で中央の柱が東に寄って1.7mと2.0mを測り，南東辺では中央の柱が南に寄って1.7mと2.2mを測る。この両辺では斜面の高い方に中央の柱が寄った形になっている。北西側の柱列にはその軸線上に２個のピットが認められる。このピットが建物にともなうかどうか現状では判断しがたい。柱穴掘方径はおおむね0.3m前後であるが，南西側のものはやや大きく長径0.5mを測る。南東中央の柱穴から土師質土器小片が出土している。

1239－ＯＢ（第127図）

889－ＯＢの南に接するＣ05ＧＧで検出された２間（4.8m）×２間（3.5m），面積約17㎡の長方形の建物である。３棟の建物の中では最も面積が大きい。建物の短辺は889－ＯＢの柱筋の方向と合致しＮ－42°－Ｗを指す。南西側の中央の柱は不整形の土坑と重複



第126図　776・889－ＯＢ平面・断面図（1/60）



第127図　1239－ＯＢ平面・断面図（1/60）

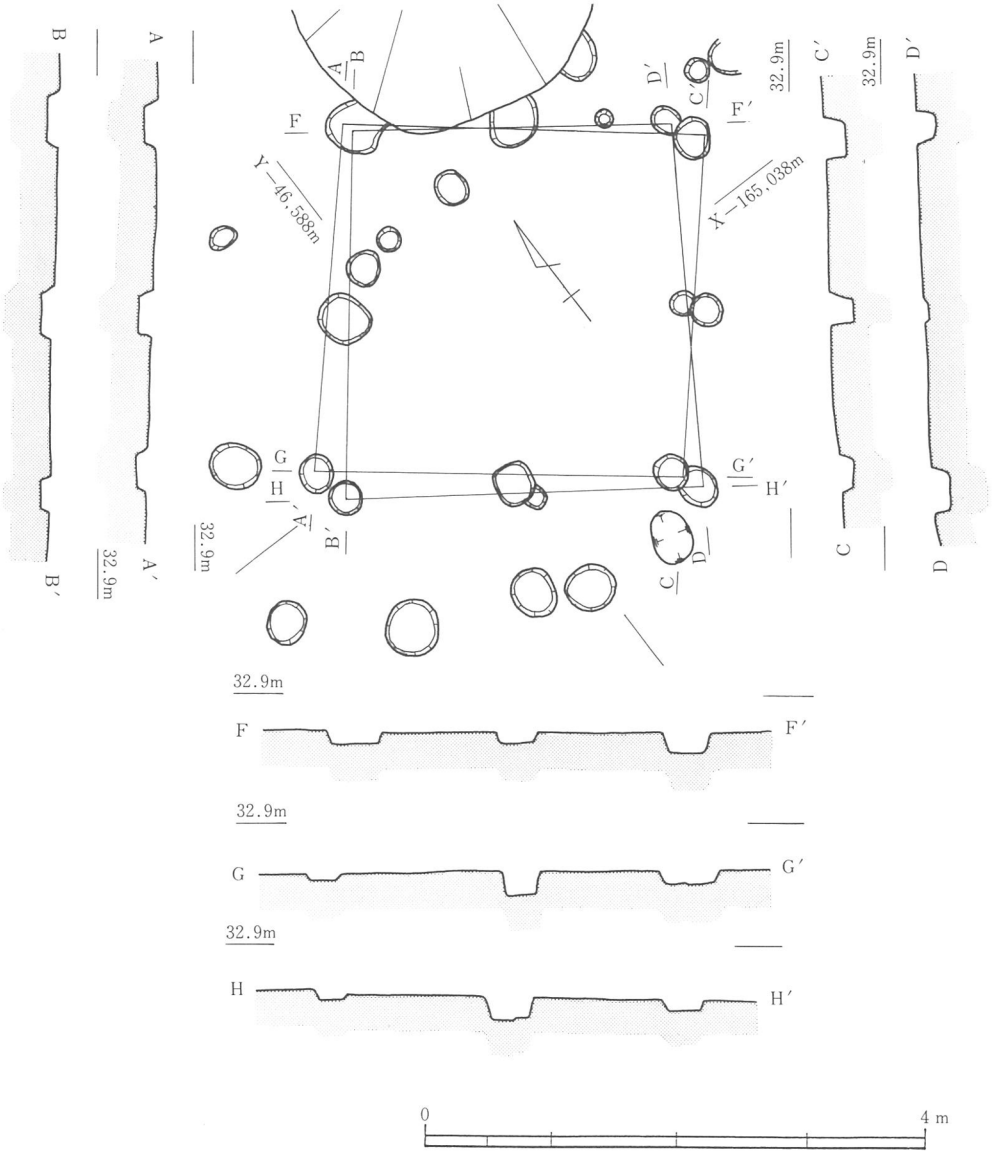
している。建物中央の束柱については確認していない。北西と南東の長辺は2.3～2.5mの不揃いの柱間を持ち，短辺は2.75m前後の等間隔の柱間をなす。建物の規模に比べて柱穴掘方は小さく径0.25m前後のものが多い。確実に柱穴にともなう遺物はない。

3662－ＯＢ（第128図，図版50）

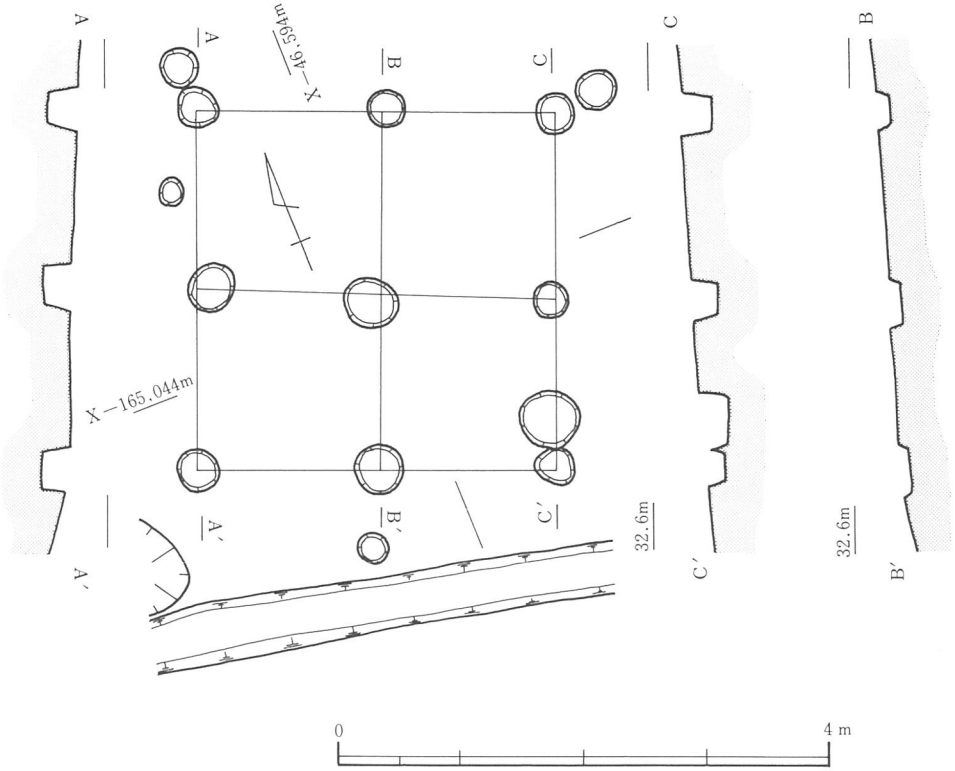
第Ⅱ区中央西寄りのＣ05ＪＤで検出された２間（2.8m）×２間（2.8m），面積約８㎡の建物である。南西に下る斜面の等高線に平行して建てられ，北西側の柱筋はＮ－38°－Ｅを指す。同規模の２軒分の建て替えが柱筋を少し違えて行われている。

南西側と北西側の柱列にはそれぞれ近接した位置に建て替えの柱穴が観察されるが，北西と南西側の柱列は個別の切り合い関係を識別できず，大きな掘方を持つ柱穴が検出された。南西側の柱穴列の切り合いからみて後出の建物の方がより東に振れている。柱間はほぼ等間隔で，柱穴掘方は0.3m弱のものが多いようである。

北西側中央の柱穴掘方から土師器小片が出土している。



第128図　3662－ＯＢ平面・断面図（1/60）



第129図　3730－ＯＢ平面・断面図（1/60）

3730－ＯＢ（第129図，図版50）

第Ⅱ区中央西端のＣ05ＫＢで検出された建物である。北東斜面の上方６ｍのところに，3321－ＯＢが，東に６ｍ離れた位置にほぼ同時期と考えられる竪穴住居153－ＯＤがある。

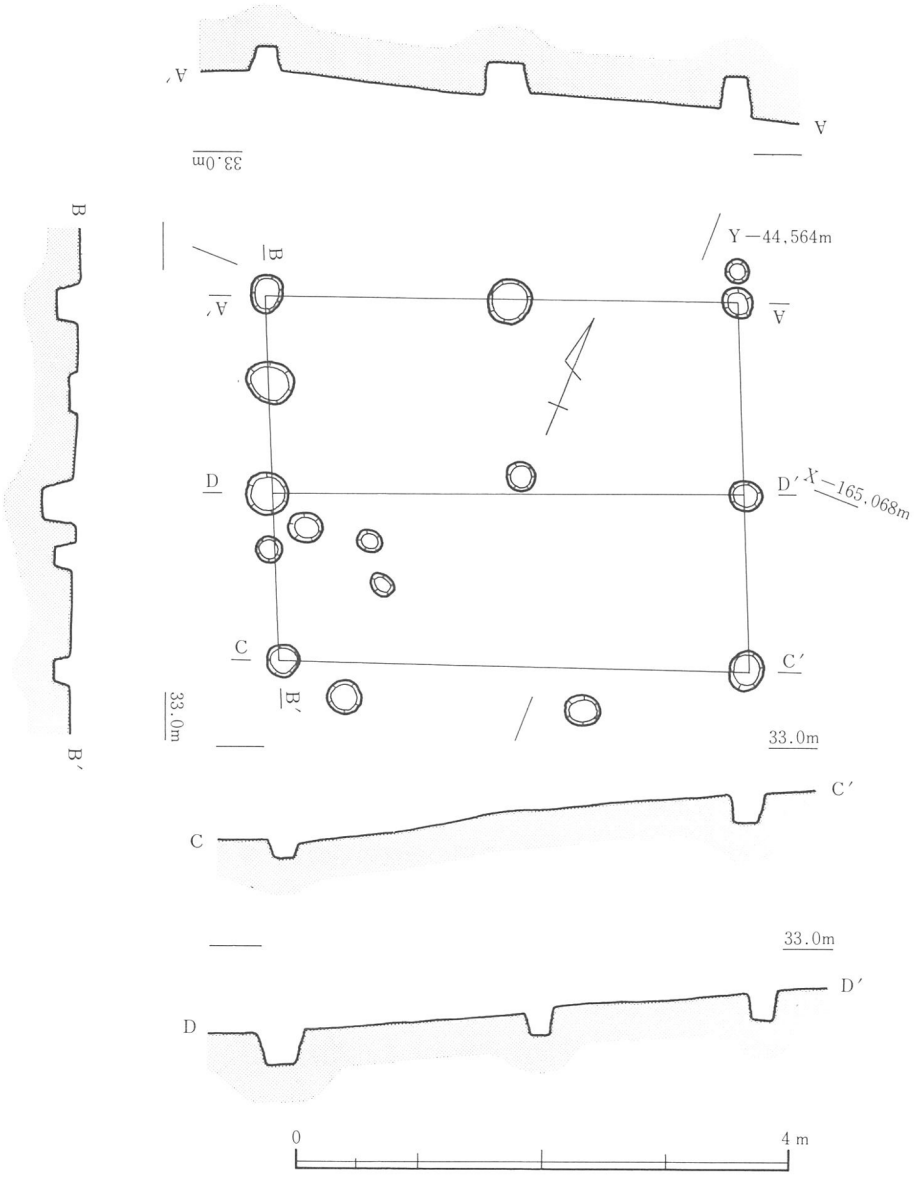
一辺2.9ｍ，面積約8.5㎡を測る２間×２間の総柱の建物で，等高線に平行して作られ，南北の柱筋は東に振れてＮ－22°－Ｅを指す。柱間はほぼ等間隔で1.5ｍ弱である。柱掘方は径0.3ｍ前後を測る。北側両端の柱にはその外側に接近して１個ずつのピットをともなうが建物に付随するものかどうか不明である。

西側の柱穴掘方などから弥生時代の可能性もある土師質土器片が少量出土している。

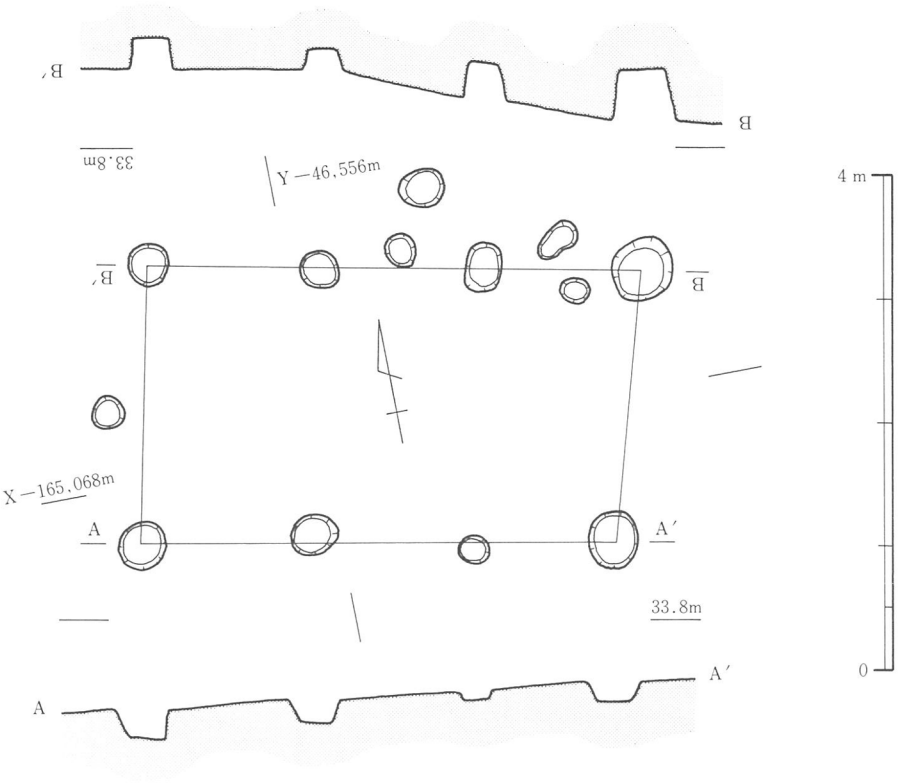
3321－ＯＢ（第130図）

第Ⅱ区南寄り西端のＣ05ＲＩで検出された建物である。すぐ南側には直線的に並ぶ柱列がみられるが，建物としてはまとめられなかった。東側柱筋はＮ－24°－Ｗを指す。

南北２間（３ｍ），東西２間（3.8m）の長方形の総柱建物で面積は約11.5㎡ある。短辺が等高線に対して平行に作られ，東西の柱穴検出面の高低差は約0.2mある。南側柱列の中央の柱は確認できていない。西側柱列にはさらに２個のピットが軸線上にのっているが建物との関係は不明である。柱穴掘方は0.3～0.2m前後を測る。柱間は南北は等間隔で東西では中央の柱が斜面の上位に寄っている。束柱掘方から土師器片が出土している。



第130図　3321－ＯＢ平面・断面図（1/60）



第131図　735－ＯＢ平面・断面図（1/60）

735－ＯＢ（第131図，図版51）

第Ⅱ区南寄りＣ05ＱＬで検出された建物である。１間（2.3m）×３間（3.8～4.0m），面積約９㎡の東西に長い建物で，南北の柱筋は磁北より東に振れてＮ－12°－Ｅを指す。等高線に対して斜交するように建てられている。柱穴検出面の高低差は0.3m弱ある。特に北東部の傾斜が強く1.5mの間に0.15m強下がる。このためか南北の東西柱列は少し長さが違って歪んだ平面形をもつ。柱間は南北の側柱ともほぼ等間隔に配されているが，斜面の高い方に寄っている傾向がある。四隅の柱穴掘方はやや大きめで径0.4弱～0.5mを測り，他のものは0.3m前後である。南西隅の柱穴掘方から土師質土器片が出土している。

3122－ＯＢ（第132図）

第Ⅱ区南端のＣ05ＲＭで検出された建物である。３棟の建物が重複する内の西端に位置する。この３棟の建物はいずれも地盤高の差が0.3m弱ある傾斜地に位置し，互いに共存しえない。南東隅の柱は東端に位置する建物の柱穴掘方と切り合うが，その前後関係は明

第132図　307・3122・3168－ＯＢ平面・断面図（1/60）

らかでない。等高線に対して柱筋が斜交しており，南北の柱筋はＮ－４°－Ｗを指す。

南北２間（3.3m前後），東西２間（3.9m前後），面積約13㎡の建物で，北側と西側の中央の柱穴は確認できていない。東側と南側の柱間はほぼ等間隔である。現存する柱穴は径0.5m大で一部柱抜取り跡のような形跡もある。柱穴掘方が本調査区の他の建物より大きいのは抜取りの跡を示すのかも知れない。柱穴掘方の出土遺物はない。

307－ＯＢ（第132図，図版51）

3122－ＯＢなど３棟が重複する建物群の内東端の建物でＣ05ＳＮに位置する。３棟の内この建物だけが南北の柱筋を東に振ってＮ－９°－Ｅを指す。等高線に対して柱筋を斜交して建てられている。

南北２間（3.1m），東西（4.2m），面積約13㎡の長方形の総柱の建物である。北東隅の柱は調査区端の側溝の部分にかかっていたためか確認していない。南と北側の柱間はほぼ等間隔であるが，東と西側の中央の柱はかなりずれた位置にある。柱穴掘方は南西隅の１つを除くと他は径0.5m以上の不整形な掘方をもち，柱の抜取り跡と考えられる。遺物は多くないが，北西隅の掘方から須恵器甕の胴部破片が10片余り出土している。

3168－ＯＢ（第132図）

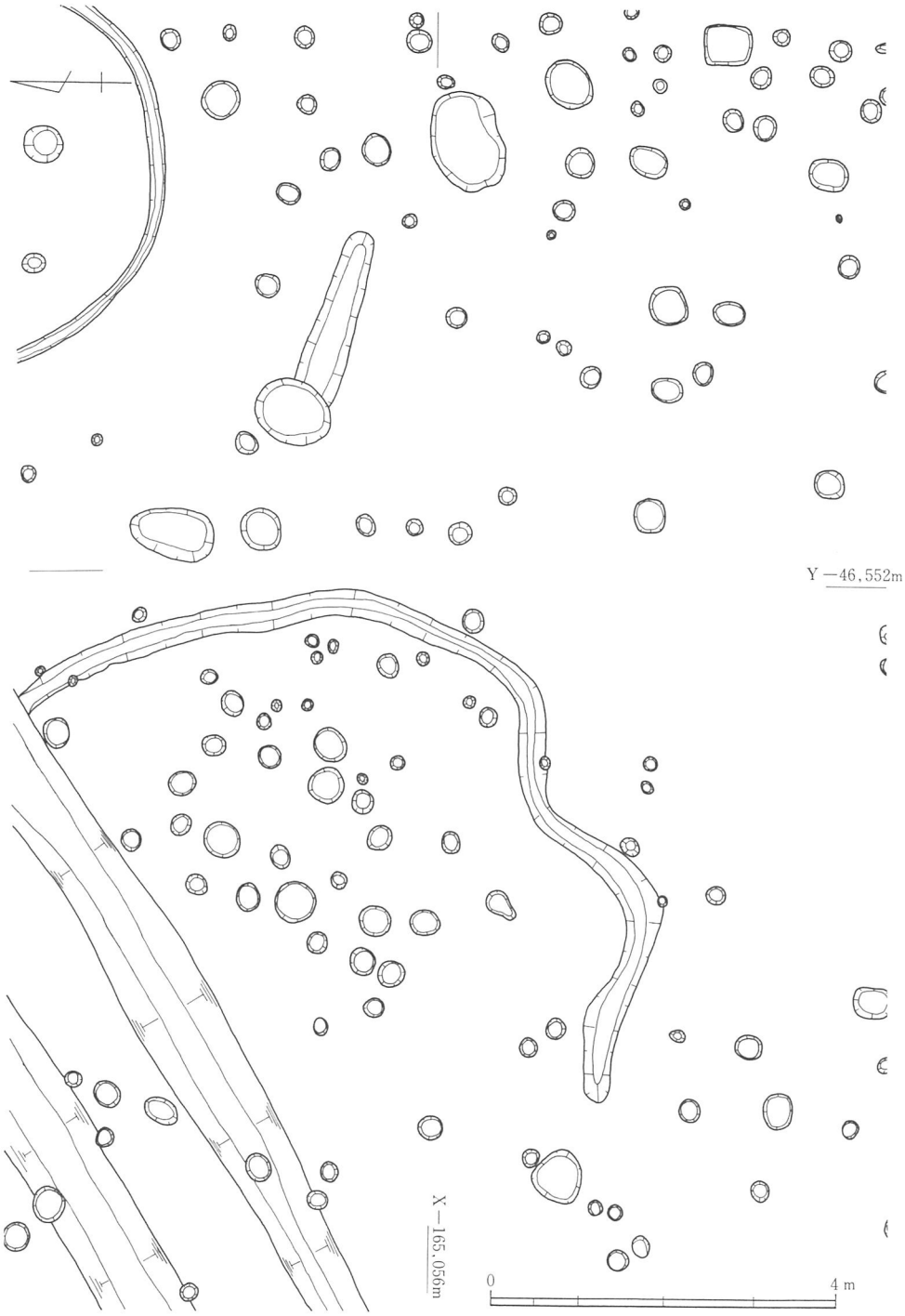
３棟の建物が重なる内の中央にある建物でＣ05ＲＮで検出された。等高線に対して柱筋が斜交しており，南北の柱筋はほぼ座標北を指す。

南北２間（4.7m），東西２間（3.5m），面積約16.5㎡の建物である。中央部分にあるピットは3122－ＯＢの柱穴と重なり合うが，本建物の束柱の可能性も残す。側柱の中央の柱はいずれも斜面の高い方に寄っており，どの辺においても柱間は一定していない。建物の東側0.9mほどの間隔をおいて南北の柱筋に並ぶように柱穴列が認められる。柱間がやや不揃いであるが庇になる可能性がある。柱穴掘方は四隅の柱がやや大きいもののいずれも径0.3m前後である。重複する２棟の柱穴に多い柱抜取り跡のような掘方はないことから，３棟の中で最も新しい建物であったと考えておきたい。東側柱列の南北２個の柱穴掘方から土師質土器片が少量出土している。

その他のピット群

上記の他，確実な建物としてはまとめられなかったが，ピット列やピット群がいくつかある。第Ⅱ区北西端の3406－ＯＤの西側にあるピット列，南端中央のピット列，105－ＯＤの南にあるピット列などは削平のために全容が不明となったり，調査区外に続く建物であるかも知れない。このうち建物があった可能性のより高いピット群について紹介する。

第133図　ピット群１平面図（1/80）



第134図　ピット群２平面図（1/80）

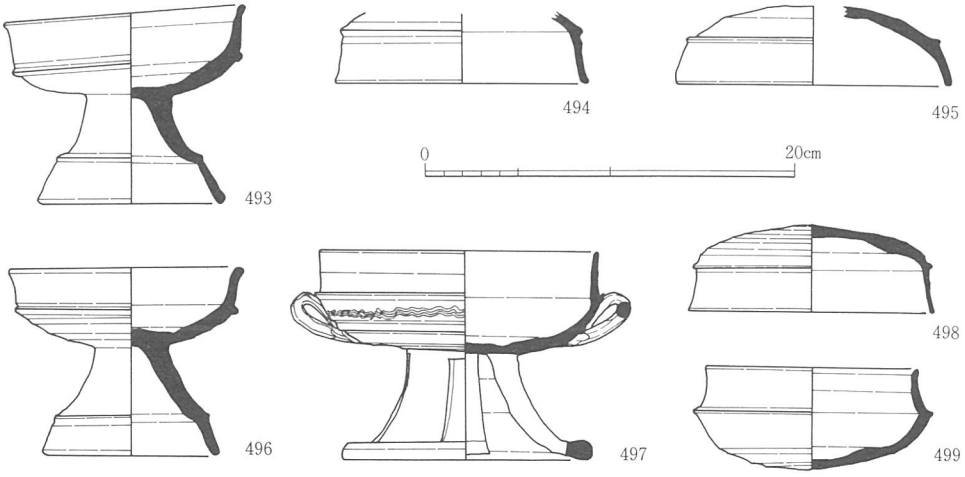
ピット群１（第133・135図の495，図版52）

第Ⅱ区中央東端103－ＯＤの南側のＣ05ＨＭ・ＨＮ付近に広がるピット群である。おおむね古墳時代のピットと考えられ，径0.3～0.4m大のピットが５～６ｍ四方に集中して検出されている。1.5～2.0m前後の間隔で並ぶピット列が北東から南西方向にかけて，さらに北西方向から南東方向にかけて直線的に並んでいる部分が数カ所認められる。とくに、114－ＯＯなど３基の土坑の北寄りには等高線に沿って並ぶピット列が２～３列検出されているが，柱穴間隔があまりに不揃いであったり，柱筋が乱れすぎて対応する柱穴がみられず，確実な建物にまとめることは困難である。この地点では図示したピット以外にも数個のピットが検出されているようであるが，他のピットとの正確な位置関係等が不明なため，建物復元の基礎資料としては扱うことができなかった。しかし１・２棟分の建物があった可能性は高い。やや西に外れた柱穴から須恵器杯蓋（495）が出土している。

ピット群２（第134・135図の493・494・496～499，図版52・115）

第Ⅱ区南寄りの中央110－ＯＤの東方のＣ05ＮＬ付近に集中するピット群である。径0.3～0.5m大のピットが３～４ｍ四方に広がっている。古墳時代に属するピットが主体と考えられる。1.5m前後の間隔でおもに等高線に斜交する形で，北東方向から南東方向に並ぶピット列が認められるが，対応するピット列を良好に見出すことはできない。地山の傾斜が強く後世の削平を受けていることも考えられ，建物があった可能性は強い。この地区の二つの柱穴から須恵器高杯（493）・杯蓋（494）が出土している。

この他Ｃ05ＩＫ付近にも同様な意味合いを持つピット群が検出されている。



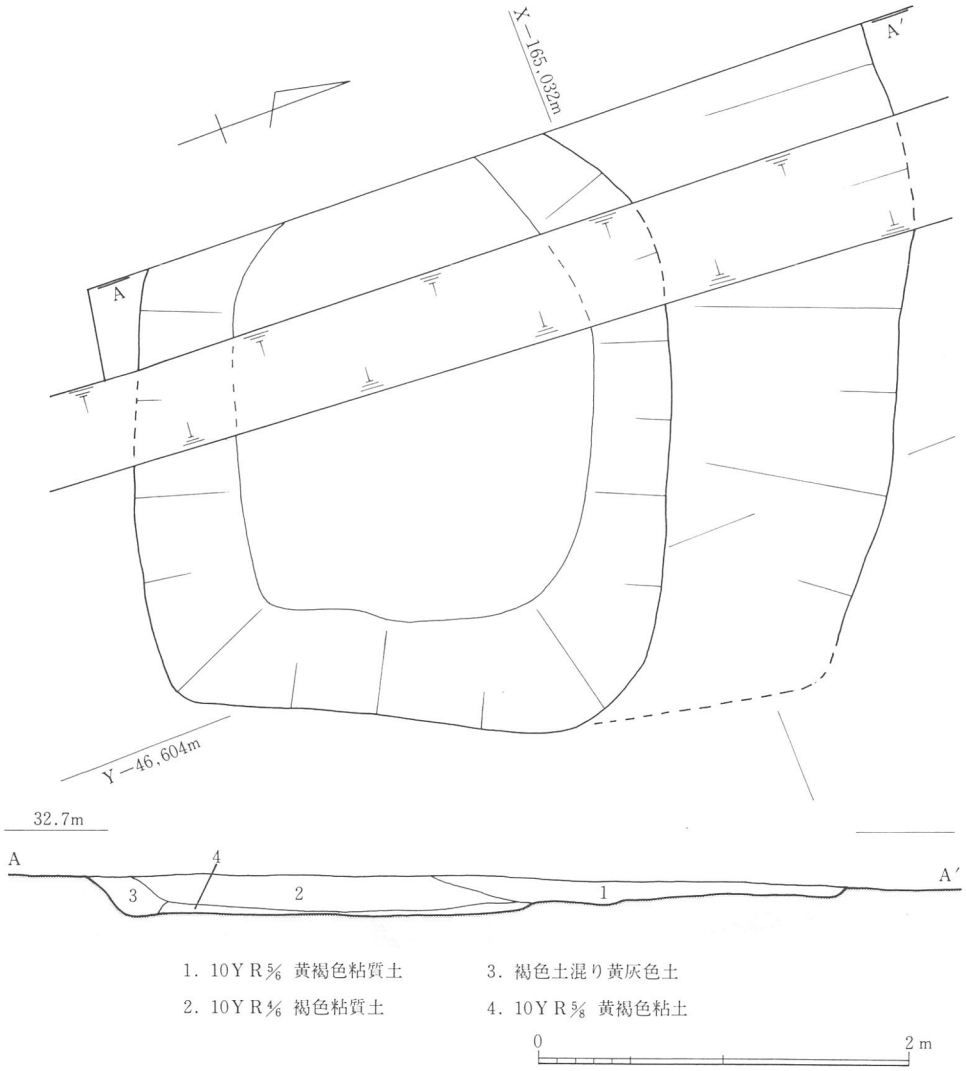
第135図　412・415・743－ＯＰ，ピット群２出土遺物（1/4）

3．土 坑

第Ⅱ区では多くの土坑が検出されている。それらは調査区西端に散在する不定形のものと，北端付近に集中する長方形を主体とする土坑群と，中央から東寄りに点在しおおむね楕円形を呈するものに分けられる。それぞれ性格を異にする土坑と考えられるが，北端のものは完形の土器をともなうものが多く認められる。

3401－ＯＯ（第136・137図の507）

第Ⅱ区西端のＣ05ＩＸに位置する土坑である。方形のプランを持つ浅い土坑で，西側の



第136図　3401－ＯＯ平面・断面図（1/40）

一部は調査区外に続いている。北側には同じ様な形状の浅い落ちがあるが，埋土の状況から本土坑がある程度埋まった後に，掘り込まれた可能性もある。南北2.9m，東西3.2m以上，深さ0.2mを測る。底は平坦で埋土は黄褐色系の粘質土を基調としている。

出土遺物は少なく須恵器高杯（507）を含め，須恵器片７点，土師器片３点がみられる。

3403－ＯＯ（第137図の500～504・138図，図版116）

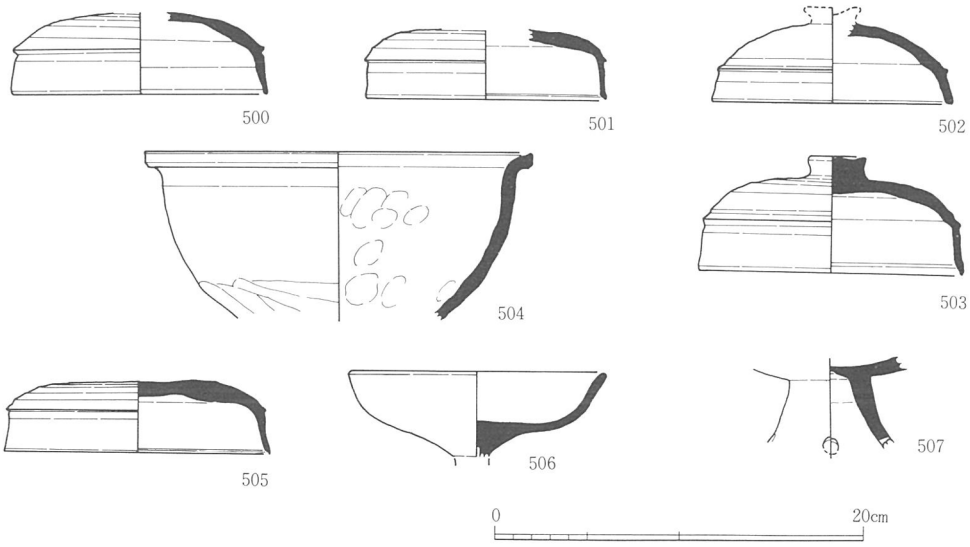
第Ⅱ区中央西端3730－ＯＢの南に近接するＣ05ＫＡで検出された土坑である。等高線に長軸を平行させた楕円形を呈し，長径3.0m，短径1.5m，深さ0.4mを測る断面Ｕ字形の土坑である。埋土は二層に分かれ，いずれも黄褐色系の粘質土を基調とする。

出土遺物には須恵器杯蓋・高杯蓋・朝鮮半島系の陶質の鉢，土師質の土器片など数十片が出土している。504は須恵質の焼成で，内面に指頭圧痕を残し，内面上半と口縁端部をヨコナデし，体部下半をヘラケズリしている。

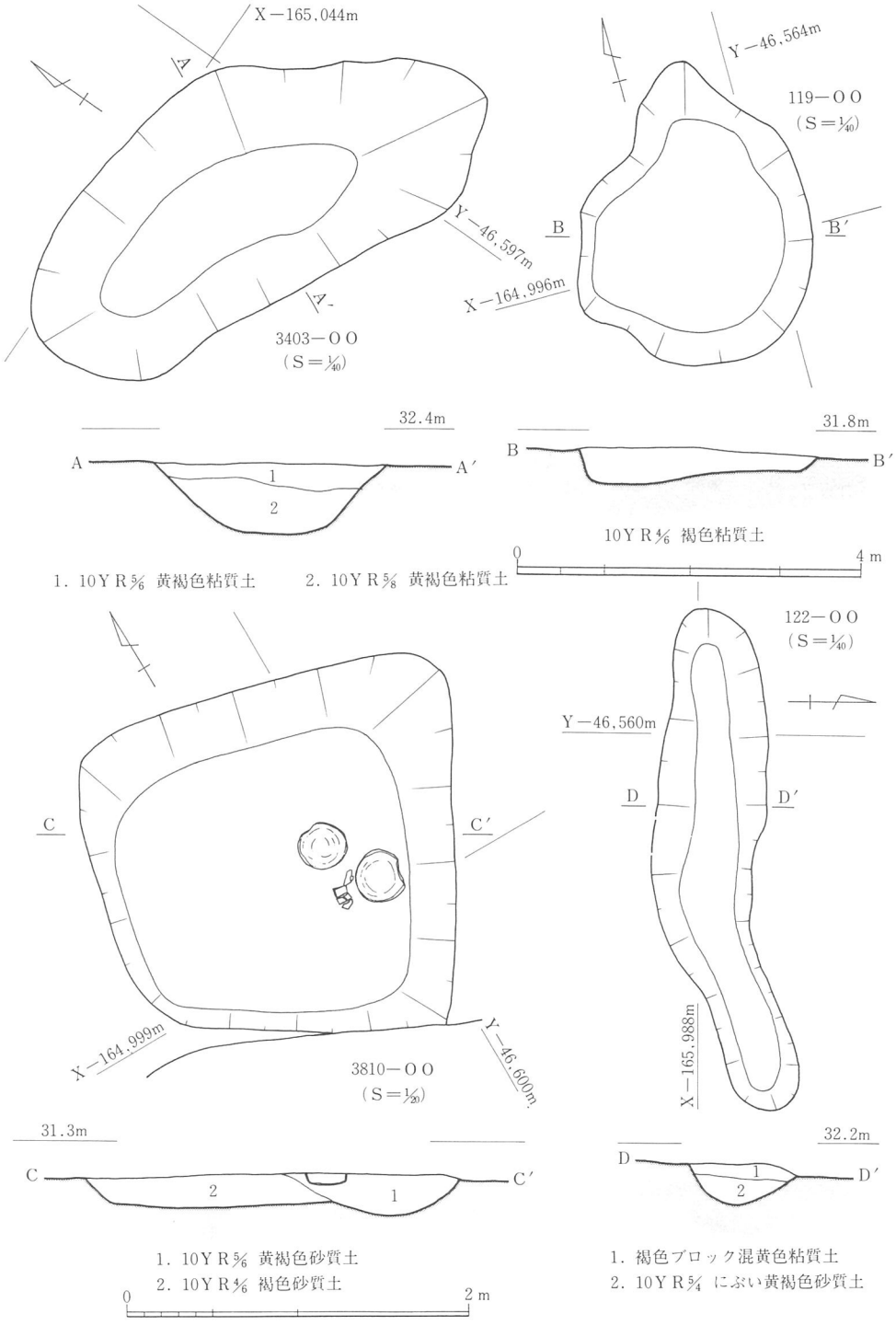
3810－ＯＯ（第137図の505・506・138図，図版56・116）

第Ⅱ区西北端のＫ24ＹＹで検出された方形を呈する土坑である。南東端は竪穴住居3406－ＯＤと接する。検出面が地山直上であったため相互の先後関係については明らかでない。断面観察では２つの土坑が切りあっている可能性もなくはない。一辺約1.0m，深さ0.1mを測る浅い土坑で，底はおおむね平坦で東端がやや深い。

土坑の東端，新しい土層から須恵器杯蓋１点と土師器高杯など数片が出土している。



第137図　3401・3403・3810－ＯＯ出土遺物

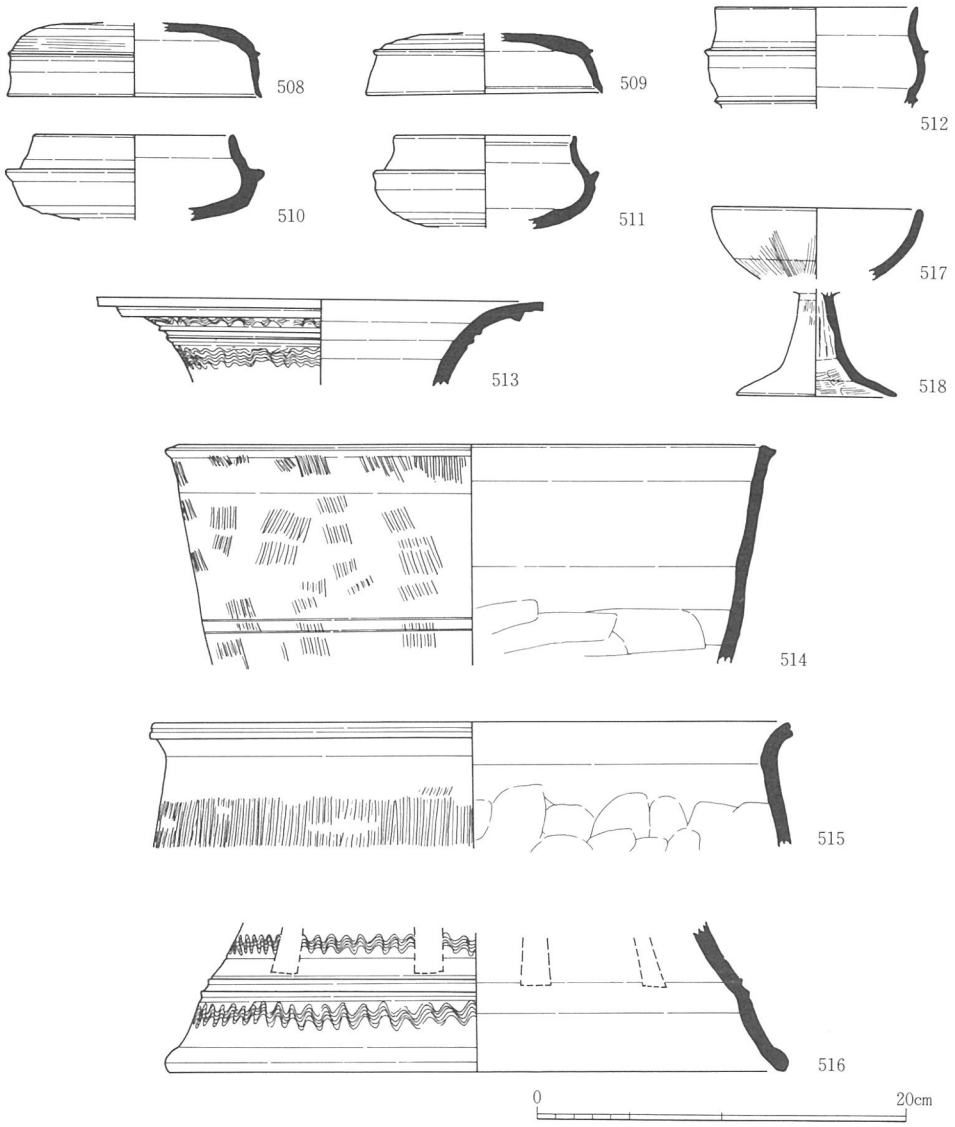


第138図　119・122・3403・3810－ＯＯ平面・断面図（1/40，1/20）

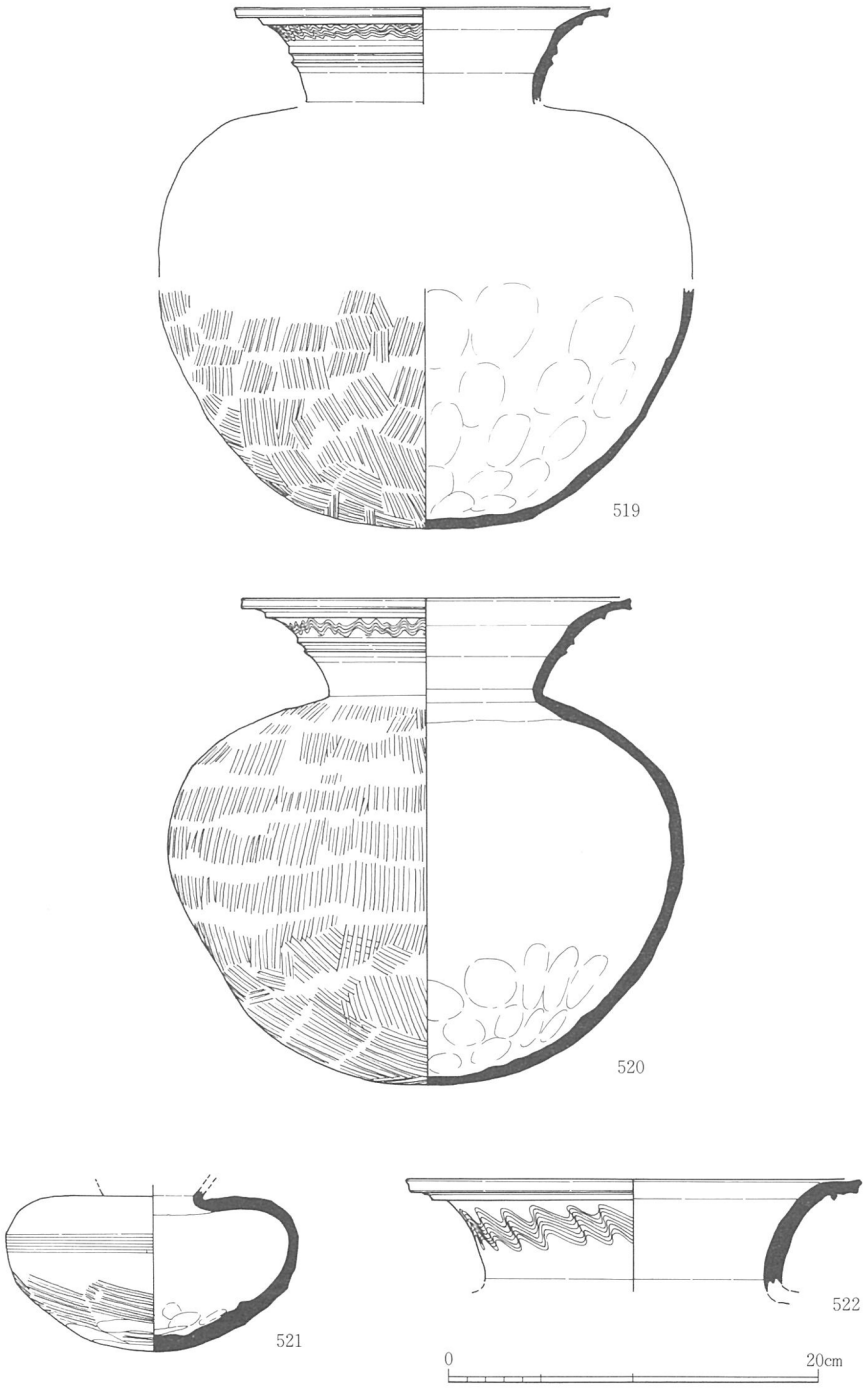
119－ＯＯ（第138・139図，図版116）

第Ⅱ区北端のＫ25ＸＩで検出された不整形の土坑である。南側に接して新しい時期の土坑がある。長径1.7m，短径1.4m，深さ0.2mを測る。埋土は単純で褐色の粘質土である。

出土遺物にはかなりの量の須恵器杯類・椀・壷・器台などの他に半島系の鉢や甕，椀状の杯部をもつ土師器高杯，弥生土器片なども含まれている。いずれも破片資料であるが器の形状を知ることができる。須恵器の様相は陶邑編年のＩ型式２～３段階にあたる。



第139図　119－ＯＯ出土遺物（1/4）

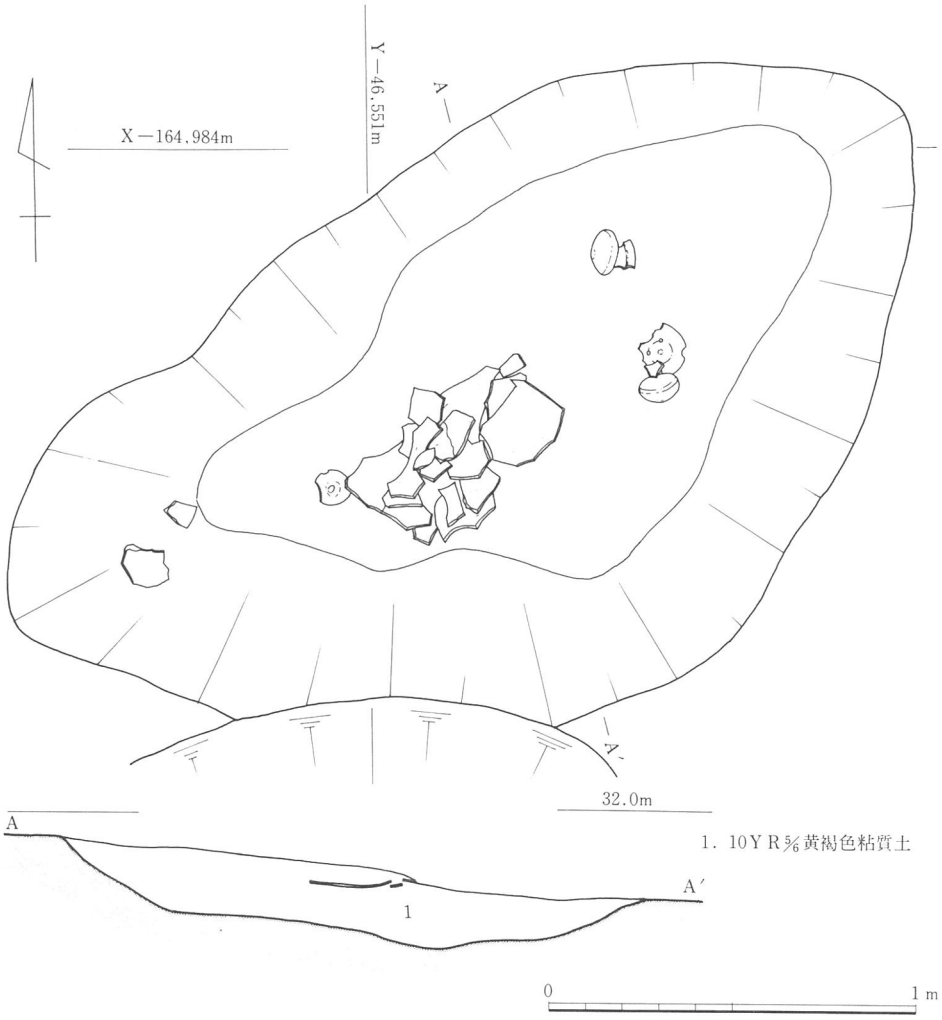


第140図　122－ＯＯ出土遺物（1/4）

122－ＯＯ（第138・140図，図版122）

第Ⅱ区北端のＫ25ＶＫを中心に検出された土坑である。付近は近世以降の掘り込みが複雑に錯綜するところで，この土坑自体もどの程度本来の形状をとどめているか不明である。長軸を等高線に平行させた細長い溝状をなし，長径約３ｍ，短径0.6ｍ，深さ0.2ｍ強を測る。断面Ｕ字形を呈する。埋土は二層に分かれ，上層は黄褐色系の粘質土，下層は上層と同色系の砂質土である。

遺物は少なく須恵器壺など数点と土師器片１点が出土しているのみであるが，520はほぼ完形に復元できた土器である。口縁部に歪みがあり，その部分に布痕がみられる。521



第141図　285－ＯＯ遺物出土状況図（1/20）

の甕は体部下半に横方向の平行タタキを施した後ヘラケズリしている。

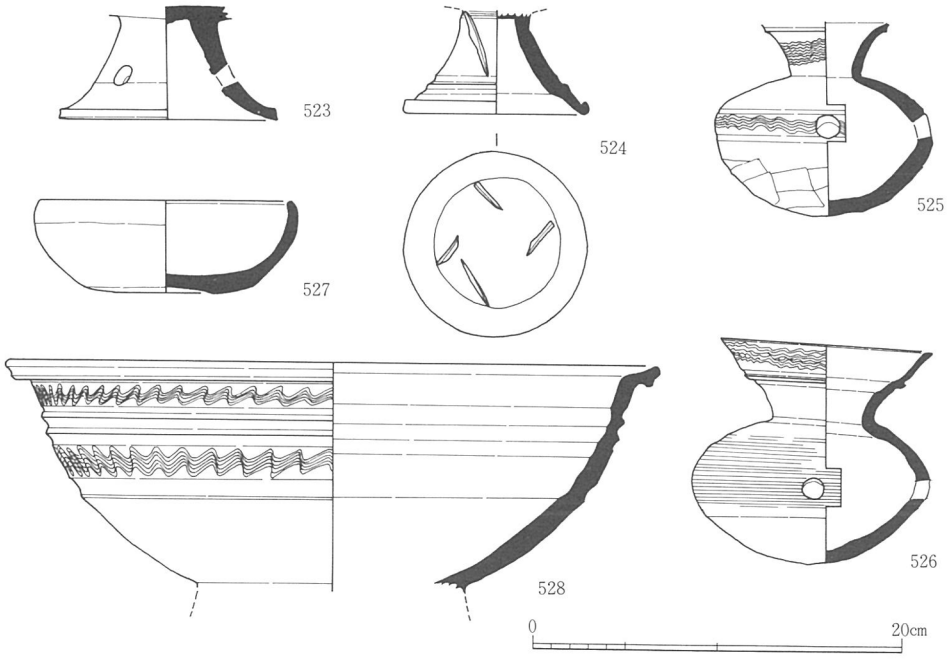
後世の土坑の削平等を考えるとこれらの土器は一部を欠損しているものの，もともと完形もしくは完形に近い状態で土坑に入れられていた可能性もある。

285－ＯＯ（第141～143図，図版53・54・117・118）

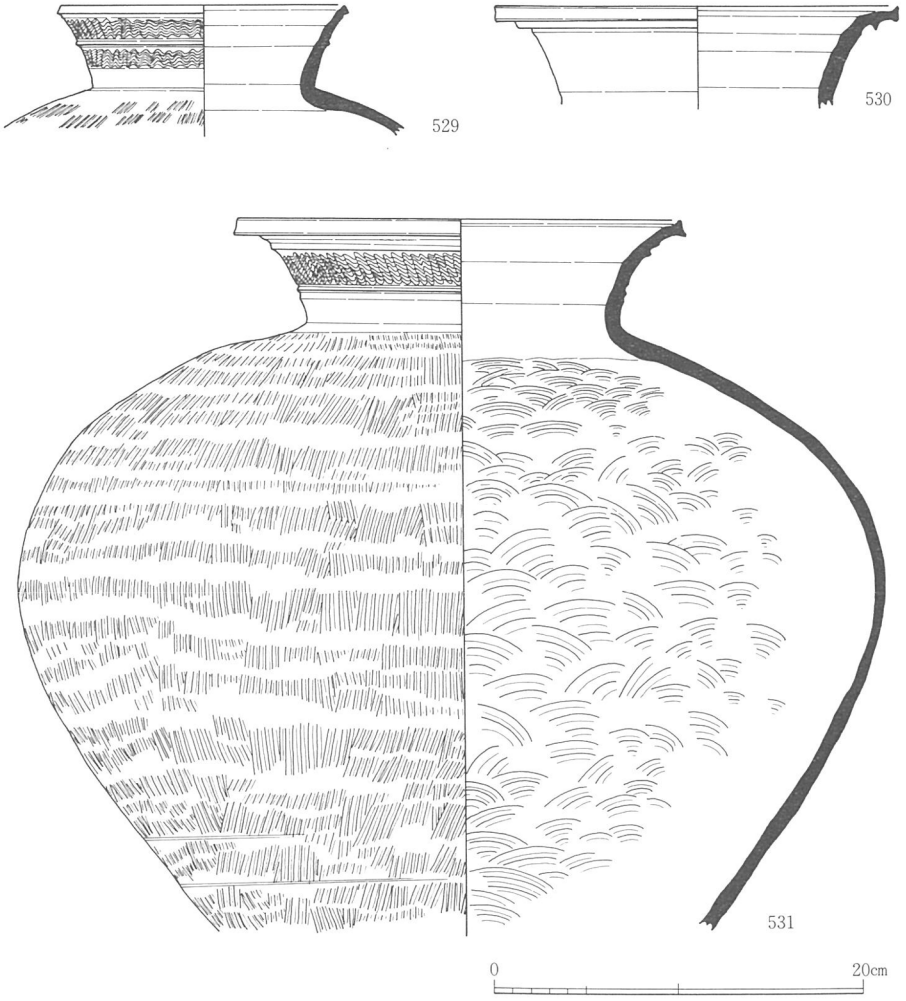
第Ⅱ区北端中央のＫ25ＶＭで検出された不整形の土坑である。付近には似た形状の大小の土坑が集中しており，いずれも時期差をほとんどもっていない。後世の削平の著しい地点なので土坑の本来の形状を捉え難いが，細長い溝状のものが主体となるようである。

南側は新しい時期の掘り込みで削られているため少し変形しているが，もともとは楕円形に近い土坑であったと思われる。長軸をほぼ等高線に平行させ，現存の長径2.8m，短径約1.5m，深さ約0.2mを測る。断面形は浅いすり鉢状を呈する。

土坑の中央付近の床面から少し高い位置で須恵器壷・高杯などがまとまって出土しており，東寄りの部分でほぼ完形の甕２点と高杯脚部が検出されている。西寄りの部分では土師器（527）も少量検出されている。524の高杯は脚部に縦長の透かしを斜め方向に刻んでいる。この透かし孔は裏面にまでは貫通していない。525の甕は口縁部を欠き底部を粗く削っている。526は口縁部に粗雑な波状紋を巡らせている。壷は口縁端部をナデて上下に



第142図　285－ＯＯ出土遺物１（1/4）



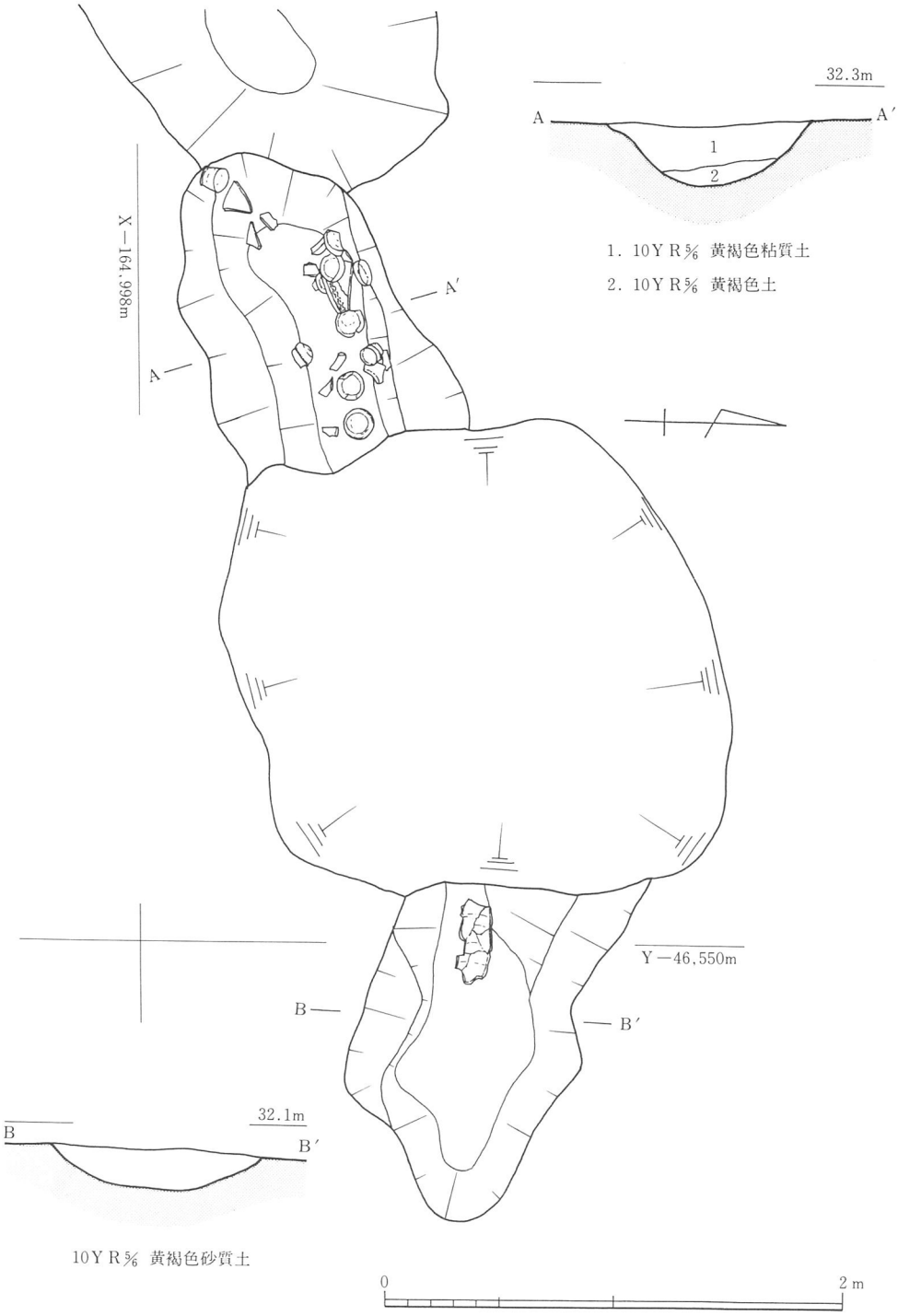
第143図　285－ＯＯ出土遺物２（1/4）

わずかに拡張させている。531は体部内面に浅い同心円文を残し，おもに上半部はその後を軽くナデ消している。

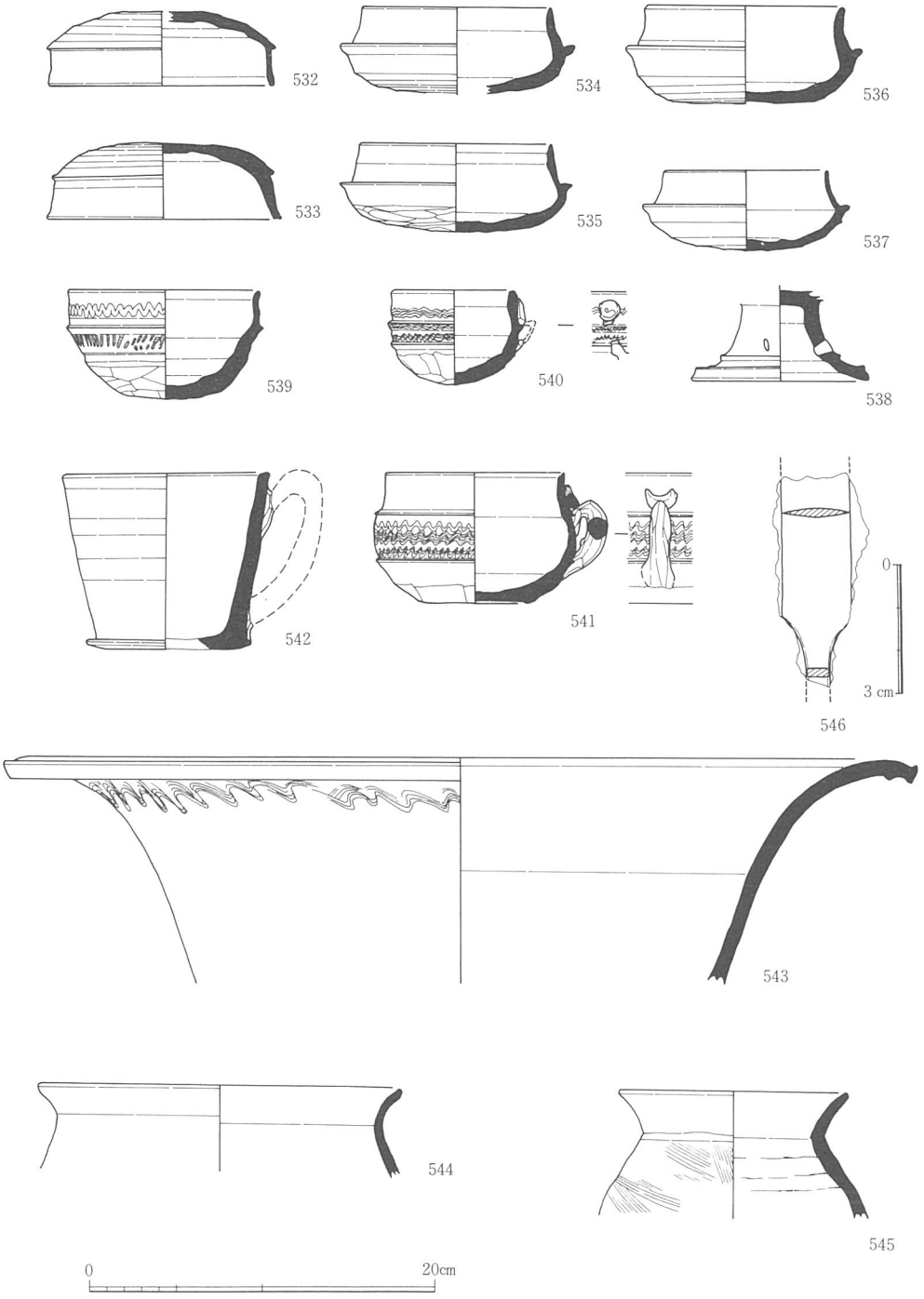
280－ＯＯ（第144～146図，図版53・55・118・119・126）

第Ⅱ区北端285－ＯＯの南に接してＫ25ＶＬ～ＶＭにかけて検出された溝状の土坑である。中央を後世の掘り込みで削られているため，東西の両端が残っているのみである。等高線に沿って作られ，両端が斜面の高い南側に少し湾曲している。西側の端は120－ＯＯの一部と重複している。切り合い関係は確かではないものの本土坑が後出的である。

長径4.8m，幅1.0m，深さ0.25mを測り，Ｕ字形の断面を呈する。埋土は東側の部分は



第144図　280－ＯＯ遺物出土状況図（1/30）



第145図　280－ＯＯ出土遺物１（1/4，1/2）

単純で黄褐色系の砂質土，西側では二層に分かれ上・下両層とも黄褐色系の土層である。

出土遺物は西側部分に多く，底から少し浮いた状態で須恵器杯類・椀・擂鉢・甕などの他，横方向のハケ目を持つ土師器甕（545），半島系軟質土器の甕片（544），鉄鏃（546）などが出土している。東側の底近くからは土師質の筒状の土製品（547）が出土している。539の椀は口縁の一部を欠くだけの完形品で，口縁の波状文は幅２㎜強の平坦な先端部を持つ工具で描出した，一本沈線の波状文である。538の高杯脚部の透かしは楕円形の工具で外から刺突している。542の擂鉢は底部と把手を欠損している。内面は使用のためか摩耗している。547の筒状の土製品は現存の総高0.85ｍを測り，一端がロート状に開いている。先端部は欠損している。外面は縦方向のハケを施し，図の上端はナデによってハケ目を消している。内面は筒部に顕著な接合痕を残し，図の下端は横方向のハケを施している。

291－ＯＯ（第147・148図の548～550）

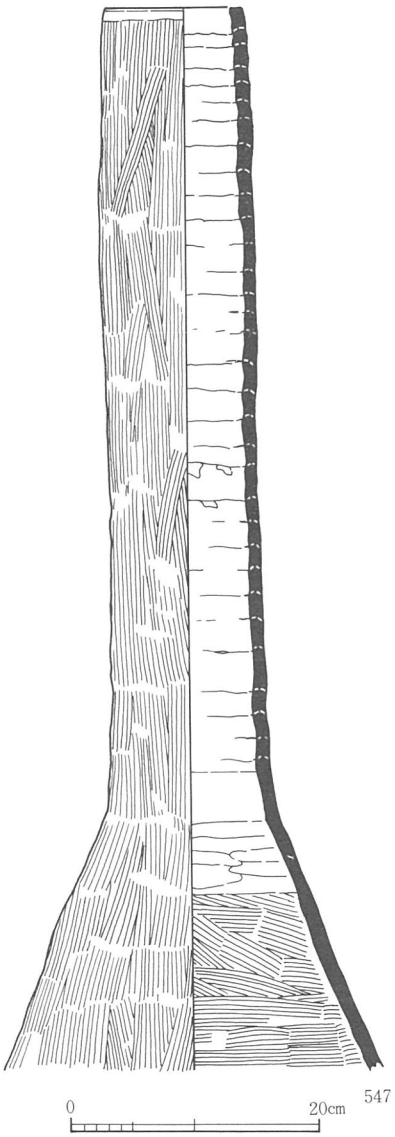
第Ⅱ区北西端のＫ25ＵＱで検出された楕円形の土坑である。東端は調査区外に続いている。

長径2.1ｍ以上，短径0.9ｍ，深さ0.2ｍ弱を測る舟底状の土坑で，埋土は二層に分けられる。上・下両層とも黄褐色系の粘質土である。

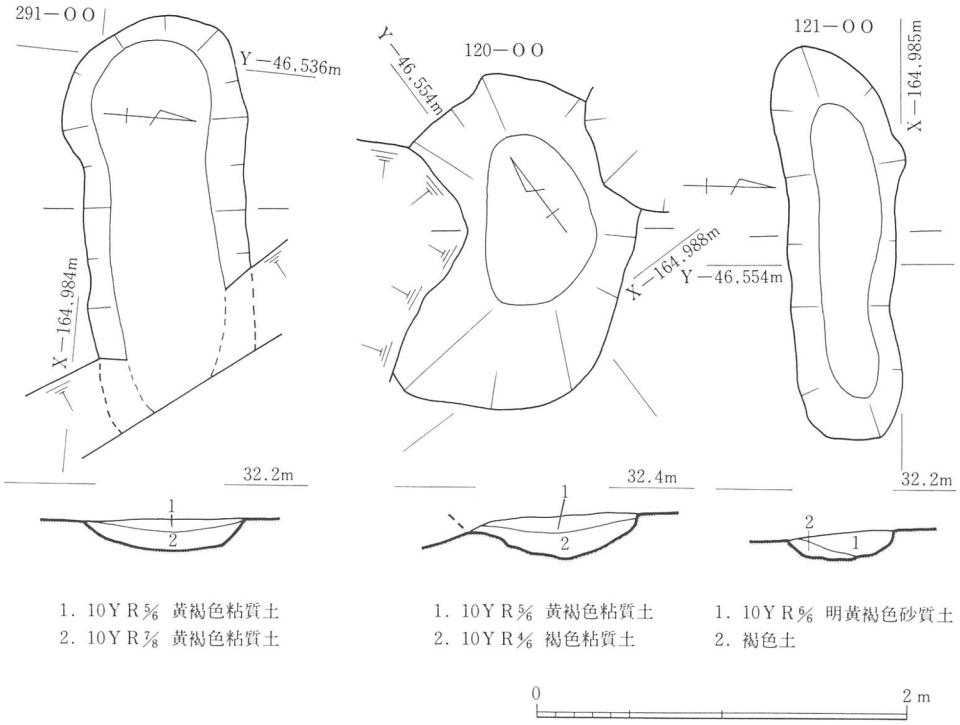
出土遺物は少なく，須恵器杯身・壺などの破片十数片と土師質土器片数点が出土している。549は陶質の甕で胎土は粗い。

120－ＯＯ（第147・148図の551～554，図版120）

第Ⅱ区北端中央のＫ25ＶＬで検出された土坑である。東側は280－ＯＯと重複し，西側は新しい時期の掘り込みによって切られている。復元的にみれば楕円形を呈し，長径1.8ｍ，短径は推定で1.3ｍ前後，深さ0.25ｍを測る。



第146図　280－ＯＯ出土遺物２（1/6）



第147図　120・121・291－ＯＯ平面・断面図（1/40）

出土遺物には須恵器杯身・壺などと土師器数片がみられる。554の甕は口縁端をナデて面を取り，体部外面は横方の平行タタキの後カキ目状の調整を行っている。体部内面はていねいにナデを加えている。

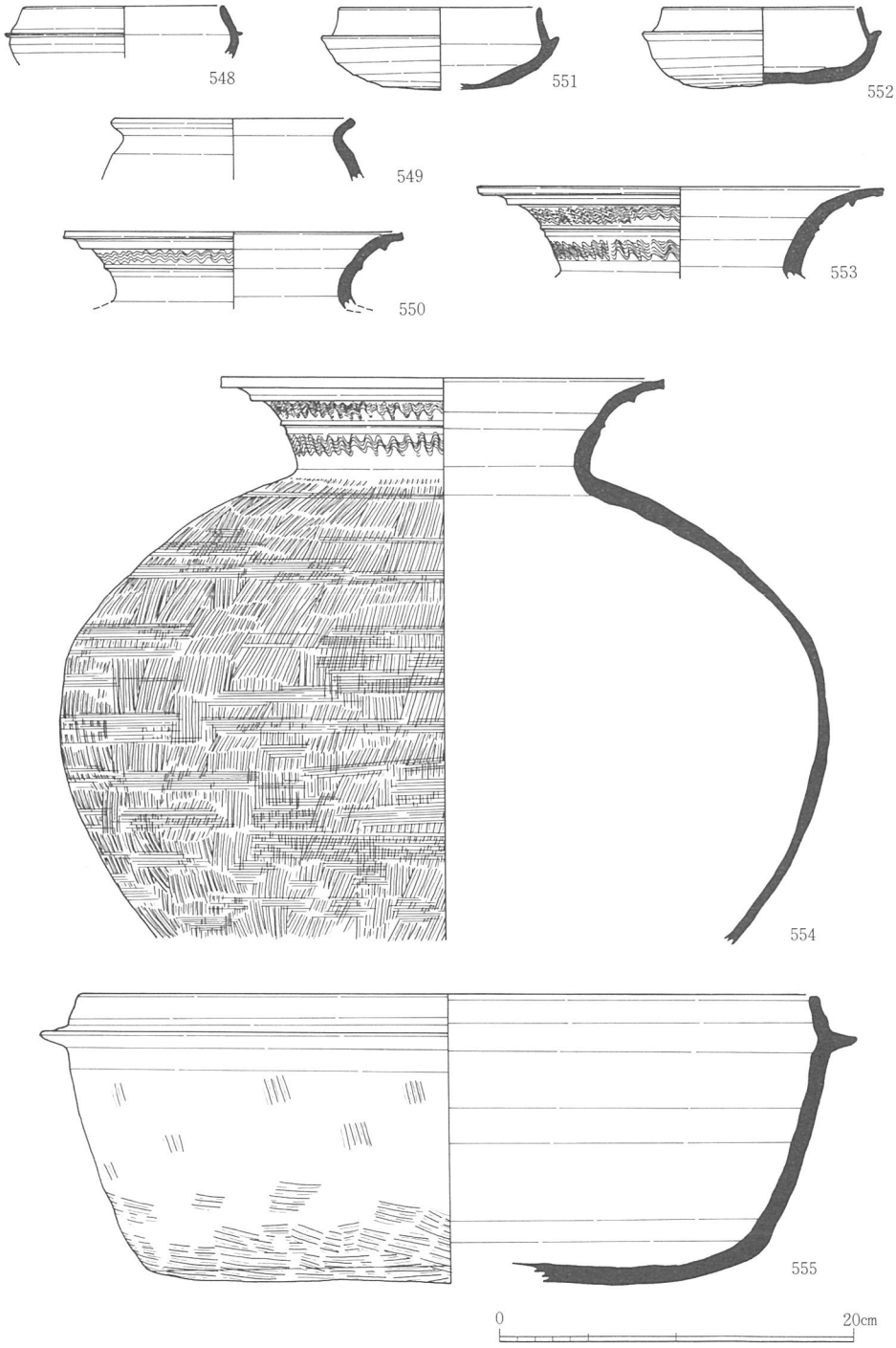
121－ＯＯ（第147図，図版53）

第Ⅱ区北端のＫ25ＶＬで検出された細長い楕円形の土坑である。120・280－ＯＯの北に接する。長軸を等高線に平行させ長径2.1m，短径0.6m，深さ0.15mを測る，舟底状の土坑である。

出土遺物は少なく，須恵器片・土師器片が少量みられるのみである。

741－ＯＯ（第148図の555，図版120）

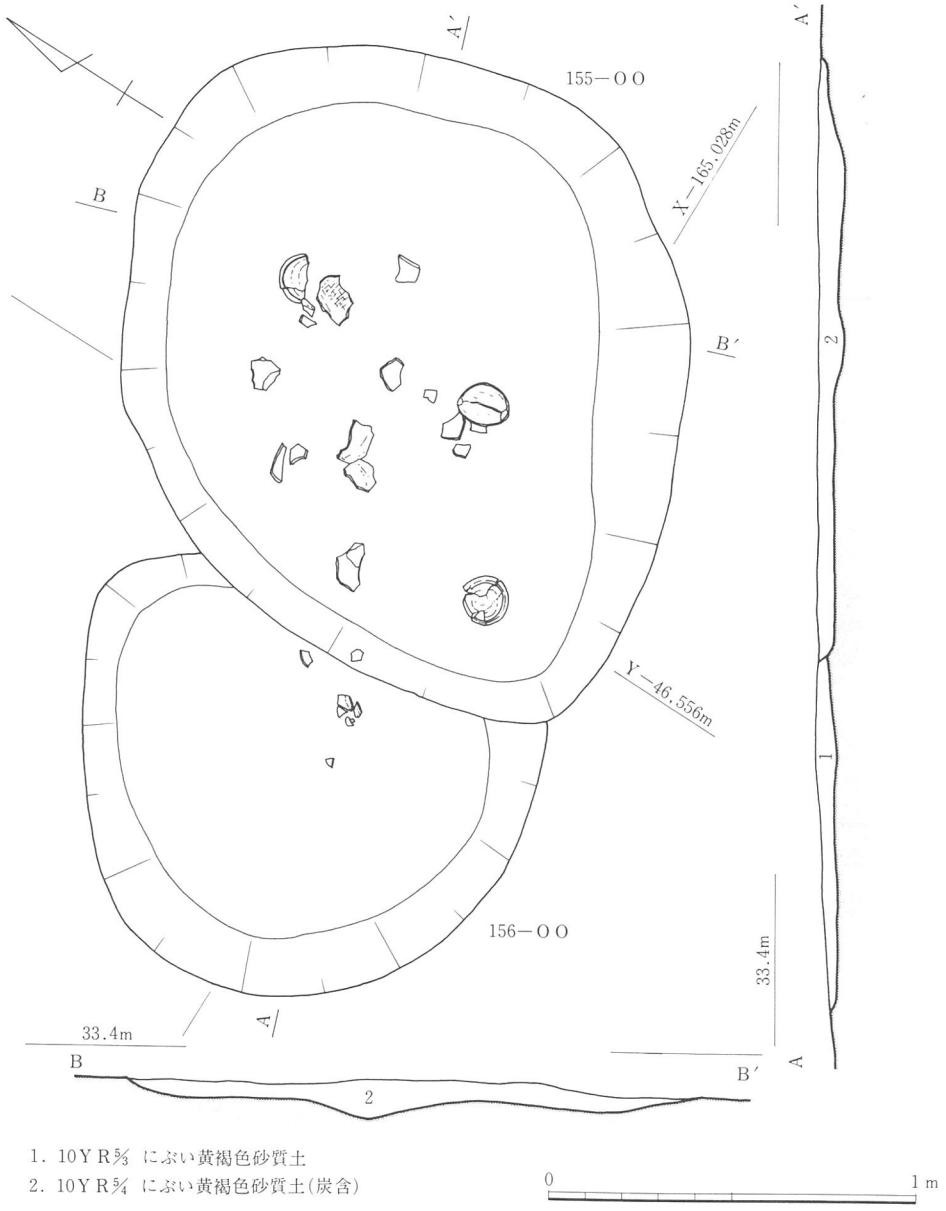
第Ⅱ区北西端に張り出した調査区隅のＫ25ＷＲで検出された土坑である。土坑の大半は調査区外に続き，形状と規模は不明である。西側にほぼ同時期の土器溜り（第154・155図）も重複している。図示したもの以外に須恵器数片，土師器十数片，弥生土器底部数片が出土している。555は焼成の甘い鍋形の土器で口縁部直下に鍔をもち，外面の底部付近を中心に平行タタキを施している。体部上半はその後をナデている。



第148図　120・291・741－ＯＯ出土遺物（1/4）

155－ＯＯ（第149・150図の556～564，図版56・120）

第Ⅱ区中央の東寄りＣ05ＧＬで検出された楕円形を呈する土坑である。本土坑の西側に接して156－ＯＯがあり，これを切っている。周辺の土坑は散在的で北端の土坑群とは少し異なった分布と形態を示している。



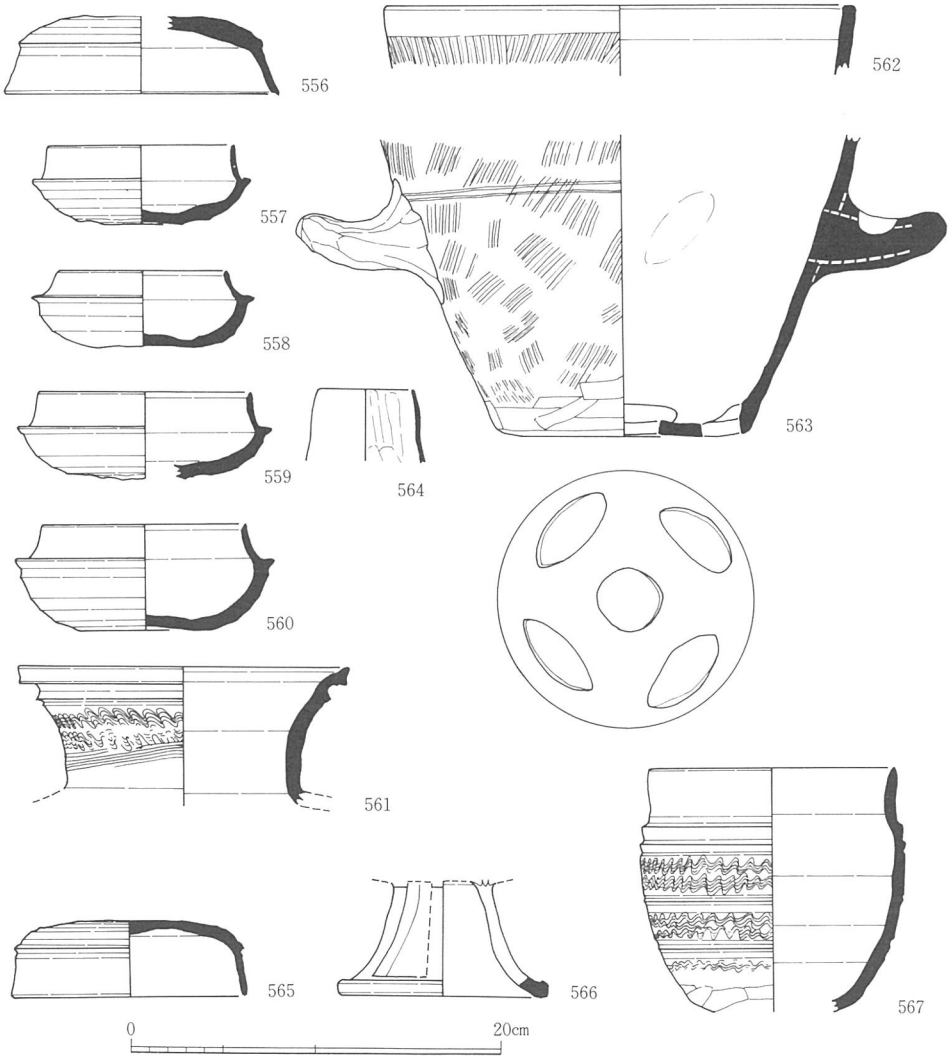
第149図　155・156－ＯＯ遺物出土状況図（1/20）

長径約２ｍ，短径1.5ｍ，深さ0.05～0.1ｍを測る土坑である。底は部分的に凹凸がある。確実な地山面で遺構の肩部を検出しているため，一部の遺物は土坑検出面より高いところで出土している。本来の削平はこの遺物検出上面程度まででであったと考えられる。

出土遺物には杯類を主とする須恵器多数と，外面に平行タタキ目を残す焼成のあまい半島系の甑（562・563），製塩土器（564）がみられる。

156－ＯＯ（第149・150図の565～567，図版56・121）

155－ＯＯの西に接するＣ05ＧＫで検出された円形の土坑である。155－ＯＯに切られた



第150図　155・156－ＯＯ出土遺物（1/4）

形状をしているが，遺構の残存状況，底の形状は155－ＯＯと近似している。遺物の出土状態も似ており，底より少し浮いた位置で検出されている。本来同じ１個の長径2.4m前後の土坑であった可能性もある。ただ両者の出土遺物に接合関係を認めることはできなかった。径1.3m前後，深さ0.05mを測る。

出土遺物には須恵器杯類・高杯・椀のほか，弥生土器を含む土師質の土器片が数十片みられる。土師質の土器片には高杯・把手の部位も認められる。

115－ＯＯ（第151・152図の574～576）

第Ⅱ区中央東端のＣ05ＨＮで検出された土坑である。３基のほぼ同時期の土坑が東西に連続的に連なっているうちの西端に位置する。切り合い関係からみて３基中では最も新しい段階の土坑である。

後世に上面を削平されていると思われ，遺構の残りは浅い。長径1.5m，短径1.1m，深さ0.1m強を測り，楕円形を呈する。埋土は単純で暗褐色の粘質土である。

出土遺物には須恵器壷などの破片約30片，焼きのあまい半島系土器の把手（574），土師器片約20片などがみられる。完形に復元できるものはない。

116－ＯＯ（第151・152図の568～573，図版121）

115－ＯＯの東に接してＣ05ＩＮで検出された土坑である。東側に接する長径約３ｍの楕円形の土坑117－ＯＯを切り，115－ＯＯに切られている。

長軸をほぼ等高線に平行させ，長径2.7m，短径1.55m，深さ0.1m弱を測る中膨らみの楕円形を呈する。埋土は単純で暗褐色粘質土である。この土坑も削平を受けているためか遺構の残りは悪い。

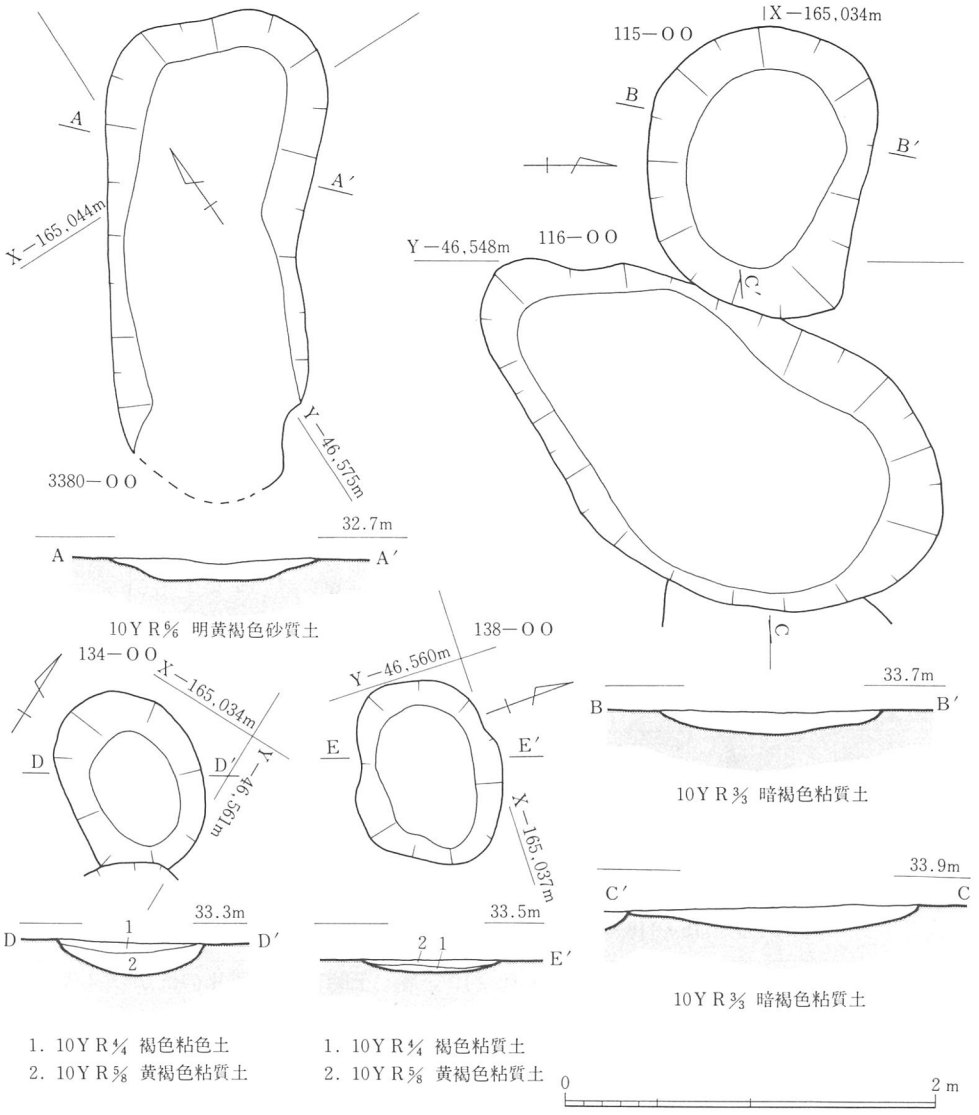
３基の土坑の中では器形を知り得る出土遺物が多かった。須恵器各種と黄褐色の半島系軟質土器の甕（573），焼けた石などがみられる。573は体部外面に平行タタキを施した後部分的に縦方向のハケ目を加えている。内面は全体的に黒く変色している。

134－ＯＯ（第151・152図の579・580，図版127）

第Ⅱ区のほぼ中央，弥生時代の溝133－ＯＳの南西に接したＣ05ＩＪで検出された土坑である。相似た２基の土坑が並ぶうちの北側に位置し，135－ＯＯに切られている。

長径約１ｍ，短径約0.6m，深さ0.1mを測る楕円形の土坑で，断面Ｕ字形を呈する。埋土は二層に分かれ，褐色系の粘質土を基調とする。

出土遺物は少ないものの須恵器杯（579），土師器片の他少量のサヌカイト剥片と石錐（580）がみられる。

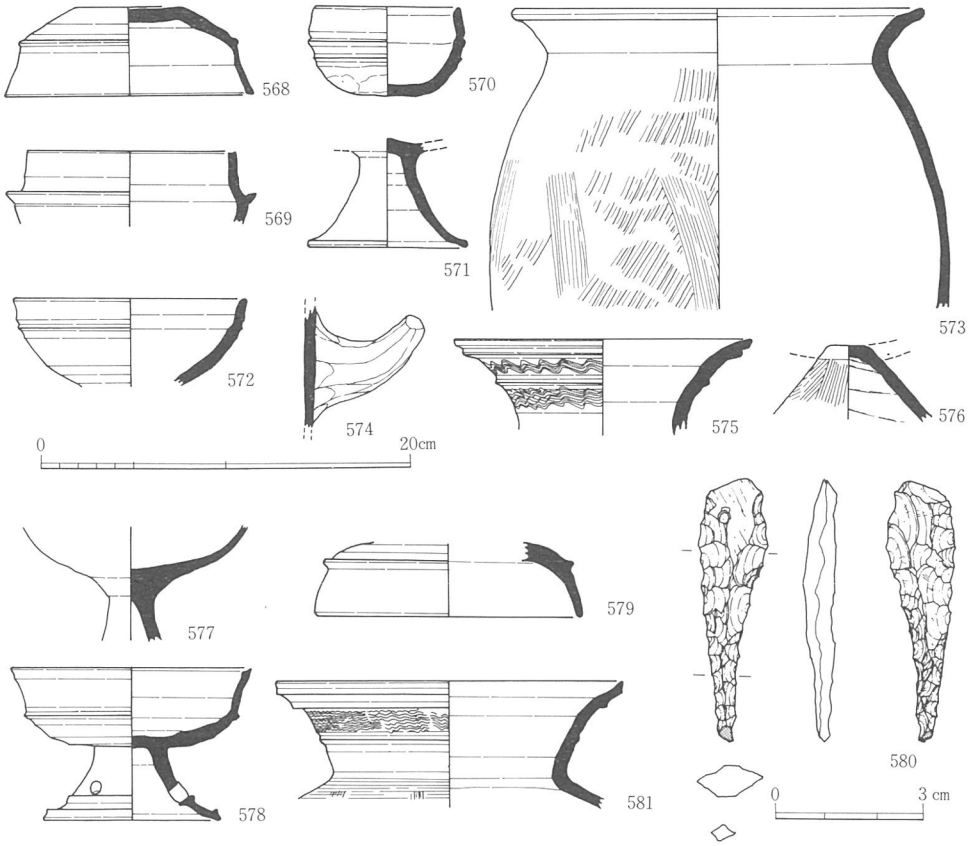


第151図　115・116・134・138・3380－ＯＯ平面・断面図（1/40）

138－ＯＯ（第151・152図の581）

第Ⅱ区のほぼ中央のＣ05ＪＫで検出された土坑である。周辺には数基の土坑が集中している。138－ＯＯは南北に３基並ぶうちの中央に位置する。この３基はいずれも同規模の楕円形を呈し，長軸を等高線に対して直交させている。この斜面上方約２ｍのところにも同様な土坑がある。

長径1.0ｍ，短径0.8ｍ，深さ0.1ｍ弱を測る。後世の削平を受けており，遺構の残りは悪いものの，埋土は二層に分けられる。上・下両層とも黄褐色系の粘質土である。



第152図　115・116・134・138・3380－ＯＯ出土遺物（1/4，2/3）

出土遺物はわずかで須恵器壷（581）・杯身片少量，土師質の土器片のほかサヌカイト剝片がみられる。この付近の他の土坑の出土遺物も同様である。

3380－ＯＯ（第151・152図の577・578，図版121）

第Ⅱ区中央南寄りのＣ05ＬＧで検出された土坑である。この１基だけ単独に存在する。弥生時代の竪穴住居126－ＯＤと重複し，112－ＯＤの排水溝を切っている。付近は著しく後世の削平を受けている可能性が強く，特に西半分は近世以降の畑区画溝に切られている。このため遺構の残りはよくない。

長方形を呈し，検出長径約2.6m，短径約1.0m，深さ0.05mを測る。埋土は単純で黄褐色の砂質土である。

出土遺物は周辺に分布する弥生時代の遺構のためか弥生土器片を含むが，口縁と脚端の一部を欠損する高杯（578），土師器高杯などがみられる。

4．溝

第Ⅱ区の古墳時代の溝は少なく，北寄りに集中する小規模な溝と南寄りに調査区を横断して流れる溝などが明確なものとして挙げられる。他にも数カ所で溝状の遺構を認めることができるが，時期が不明確であったりして該期のものとしてとり挙げがたいものが多い。ここでは確かなものを中心に紹介する。

109－ＯＳ（付図２，第153図の583～585，図版122）

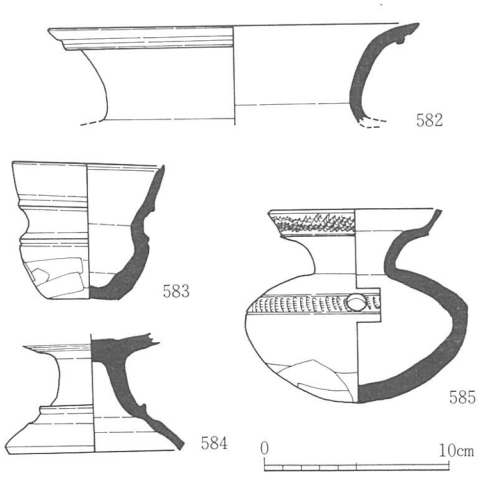
第Ⅱ区中央南寄り東から西に調査区を横断するように流れる溝である。溝の東端は削平されているためかＣ05ＬＬ付近から現れ，途中で弥生時代の竪穴住居110－ＯＤの中央を横切り，Ｃ05ＭＩ・ＬＧで二度くの字に屈曲する。溝の西末端は調査区端に現れている谷頭に続いている。この部分では溝幅は少し膨らんで，溝底も急に下がっている。Ｃ05ＭＩ地区の溝の屈曲部は斜面の傾斜に対して不自然に曲がること，溝幅が一定であることなどから人為的に掘削された可能性が強い。弥生時代の住居を切って流れているためか，溝の西端付近には弥生土器片が多く検出されている。さらにその西の谷部には古墳時代，弥生時代の遺物が堆積している。谷の傾斜が強いためその堆積状況をそのまま理解してよいかどうか問題があるが，谷の遺物には弥生時代・古墳時代の遺物がある程度分離できた部分もあった。この部分の遺物は包含層の遺物の項で記すことにする。

検出全長約26m，幅0.5～0.8m前後，深さ0.2m前後を測り，断面Ｕ字形を呈する。溝底の高低差は約1.9mある。埋土は比較的単純で黄褐色土である。

溝内から弥生土器片の他に須恵器甕片・高杯・小型の坩・瓮などが出土している。583の小型の壷はやや焼成のあまい須恵質で，胎土には砂粒を含まない。土師器の小型丸底坩の器形に通じるものがある。底部は平底で粗くケズリ離したままである。

107－ＯＳ（付図２，第153図の582）

第Ⅱ区南寄り中央付近のＣ05ＮＬからＯＬにかけて検出された溝である。弧状に湾曲し途中でＳ字に小さく屈曲している。斜面下方にあたる北西側には認められない。溝がこの部分にも巡っていたかどうか現状では判断できない。溝で囲われたようになっ



第153図　107・109－ＯＳ出土遺物（1/4）

ている，東西約７ｍの部分には多数の柱穴が検出されている。先述のように建物があった可能性のある柱穴群で，この溝も想定される建物となんらかの関連を持っていたかも知れない。現状ではその意味を特定しがたい。

総延長11.5ｍを検出した。幅0.3ｍ，深さ0.1ｍ弱を測る。埋土は単一で黄褐色系の礫混じり砂質土である。

出土遺物は少なく須恵器壺片など少量と土師質土器片を含んでいる。

283・284－ＯＳ（付図２）

第Ⅱ区北端のＫ25ＵＭ・ＵＮで検出された溝である。東西に直線的に続く溝（283－ＯＳ）とこれに直交する形で南北に続く溝（284－ＯＳ）がみられる。その交点の部分は新しい時期の掘り込みによって損なわれており，283－ＯＳの東端も新しい時期の掘り込みによって失われている。284－ＯＳの北端も今回の調査区外に続いていて全体の形状を知ることはできない。検出長は283－ＯＳで3.5ｍ，幅0.3ｍ，284－ＯＳで長さ1.7ｍ，幅0.4ｍ弱，深さ0.05ｍ前後を測る。出土遺物は283－ＯＳに須恵器甕片と土師器片が少量，284－ＯＳに須恵器甕片が30片たらず出土している。

二つの溝の関係については溝の規模や形状，埋土の状況が近似することから一連の溝と考えられるが，確証はない。竪穴住居の壁体の溝が痕跡的に残っている可能性があるものの周辺の削平が著しいため断定できない。予定されている北側里道部分の調査結果が明らかになるまで判断を保留しておきたい。

294－ＯＳ（付図２）

第Ⅱ区北端中央のＫ25ＶＪで検出された東西方向の溝である。南北に続く溝（292－ＯＳ）と直交する位置にあるが，後世の掘り込みのため屈曲部が失われており，一連の溝かどうかは断定できないが，その可能性を指摘しておきたい。溝幅約0.4ｍ，深さ0.05ｍ弱を測り，断面Ｕ字形を呈する。

出土遺物には須恵器片少量と土師質土器片少量がみられる。

296－ＯＳ（付図２）

第Ⅱ区東寄りのＣ05ＥＯからＤＮにかけて検出された溝である。等高線に直交して北西方向に流れ，総延長7.5ｍを検出した。弥生後期の竪穴住居103－ＯＤの中央の炉付近にその南端部が認められ，明らかにこの住居が埋まって後に掘削されている溝である。

最大幅0.5ｍを測る。遺構の残りが悪いためか出土遺物は少なく，須恵器片が少量検出されているのみである。溝の性格等については推論できない。

5．その他

窯（付図２）

第Ⅱ区西端のＣ04ＫＸで検出された。調査区の端の平坦部に窯のごく一部が検出され，その大半は南側の谷に向かう傾斜面に残存する。このため窯の主体部については次年度の調査に委ねることにし，今回の調査は遺構上面の検出にとどめた。現存の検出長は東西約３ｍ，幅１ｍほどである。

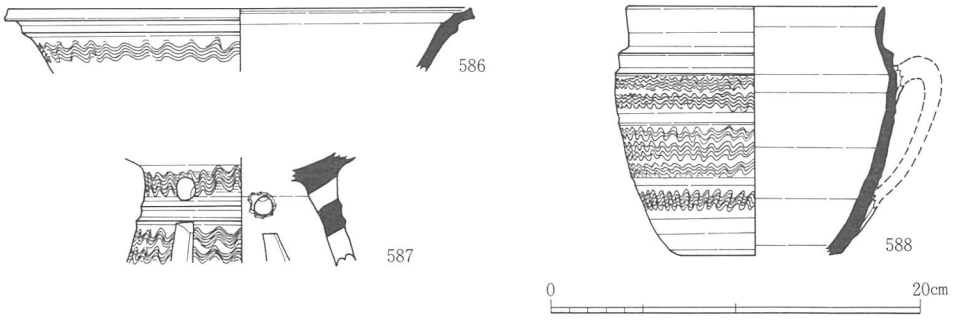
現在調査中のため具体的な内容は次回に報告するが，窯の時期は６世紀末頃になるようで本地区の集落との直接の関わりはないようである。

土器溜り（第154・155図，図版122）

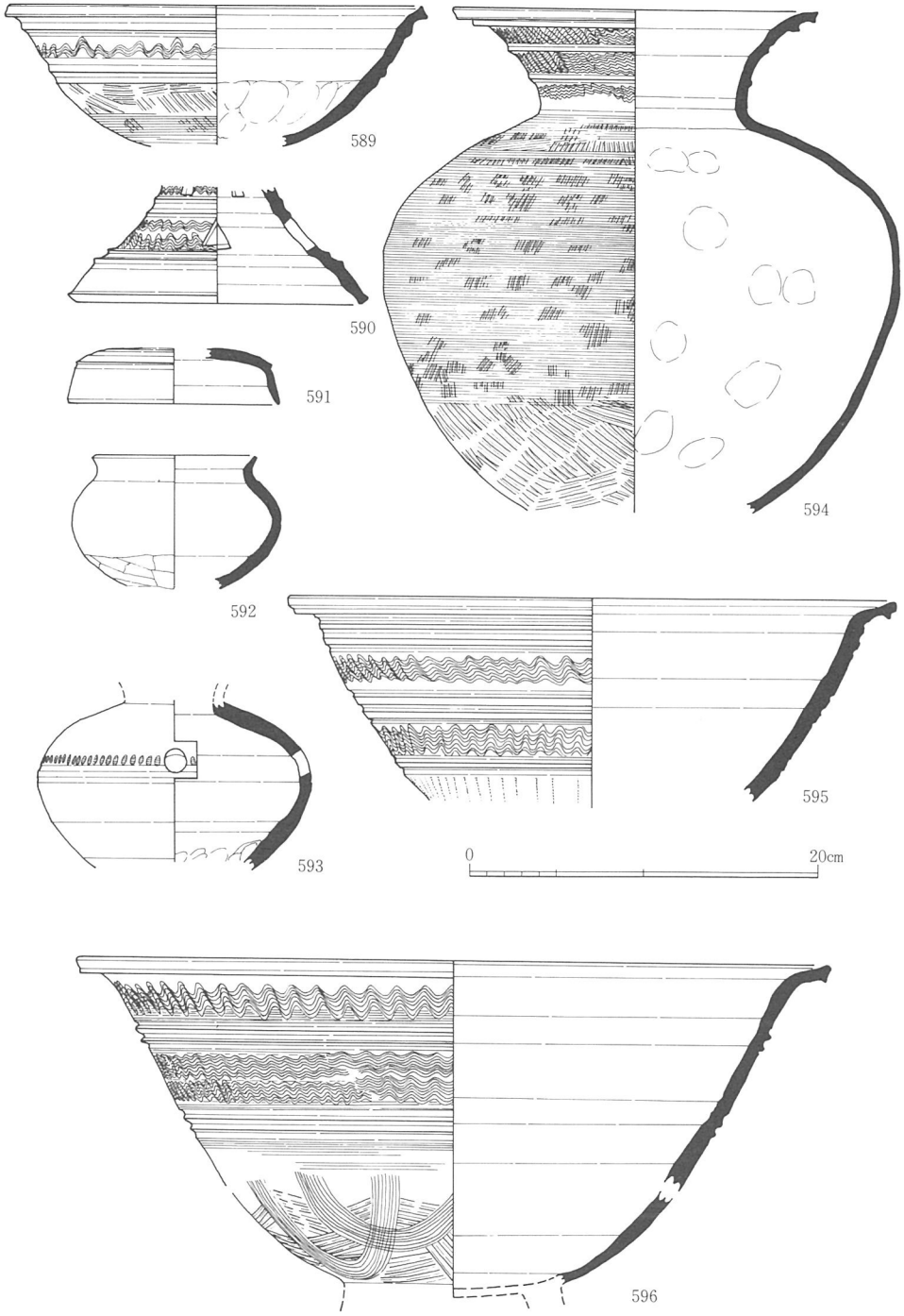
第Ⅱ区北東端のＫ25ＷＲ付近で検出された土器溜りである。この地点にはほぼ同じ時期の土坑が集中している。この土器溜りも不整形の窪みが認められたが，確実な土坑として形状を把握できなかったため，ここでは土器溜りとして報告しておく。

遺物は741－ＯＯと383－ＯＯの間に，ほぼ調査区全面にわたって１×２ｍほどの範囲に広がって堆積していた。隣接する２基の土坑との遺物の峻別は必ずしも完全ではないところもある。各種の須恵器・土師器片が多量に認められ，該期の甕片が付着した窯体の破片も含まれている。須恵器甕・壷の破片が多く，器台片も少なくとも４個体以上検出されている。図化はしていないが，ほかに二重瓦（877），高杯脚部片も数片みられる。

594の体部内面は無文あて具の痕跡を残す。592の須恵器坩は口縁端部を切り取ってシャープな面を作り出し，底部付近は細かく丁寧にケズっている。内面の体部下半も斜め上方向に細くケズリ上げている。595の器台は外面の下端部に櫛状工具による刺突列がみられ，596の器台底部付近は横方向の平行タタキの後に櫛状工具で上に開く重弧文風の弧線文を重複させながら描出している。



第154図　土器溜まり出土遺物１（1/4）

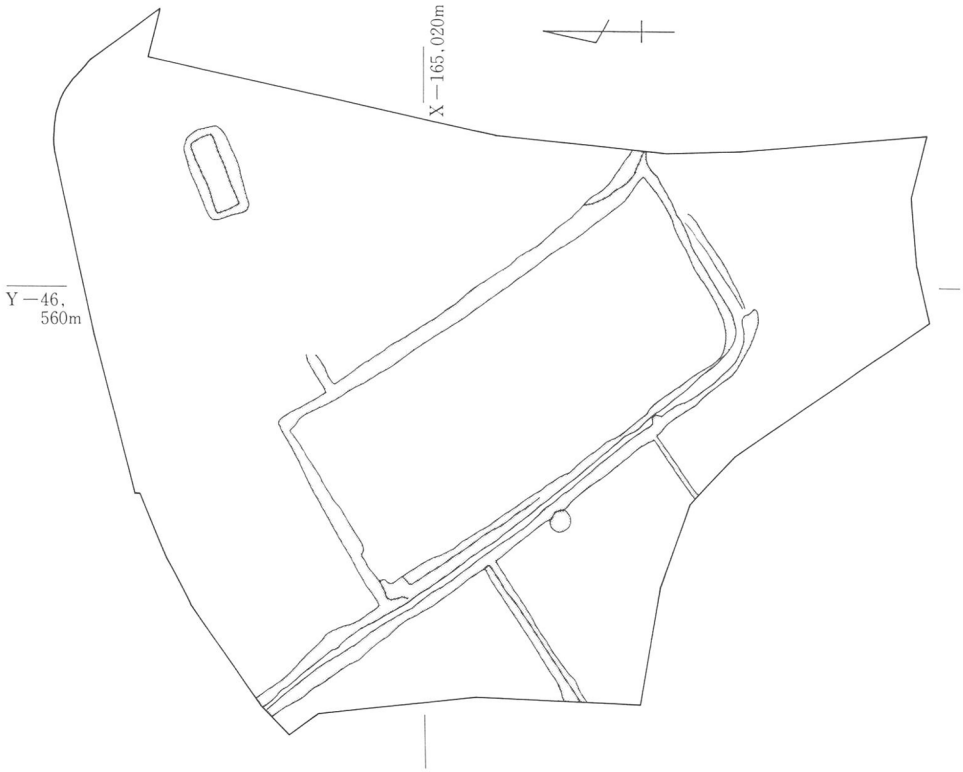


第155図　土器溜まり出土遺物２（1/4）

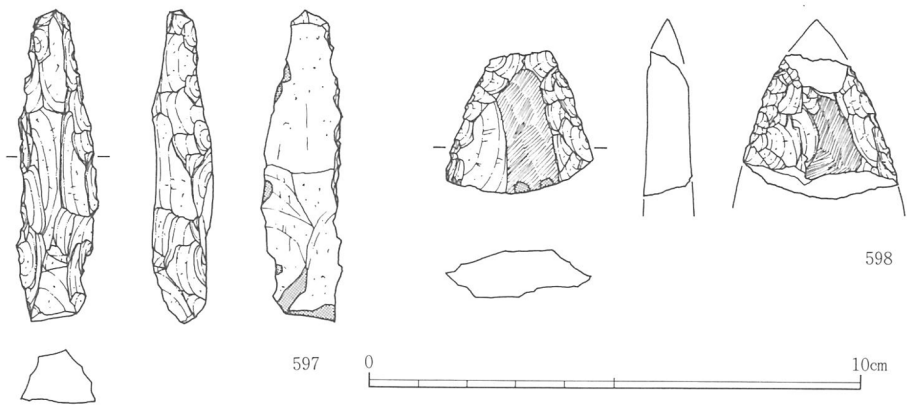
第３項　中世以降（第156図，図版57）

第Ⅱ区では中世以降の遺物はきわめて散在的で調査区北寄りの，畑あるいは植木の苗床等の土取りないし掘削跡が密集する地域でおもに検出されている。中世に属する確実な遺構は認められず，近世以降の畑区画溝と井戸・水溜と思われるような土坑が各所にみられるだけである。

この地区には数枚の大きな区画を持つ畑があり，この区画にほぼ沿った畑境の溝や畦が現在の耕作土の下部にも検出された。調査区の南東部から北西部にかけて矩形に続く２条の溝は調査区外に残る大きな畦の方向と位置する。溝内の埋土は現在の耕作土に近似する。この区画が作られた時期，すなわちこの丘陵部で古墳時代集落の廃絶後，大きく人の手が加わった時期について確実な証左はないものの近世初頭以後ではないかと思われる。第Ⅰ区東の谷の堆積物の花粉分析の結果では，対応する地層でソバの花粉が大量に検出されており，その栽培が推定されている。これらの畑の開墾当初の姿を想定することができる。



第156図　近世遺構概略図

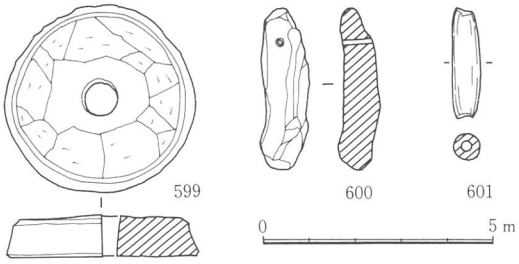


第157図　包含層出土遺物１（2/3）

第４項　包含層の遺物

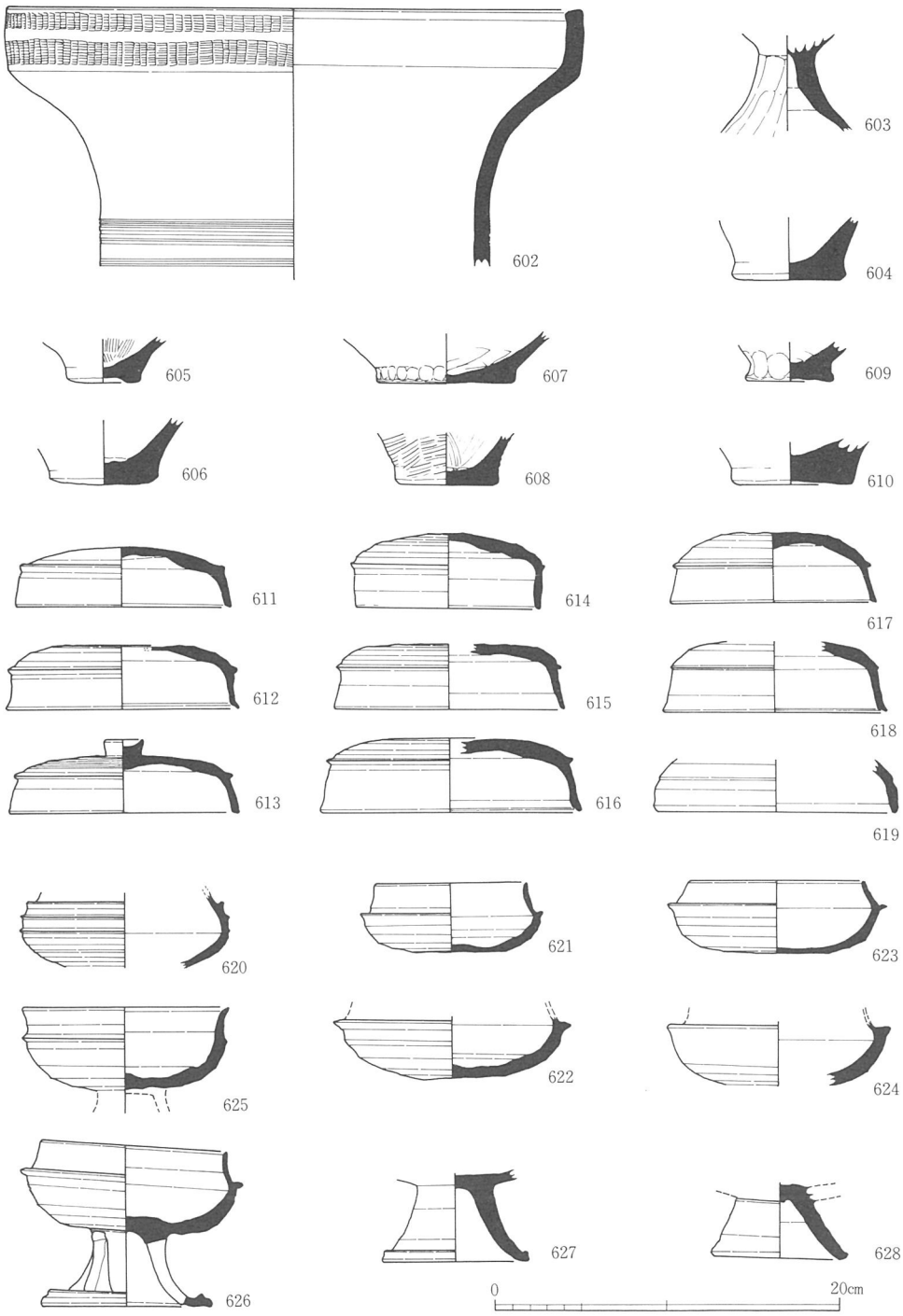
（第157～161図，図版123～127）

第Ⅱ区の全体にわたって顕著な包含層が残っている部分は少なかったものの，表土に含まれていたものをはじめ遺構にともなわない遺物は多い。とくに第Ⅱ区中央西端の谷部付近には土器溜り状に弥生時代・古墳時代の遺物が集中的に堆積していた。また明らかに遺構の時期と違う混入遺物もかなりみられた。多くは細かく破砕された資料であるが，近隣の遺構から遊離したと思われるような完形に近い遺物もある。ここではそのなかの特徴的な主要遺物を石製品・土製品・土器の順に紹介することにする。

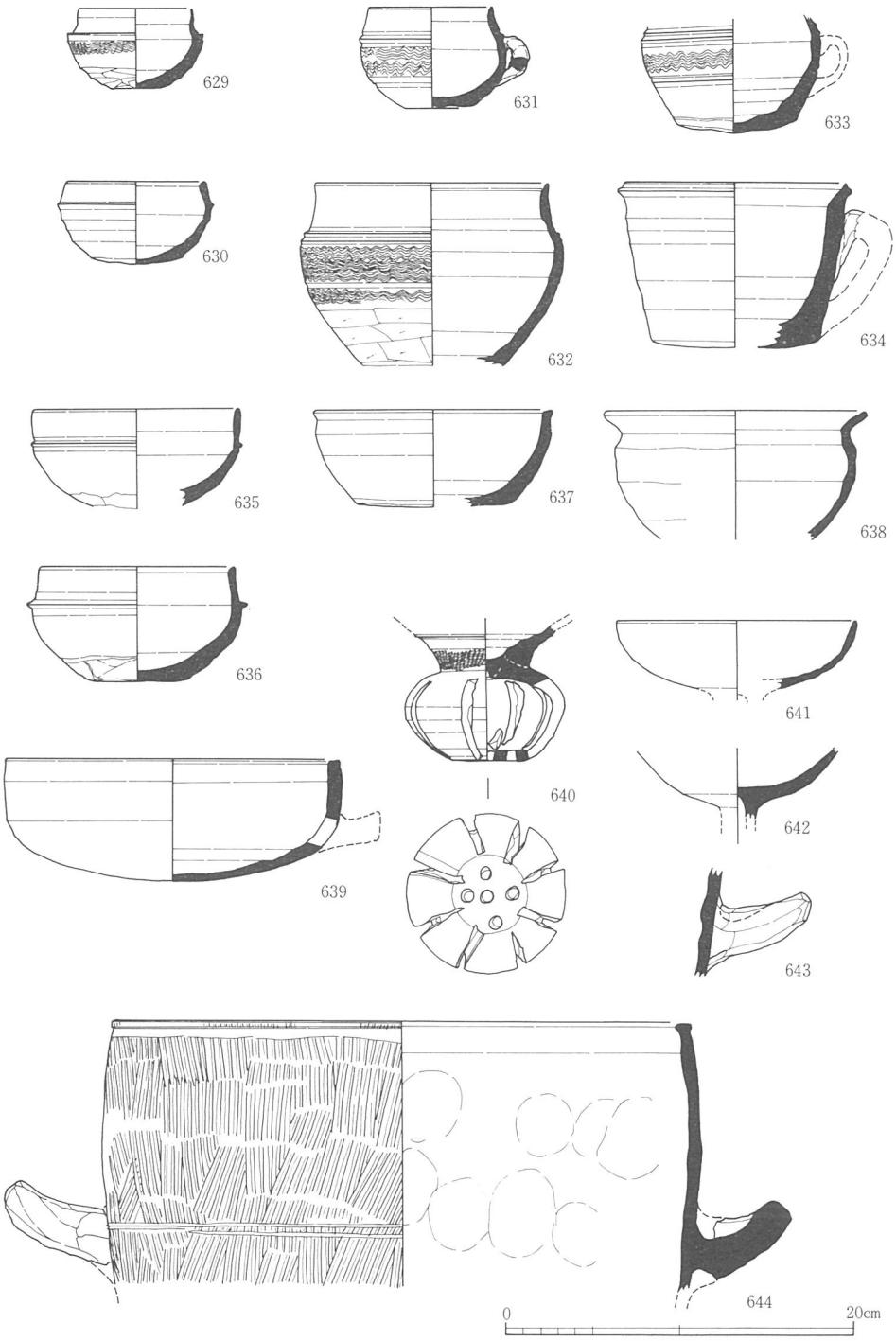


第158図　包含層出土遺物２（1/2）

597・598は第Ⅱ区南半部で検出した石器である。597は長さ6.4㎝，幅1.5㎝，重量13.7ｇを測る舟底型石器，598は現存長2.7㎝，幅3.3㎝の尖頭器である。両面の一部は磨いて平滑に仕上げている。いずれもサヌカイト製である。601は重さ1.8ｇを測る土錘である。600は図の上端に小孔を穿っている土製品である。601の土製品と似た砂粒のない胎土を持つ。現存長4.5㎝，重さ5.2ｇを測る。垂飾の模造品の可能性も考えられる。599の土製紡錘車は第Ⅱ区北端のＫ25ＷＰで出土している。土師質で表面は黒色を帯び，軟質土器の焼成に近い。側縁はていねいにナデられ，穿孔部も滑らかに調整されている。他に磨製石包丁（878），石鏃（879），サヌカイト剝片多数，柳葉形の鏃の可能性のある鉄製品，茎と思われる鉄製品が出土しているが図示しなかった。



第159図　包含層出土遺物３（1/4）



第160図　包含層出土遺物４（1/4）

602の壷形土器は弥生時代の溝133－ＯＳの西側Ｃ05ＩＪで，603～605は南寄りの竪穴住居の縁辺で出土している。607～609などの後期的な様相を持つ土器は第Ⅱ区北東端付近で出土している。602はこの調査区では最も古い様相を示している土器である。口縁部には丁寧な簾状文を施し，頸部の現存部をみる限りでは櫛描の平行線を帯状に巡らせている。この丘陵部に集落が形成される初源期を示すものとみられる。

611・613・625・626・643・650・651・654はピット群２付近で検出されている。626の高杯は長方形の透かし孔を三方にもつ。651の器台は口縁端をナデて平坦にした後，沈線を巡らせている。654の壷口縁部下側の波状文は浅く描かれていて施文が途切れがちである。643の甑把手は焼成のあまい半島系の土器である。

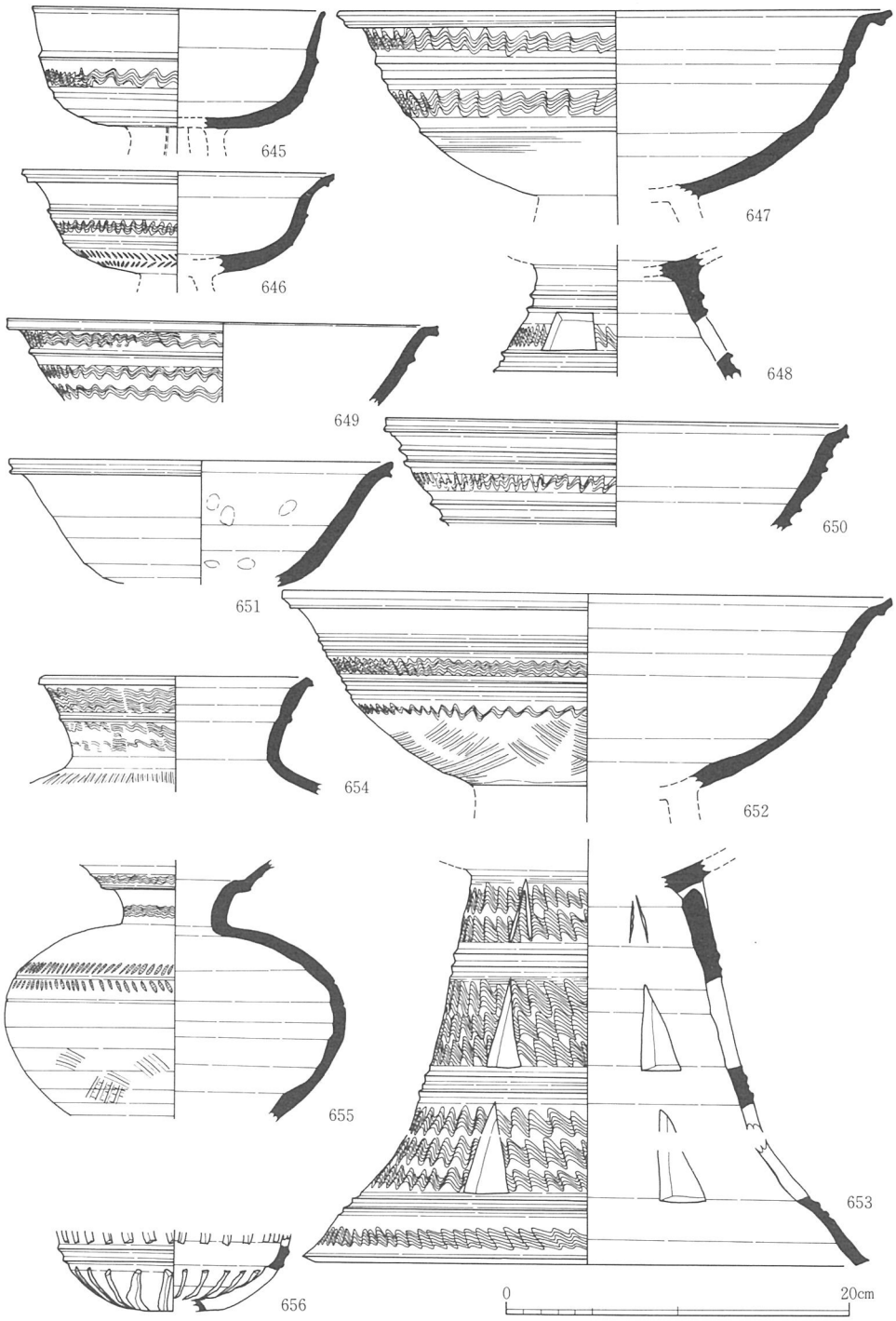
618・630・635・636・639・644・645は第Ⅱ区中央東端の建物を想定したピット群１の西斜面下方で出土した。甕は口縁部の形状が少しずつ異なる。639の鉢は須恵質の焼成で把手を一つもつ。把手と体部の接合部分は体部外面に貼付けるのではなく，差し込むようになっていたと思われ，その部分が円形に脱落している。644の甑も硬質で外面に平行タタキを施し，二条の沈線を巡らせる。把手の上面はヘラ状工具で刺突している。

612・614～617・620～624・627～629・631・634・635・637・638・646・647・652・653・655・656は第Ⅱ区北東部の後世の掘り込みが集中する地区で出土している。伴い得る遺構との蓋然性は求めがたいが，この地点には図示資料とほぼ同時期になると考えられる土坑が集中している。土器溜り出土土器（第154・155図586～596，図版125の877）を含め、二重瓶などの特異な遺物や器台などが多くみられる。652の器台受け部の下半は平行タタキ目を残している。653の器台脚部は広範に散らばっていたが，胎土等から同一個体と判断されるものである。脚部の文様帯のうち最上段の透かしは三角形ではなく矢羽状になっている。裏面に達していないで表面だけに刻まれている部分もある。656は二重瓶になると考えられる小片で，透かしは細い。

633・641は第Ⅱ区中央の掘立柱258－ＯＢの西斜面下方で出土している。641の高杯は土師質である。

632の椀は把手の有無が不明である。体部下半を粗くヘラケズリしている。

640は須恵器の鈴である。第Ⅱ区北西部から出土している。瓶形をしており，胴部に計８個の方形透かしを，底部に５個の円孔を配している。胴部内には土製の珠が入っている。瓶の口縁部に当たる部分は欠損している。頸部と胴部の境は一度瓶の形に口頸部を作った後，粘土で充塡している。頸部には櫛状工具による波状文を巡らせている。



第161図　包含層出土遺物５（1/4）

第4節　小 結

第1項　弥生時代以前の遺物について

第Ⅱ区では少量ながら後期旧石器時代の石器と縄文時代に属する可能性のある石鏃が出土している。いずれもサヌカイト製の打製石器で，旧石器時代のものには舟底型の石器（597）がある。第Ⅲ区でも国府型ナイフ形石器が出土している。陶器川を挟んで北側に位置する平井遺跡でも丘陵部の広い範囲にわたって該期の石器，石片が出土している。泉北丘陵部では他にも点々とこの時期の遺物の出土が報じられているが，その出土は散在的で，確実な包含層をともなうものはない。ただ平井遺跡では原池に面する崖面にサヌカイトを含む古崖錐堆積物がみられ，段丘構成層を不整合に覆っていることが確認されている。段丘構成層の上部には部分的ながら姶良火山灰とアカホヤ火山灰の可能性のある火山灰が混ざり合って検出されている。泉北丘陵部の段丘面の形成がいつの時期のものであるかは，地質学的な検討をさらに待つ必要があるようであるが，旧石器時代人の生活面がこの丘陵上にあったことはまちがいない。この地域の丘陵は起伏が多く，比較的広い平坦面を形成している段丘部でも小さな開析谷が複雑に入り込んでいる。この一帯で良好な包含層をともなった石器出土地が見つかる可能性はあり，将来に期するところは多い。

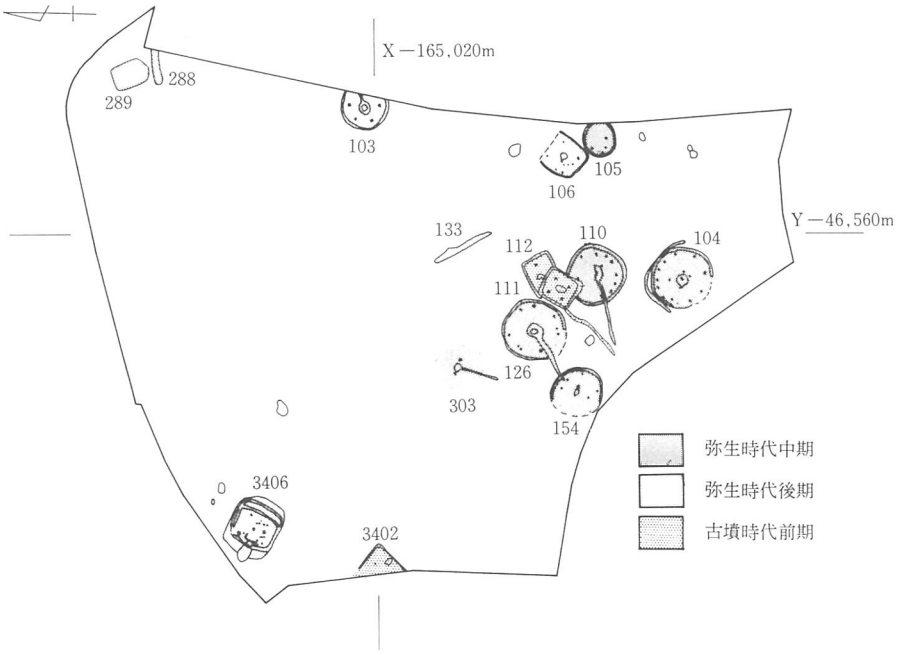
第2項　弥生時代～古墳時代前期の集落の展開

伏尾丘陵では弥生時代住居は建て替えの重複を除くと，総計で15棟検出されている。これに古墳時代初頭に属する3棟を含めてその大半が第Ⅱ区に集中している。その時期は弥生時代中期末に属するものを最古とするが，丘陵上に残された遺構としては第Ⅱ区検出の133－ＯＳや方形プランの289－ＯＸが前述のように竪穴住居にならないまでも，中期の中ごろまで遡る可能性を持っている。また今回の調査範囲で最も古く遡る弥生時代の遺物には第Ⅰ区東側の谷部から検出された甕形土器（278）が前期に属する可能性を持っているほか，中期前半に属する壺形土器（265）などがみられる。中期の中ごろの遺物も断片的であるが第Ⅰ・Ⅱ区で認められ，第Ⅱ・Ⅲ区の間の谷部でも，現在調査中の出土遺物中に中期前半から中期中ごろの土器がかなり検出されている。したがって今回の調査区内には確実な遺構は明らかでないものの，この丘陵部でのひとの活動の痕跡は少なくとも中期の中ごろまで遡って考慮する必要がある。その中心的な範囲は現在の出土資料からみると第Ⅰ・Ⅱ区の丘陵斜面部にあると考えられる。

確実な集落の展開は中期末に始まる。この時期には第Ⅲ調査区で径９ｍを越える大型のもの１棟を含む３棟の竪穴住居からなる一群が認められ，その北に幅約40ｍ，当時の比高差で約８ｍの落差をもつ深い谷を挟んで第Ⅱ区の集落が認められる。第Ⅱ区の住居群は第Ⅲ区との間にある谷の規模からみて，第Ⅲ区の住居群とは別の群を構成すると考えられる。

第Ⅱ区の中期末の集落は西に下る斜面下方の谷に面した位置に，時期の不確実な303－ＯＤを含めて５棟，東側の尾根筋部分に１棟が認められる。現在の住居の分布から，調査区外のおもに東の方にも広がると考えられる。住居にともなう遺物に乏しいため，遺物の面から個々の並存関係を求めるには難があり，本来の集落の在り方，推移を現状から判断するのは容易ではないが，おもに住居の分布状態から一つの可能性をみておきたい。

斜面下方に位置する住居群は建て替えを除けばいずれも壁体間の距離が２～３ｍ前後と近接している。今回検出の竪穴の位置関係を平面的な距離でみてみると，第Ⅲ区の中期の竪穴住居は３棟検出されており，これで一群を構成すると考えられるが，いずれも20ｍ前後の距離を保っている。第Ⅰ区から第Ⅱ区にかけての後期の竪穴住居は時期の下る可能性のある第Ⅰ区1540－ＯＤを含め６棟分検出されている。この後期の住居群の同時性につい



第162図　弥生時代・古墳時代前期遺構配置図

ては判断を保留して全体の位置関係をみても，1540－ＯＤが西側の1820－ＯＤと比較的接近しながらも13m前後の距離を持ち，そのほかは20m以上の距離を測る。第Ⅰ区の古墳時代前期の住居は２棟あるが，これに形態的に近似する1540－ＯＤを並存関係に含めても，この３棟は15m前後の距離を保っている。

以上の例に比べると第Ⅱ区の斜面部に位置する中期の住居群は例外的に接近していることがわかる。このことから第Ⅱ区の近接する５棟の竪穴の並存関係を否定してしまうことはできないが，竪穴間に一定の距離を設けた並存関係を考慮する蓋然性も主張し得る。

126－ＯＤと154－ＯＤは排水溝が重複していることから同時並存はないものとして考えると，まず126－ＯＤと104－ＯＤ，154－ＯＤと110－ＯＤの２棟の群を採り出せる。これに105－ＯＤと時期不明ながら303－ＯＤを加えると二時期にわたる３棟一単位の群がもとめられる。303－ＯＤの排水溝が154－ＯＤに向かっていることから両者の並存がないとすれば，組合せは複雑であるが三時期にわたる２棟一単位の構成を考えることが出来る。

いずれにしても２ないし３棟で一単位を構成することが想定される。この単位は第Ⅱ区調査地内では複数の単位になることはなく，一時期一単位の集落である。第Ⅲ区の集落との際だった差は，第Ⅱ区では少なくとも104・126・154－ＯＤの３棟でそれぞれ一回の建て替えが行われている可能性があり，これを仮に一時期ずつとして数えると，四ないし六時期，数十年間の長期にわたる集落であったと考えられることである。第Ⅲ区の集落との前後関係を断定することはできないが，第Ⅱ区を中心とする集落であったと考えられる。

後期の住居は調査区東端の丘陵高所に２棟，北西端に１棟の計３棟が認められる。北西端の住居は古墳時代中期の竪穴住居と重複していて，確実さに欠けるが，一回の建て替えが行われた可能性を持っている。この住居は位置関係からみて第Ⅰ区の後期の住居群に含めて一つの単位を考えた方がよいと思われる。ここでも第Ⅱ区東端の一群と第Ⅰ区から第Ⅱ区北西端にかけての一群の二箇所で，２～３棟からなる一単位の集落を構成している。第Ⅰ区の住居では良好な出土資料が少ないので充分な比較はできないが第Ⅰ区の谷部出土土器などを援用すると第Ⅱ区東側の住居群よりも後出的な要素がうかがえる。

それぞれの単位の住居群にどの程度の期間の継続性を認めるかは多少観点が分かれるが，この住居群に後期の全期間を当てることはできない。その意味では中期末の集落よりは継続期間においても小規模な，場合によっては間欠的に営まれた集落であると考えられる。

古墳時代前期の住居群は第Ⅱ区の西端に１棟，中央付近にやや位置をずらして重複する２棟が認められる。この２棟はほぼ同規格で，新しい方の竪穴は壁体の溝の様子から同じ

規模で一度の建て替えないし修築を行っており，計三時期の竪穴がみられる。この地点の住居と西端の住居が並存するかどうか，現在の調査範囲では判断できない。第Ⅰ区のこの時期の住居の分布は北端の傾斜変換点に近いところに分布し，２もしくは３棟で一単位を構成している。第Ⅱ区の住居がこの住居群とどのような関係にあるのかは今後の隣接地の実体が明らかになるのを待つ必要がある。

この地区の集落の推移を全体の時期を通してみると，住居は検出されていないものの弥生時代中期初め頃から中頃には丘陵部での人の活動が何等かの形で始まり，中期末には２～３棟一単位の集落が第Ⅱ区を中心に継続的に営まれている。その後同様な規模の単位の集落が，その中心を第Ⅰ区の斜面下方に移しながら間欠的に現れている。この推移が集落経営の基盤になる耕作地の確保と関連したものかどうかも，これからの広範囲にわたる周辺の調査結果を待つ必要がある。ただ第Ⅰ区の谷は花粉分析の結果，弥生時代から古墳時代にかけて水際に繁殖する樹木の花粉が多量に検出されており，谷の埋没状況からみてもこの地点が水田であった可能性はきわめて少ない。

第３項　古墳時代中期における集落の展開

第Ⅱ区では掘立柱建物，竪穴住居住居，溝，土坑等が多数検出され，古墳時代中期における集落の展開が明らかになった。ここではそれぞれ遺構の検討を行ない，集落の構造を明らかにし，第Ⅰ区の調査成果も踏まえた上で伏尾遺跡の集落についての概観を触れておきたい。

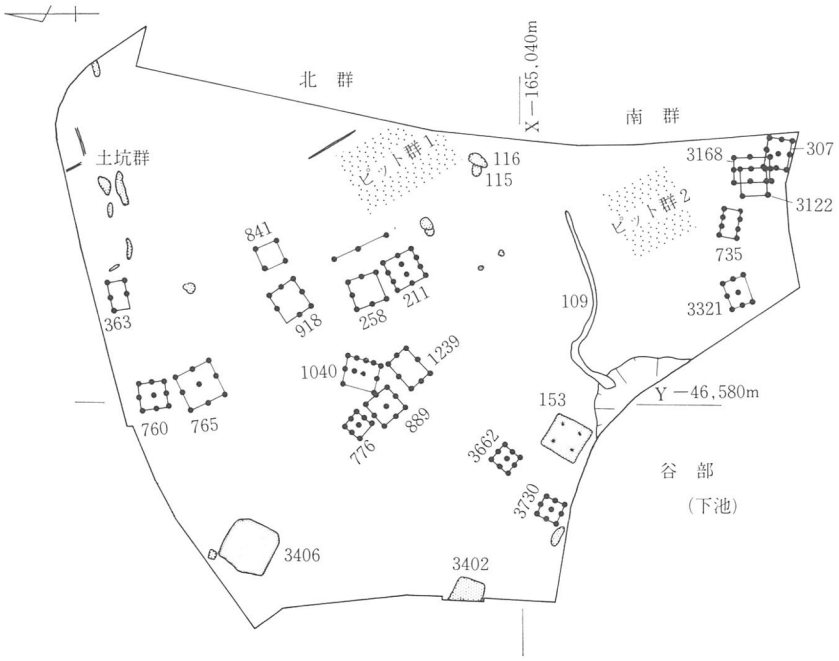
１．溝の概要

溝は，大型のものと小型のものに分類できる。大型のものに属するものは109－ＯＳ，小型に属するものは296・283・284－ＯＳがある。109－ＯＳは調査区の南部に位置し，調査区の南側の谷にむかってほぼ東西方向に走る。谷部に向かって延びることなどの立地的な面から見ると，排水を目的としたことが考えられる。しかしこの溝の北側と南側では遺構の分布密度や建物などに大きな特徴差は見出すことはできず，積極的な根拠は指摘できないが，第Ⅰ区で検出された大型の溝（1750－ＯＳ）に規模等が非常に類似し，区画の目的も考慮されている可能性もある。

小型に属するものは第Ⅰ区の下段で検出されたような区画の目的の可能性を積極的に指摘できるものは存在しない。

2．掘立柱建物の概要

第Ⅱ区では掘立柱建物は20棟程確認されているが，平面形がほぼ正方形を呈するものと長方形を呈するものがある。第Ⅰ区の建物の分類基準によると倉と考えられ，平面プランがほぼ正方形を呈しＢ類に属するものは建て替えを含め10棟検出されている。これらは，規模によって更に三類に細分可能である。大型のものは一辺が4.7m，面積は約23㎡を測る。765－ＯＢが大型のものにあたる。中型のものは建て替えを含め４棟確認されており258・760・889－ＯＢがこれにあたる。面積は15.2～16.8㎡を測り第Ⅰ区で検出されたものとほぼ同規模で，企画性の高いものである。小型のものは建て替えを含め５棟確認されており，776・841・3662・3730－ＯＢがこれにあたる。面積は7.84～9.3㎡を測り，企画性の高いものである。第Ⅰ区ではこの大きさのものは確認されていない。その他にも正方形に近いプランを持つものとして211・1040－ＯＢがある。211－ＯＢは２間×３間の総柱構造を持ち，他のＢ類に属するものとは若干構造は異なるがここでは倉と考えておきたい。1040－ＯＢは西辺が東辺に比べて短く，やや扁平なプランを呈し，西辺と東辺の柱穴の検



第163図　古墳時代中期遺構配置図

出状況に違いがあるが削平状況も考慮して総柱構造になる可能性も指摘できここでは倉として考えておきたい。211・1040－ＯＢの面積はいずれも約19㎡で大型ものと中型のものの中間的な大きさではあるがここでは大型のものとして捉えておく。

長方形を呈するものは９棟検出されているが，長辺と短辺の比率が１：1.1，１：1.2～1.4，１：1.8以上のものがある。１：1.1の比率を持つものには918－ＯＢの１棟しか復元できていない。１：1.2～1.4の比率を持つものは1239・3168・307・3321・3122－ＯＢがあるが，これらの中には1239－ＯＢ例のように住居の可能性のあるものと，307・3321－ＯＢ例のように総柱構造を持ち，倉の可能性を指摘できるものが含まれる。１：1.8の比率を持つものは３棟復元されている。ここでは構造から機能を推定することは避けたい。

またその他にも確実に建物としては復元できないがその可能性が指摘できる地区があり，調査区全体を見ても多数のピットが検出されておりこれら以外にも建物の存在したことは確実である。

３．竪穴住居の概要

竪穴住居は現在２棟検出されている。住居の特徴としては前段階（古墳時代前期）のものに比べるといずれの住居も平面的な規模は大きく，造り付けの竈を持っていることが挙げられる。立地の特徴としては調査区西端の丘陵傾斜変換線付近に位置する傾向が指摘できる。

４．土坑の概要

土坑は，規模や遺物の出土状況，分布状況にそれぞれ特徴がみられる。遺物の出土状況を見てみると，完形あるいは完形に近い製品が多量に出土するもの，須恵器杯身や土師器高杯の杯部などの完形品が１，２点出土するもの，土器の破片が数点出土し，埋土に多量の炭化物を含むものなどがある。多量の土器が出土したものとしては，280－ＯＯがある。280－ＯＯの出土遺物の器種構成は須恵器の杯身，杯蓋，高杯，椀，擂鉢，大型甕，土師器の甕などがある。このうち杯身，杯蓋は全体でその占める割り合いが高く，完形品も多く含まれているが，大型甕は口縁部の一部が１点出土したのみである。また，竪穴住居の出土例であるが3406－ＯＤでも杯身，杯蓋の占める比率は高く280－ＯＯと同様な傾向がみられる。一方第Ⅱ区で検出された土坑の中で甕の出土したものは285－ＯＯに限られ，出土総点数は多くないが杯類が見られないのも特徴的である。

埋土の中に炭化物が含まれるものは155・156－ＯＯがある。いずれも削平を受けていることを考え合わせても比較的浅いものと考えられ，遺物も280－ＯＯのように多量の土器が出土したものはない。

次に土坑の分布状況を見てみると土器が比較的多く出土するものは調査区の北端部分に集中する傾向がある。一方土器の破片が数点出土するものや，埋土に炭化物を包含するものは集中する傾向はみられず，むしろ建物の周辺域に位置する傾向があると言える。

5．第Ⅱ区の集落構成と全体の概観

ここまで個々の遺構の概観を行なったが，つぎに第Ⅱ区の集落の構成について触れておきたい。まず区画溝の可能性が指摘できる109－ＯＳを境にして北群（第Ⅰ区の南東端で検出された1510－ＯＢ，1530－ＯＯはその立地から第Ⅱ区の北群の範囲にふくめる）と南群にわけてみていく。北群の建物の配置の特徴としては，若干の主軸の方向性に違いはみられるが，２棟で構成されるものが数箇所認められることがあげられる。760－ＯＢと765－ＯＢ，211－ＯＢと258－ＯＢ，776－ＯＢと889－ＯＢ，841－ＯＢと918－ＯＢなどである。これらの一群はいずれも倉と考えられるものに属し，大型のものと中型のもの，中型のものと小型のもので構成されている。特に258－ＯＢは建て替えの可能性が高いものであり，同位置で方向を替えずして一方の建て替えが行なわれていることは，倉の構成が２棟を基本にしていることを裏付ける根拠のひとつとしてあげることができる。さらに，889－ＯＢの南側にはほぼ同一方向の平面形が長方形を呈する建物があり，この建物を居住のためのものと考えるなら，住居と倉の基本的なセット関係を示すものと言える。また211－ＯＢ・258－ＯＢの南東にも確実な建物としては復元できなかったが，周辺に炭化物を含む土坑が数基認められるなど，建物の存在した可能性の強いピット群１があり，この周辺でも同様なセット関係を指摘できる。

このように北群では掘立柱建物には数ヶ所にセット関係のある単位が認められるが，そのほかにも同時並存と考えられる竪穴住居の存在も注目される。竪穴住居は前述のとおり調査区の西端に位置し丘陵の縁辺部を中心に展開する可能性が高く，掘立柱建物と竪穴住居ではその立地に大きな差がみられる。また調査区の北西は緩やかに丘陵が延びこの部分にまだ数棟の竪穴住居が存在する可能性はあるが，その数は少ないと予想される。

その他北群の特徴として，調査区の北側の土坑群の存在がある。この土坑群の特徴については前述のとおりであるが，この土坑群の周辺をみてみると後世の攪乱が著しいことを

考えあわせても，掘立柱建物や竪穴住居の存在した可能性は極めて少なく，この周辺の土器溜まりや包含層の遺物のなかに甕の破片が付着した窯体の一部や二重瓮などの特異なもの，器台が他の遺構に比べると多いなどの特異な状況も指摘できる。

これらのことを総合してみてみると北群では掘立柱建物と竪穴住居が並存するが，数量的あるいは立地からみて掘立柱建物に優位性が認められ，掘立柱建物を中心に数ヶ所の単位をもって集落が展開し，区画の中には土坑群の存在が示すように性格づけはできないが特異な空間が存在したことがうかがえる。

一方南群であるが，南群は調査区の東側にはさらに丘陵が延び掘立柱建物の存在が予想されるが，現在のところ北群で確認されたような展開を示すものかどうか把握できない。ただ南側と西側は調査範囲が丘陵の縁辺部まで及んでおり，竪穴住居が北群と同様に展開するならば調査区東側にその存在が予想される。

以上第II区の概観をしたが，ここで第Ⅰ区の成果も合せて集落全体について簡単に触れておく。伏尾遺跡の特徴としてはまず存続期間は短いが，掘立柱建物を中心に展開し，集落の規模が非常に大規模であることがあげられる。さらに集落の構成をみてみると大型の溝（1750・109－ＯＳ）によって三群にわけることができ，それぞれの区画で集落が展開することが指摘できる。しかし第Ⅰ区と第II区の北群を比較してみると，その構造には差異が認められる。まず土坑群を比べた場合，第Ⅰ区の1766－ＯＯの周辺に展開する焼土や炭化物，瓦質の長胴甕などの煮沸形態の土器を多く含むものは北群では認められず，北群の調査区北側で認められた完形品を多く含み，その他の遺物を見ても特異な状況を示す土坑は第Ⅰ区では認められず，土坑の在り方に差が認識できる。次に建物を比較してみると北群では住居と考えられる建物は多く復元されておらず第Ⅰ区との格差を明確にすることはできないが，倉と考えられるＢ類をみてみると北群ではその数は多く，しかも規模の大きいものも存在し掘立柱建物の在り方にも差がみられ，三群はいずれも掘立柱建物を中心に展開するがその内容にはそれぞれ特徴が認められる。また掘立柱建物のなかに倉と考えられる建物が多いことも特徴的である。

一方出土遺物の特徴としては須恵器の占める割り合いが大きく，しかも焼け歪みや焼成不良の製品が少ないなどが挙げられる。その他にも量的には多くないが半島系の硬質あるいは軟質の土器の存在も特徴的である。

6．まとめ

最後に伏尾遺跡の集落の概観は把握できたが，今後の課題として「陶邑」地域で確認されているほぼ同時期の集落との簡単な比較を行ないまとめとしたい。

伏尾遺跡とほぼ同時期の代表的な集落としては，小阪遺跡，大庭寺遺跡，野々井遺跡，深田遺跡などがある。小阪遺跡は伏尾遺跡の北西の平地部に位置し，初期須恵器製作集団の集落として位置づけられている。集落の構成は小阪遺跡が竪穴住居を中心に展開し，伏尾遺跡が掘立柱建物を中心に展開を見せるのと対照的である。出土遺物をみると，小阪遺跡では初期の段階の須恵器が認められる他に，日常什器に土師器や半島系の土器を多用したことが指摘されている。一方伏尾遺跡では，土師器や半島系の軟質土器はみられるもののその量は須恵器に比べて極めて少なく，これらの土器を日常土器に多用したという傾向は，積極的に指摘できない。集落の出現の時期は，小阪遺跡のほうが先行する可能性（伏尾遺跡の場合今後の調査によって明らかにされると予想されるが，伏尾遺跡と小阪遺跡の出現時期は同時の可能性もある）があるが，廃絶の時期は両遺跡ともほぼ同時期で，両遺跡が同時並存していたことは確実である。このように小阪遺跡と伏尾遺跡は近接しながらも，集落の内容には大きな違いがみられる。また集落の規模，立地においても大きな違いが認められる。

野々井遺跡は栂丘陵上に位置し，掘立柱建物，竪穴住居，古墳群などが検出されている。野々井遺跡の存続期間は伏尾遺跡に比べて長いが，掘立柱建物を中心に集落が展開する点や，集落と古墳群の関係など伏尾遺跡と類似する点が多い。

深田遺跡は，陶邑古窯址群高蔵地区の段丘崖にあたる石津川の東側の平地部に位置する。検出された遺構には倉庫と考えられる掘立柱建物や土坑，溝等がある。特に土坑（SK06）からは完形品に近い破損品や焼き歪みの製品が多量に出土し，流通に関係する遺跡として位置づけられている。一方伏尾遺跡では焼き歪んだ須恵器はほとんど出土しておらず，深田遺跡で検出されたような土坑も認められなかった。また須恵器の器種構成について，深田遺跡の二次調査と伏尾遺跡の谷部出土のものを比較した場合，甕，杯身，杯蓋，高杯，については似たような数値を示すが，伏尾遺跡の場合，甕の比率が高く，器種構成の上でも相違点が見い出せる。

以上三遺跡について伏尾遺跡との比較を簡単に行なったが，伏尾遺跡と類似点の認められる遺跡もあるが，深田遺跡，小阪遺跡のように内容を異にする遺跡も認められ，陶邑地域には多種，多様の性格をもった遺跡が存在し，「陶邑」を構成していることが認識でき

る。伏尾遺跡を考えた場合は，遺跡の立地，集落規模やその構造，古墳の存在とその出土遺物の質量の豊富さには目を見張るものがあり，この地域で重要な位置を占めていたことはうたがいない。しかし伏尾遺跡の性格を考えた上での位置付けについては，今後の課題としなければならない点が多い。ただ伏尾遺跡ではわずかであるが窯体も出土しており周辺に窯の存在も予想され，直接的に須恵器生産に関係していた可能性が高く，今後他遺跡との詳細な遺物の比較検討と共に，第II区南側に位置する谷部の調査成果も考えあわせて「陶邑」における伏尾遺跡の正確な位置づけを行なうことが必要である。同時に陶邑地域では小阪遺跡・大庭寺遺跡を初めとする集落遺跡の調査成果の蓄積が行なわれており，色々な視点からの「陶邑」の再検討も必要となってきている。

第Ⅳ章　参考文献（発行年順）

田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966
大阪府教育委員会『陶邑・深田』大阪府文化財調査妙報　第２輯　1973
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981
田辺昭三「初期須恵器について」『考古学論考』平凡社　1982
(財)大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1984
藤田憲司「単位集落の居住領域」『考古学研究』第31巻１号　考古学研究会　1984
大阪府教育委員会『陶邑』Ⅵ　大阪府文化財調査報告書　第35輯　1987
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『小阪遺跡』（その３）　1989
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『福田遺跡』（その２）　1989
韓式系土器研究会『韓式系土器研究』Ⅰ　1987
中村　浩「陶邑窯跡群における工人集団と遺跡」『古文化談叢』第20集（上）九州古文化研究会　1988
大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会『平井遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第21輯　1988

（註）

当協会が調査を行った大庭寺遺跡では，初期須恵器や半島系の土器が多数出土している。時期的には大庭寺遺跡で出土したもののほうが伏尾遺跡のものより遡るが，伏尾遺跡の整理作業を進めるうえでは，参考にする部分が多かった。なお大庭寺遺跡の調査成果については㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第41・50輯『大庭寺遺跡』・『大庭寺遺跡II』を参照して頂きたい。

第Ⅴ章　第Ⅲ区の調査成果

第１節　概要（第164図）

伏尾遺跡（Ａ地区）は石津川右岸の中位段丘上に位置する。第Ⅲ区は第Ⅱ区の南側で，上池・下池が位置する谷と伏尾遺跡（Ｂ地区）の位置する谷に挟まれた尾根上で，標高約31ｍから33ｍのあたりに位置する。

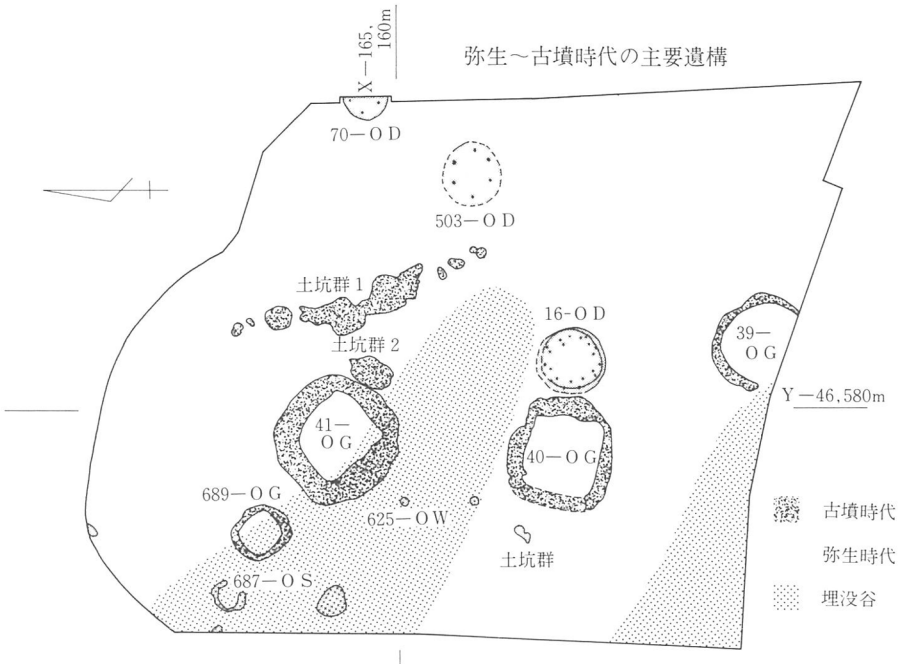
調査区はほぼ平坦であるが，北西方向へ向かって段落ちがみられる。また，調査区中央付近から北西方向に向けて，非常に浅い埋没谷が存在する。また南西隅にも谷地形がみられる。前者からは，埋土内より弥生時代中期後半の土器が出土しており，その埋没谷上に弥生時代後期の遺構，古墳などが位置する。

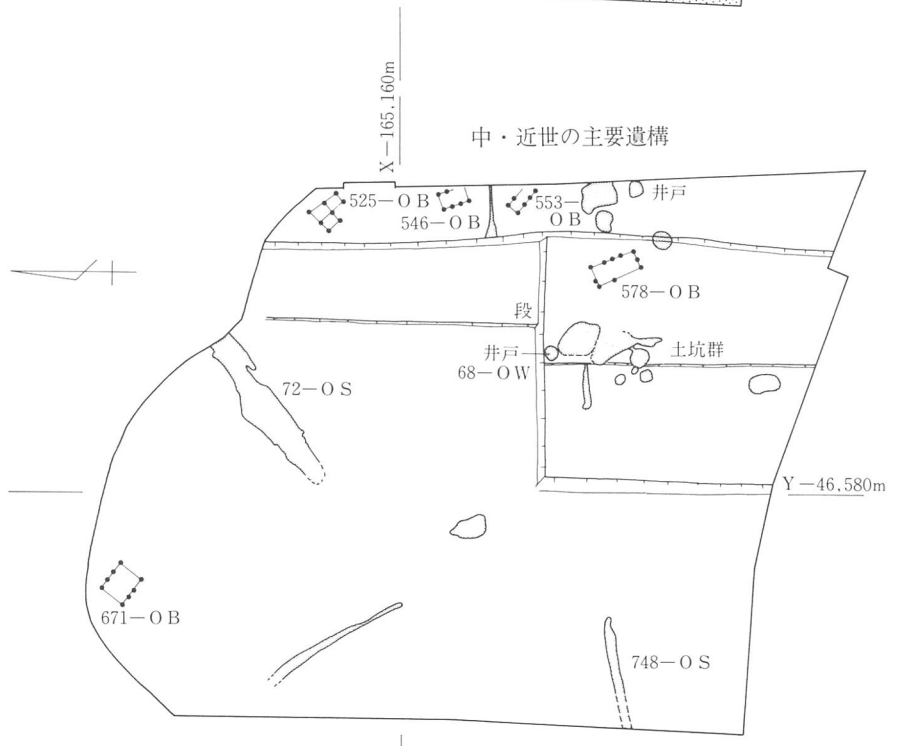
今回の調査では，弥生時代中期から後期，古墳時代中期から後期，中世，近世の各時代の遺構を検出した。

弥生時代では，中期末から後期初頭に属する竪穴住居を３棟検出した。70－ＯＤは，径５ｍの円形のもので東側半分が調査区外となっている。503－ＯＤは，推定径８ｍの円形のものであるが，中世の開墾により削平を受け僅かの壁溝と，柱穴・炉が残存する。16－ＯＤは径８ｍの円形のものであるが，ほぼ同位置で住居の拡張を行っており径９ｍの規模となっている。他に同時期の遺構としては，方形にめぐる溝・井戸・土坑群などがみられる。これらは埋没谷上，あるいはその周辺に位置するという特徴がある。

古墳時代の遺構では，中期の古墳を４基検出した。３基が方墳で１基が円墳（方墳の可能性もある）である。41－ＯＧは，一辺16ｍの方墳で家形埴輪をはじめ多数の埴輪・須恵器が出土した。689－ＯＧは，一辺７ｍ，40－ＯＧは一辺14ｍの方墳で各々に埴輪・須恵器が出土した。39－ＯＧは，径11ｍの円墳と思われ同じく埴輪，須恵器が出土した。６世紀の遺構では，二群に分れた土壙墓と考えられる土坑の集合を検出した。この土坑群からは，須恵器のみが出土し，完形品が比較的多くみられる。

第Ⅲ区では古墳時代以降，空白の時期を経て，室町時代になって再び遺構がみられる。この時期に属する遺構数が最も多く，掘立柱建物を５棟，土坑，溝，井戸などを検出した。掘立柱建物は，散在的に単独で存在し，規模も小さい。中世の遺構は調査区内でも段の高い位置に散見される。また，近世・近代の井戸などの遺構も存在する。





第164図　第Ⅲ区主要遺構配置図

第２節　基本層序（第165図）

第Ⅲ区では，中世および近・現代に畑地の開墾のあったことが認められた。それによって遺構及び包含層がかなり削平を受けており，中世の開墾によって弥生・古墳時代の遺構・包含層が，近・現代の開墾によってそれ以前の遺構・包含層が各々削平を受けている。特に，中世の包含層はごく小範囲に限られるという状況であった。したがって，第１層とする現耕作土の直下が遺構面となっているところが多い。

層序については，開墾による削平，丘陵上という立地条件により土の堆積は希薄であるが，基本的には段丘の構成層を含め四層に分類できる。

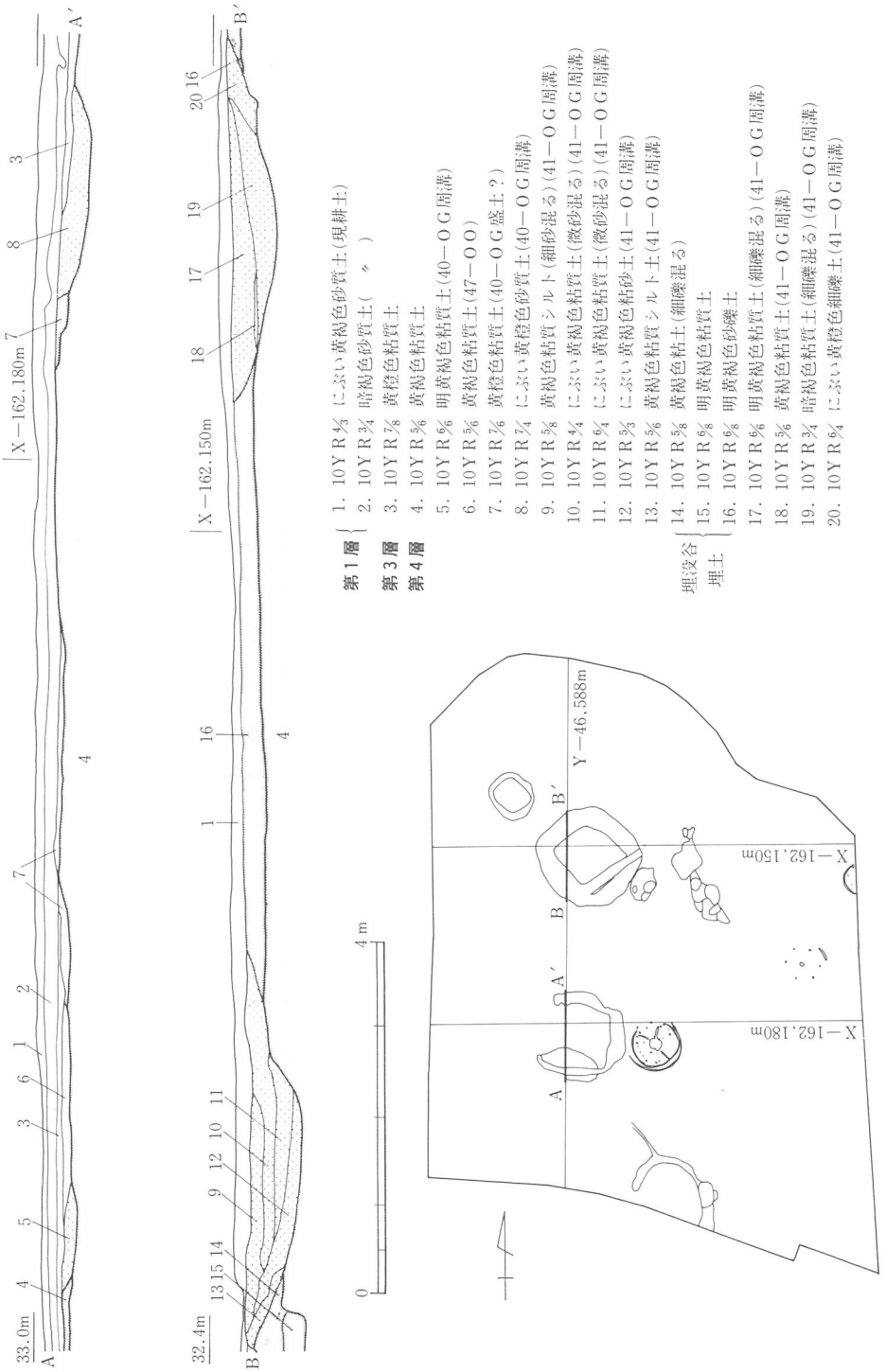
第１層は現耕作土である。

第２層は中世の遺物包含層である。この層は先述の様に，畑地の開墾により削平が著しくごく小範囲にしかみられない。（第165図の範囲ではこの層は認められない。）

第３層は古墳時代以前の遺物を含む包含層である。この層は，調査区内のやや低いところで広範囲にみられる。（遺物は古墳時代以前であるが中世の開発に伴なう層である。）

第４層は段丘を構成する層である。各時代の遺構はこの面で検出されている。

また，第Ⅲ区には「概要」でも述べたように調査区中央付近から北西方向に向けて非常に浅い埋没谷が存在する。この埋土中には弥生時代中期の遺物片が含まれており，この埋没谷上に弥生時代中期以後の遺構が検出される状況である。この埋没谷について少し述べてみる。伏尾遺跡の乗る丘陵は洪積段丘中位面にあたるが，他の多くの丘陵に普遍的にみられるような開析谷は，溜池や谷水田として現景観を形成している。第Ⅰ区の「谷部」と呼ばれる開析谷もそうであるし，第Ⅱ区と第Ⅲ区の間に横たわる溜池（上池・下池）も実は，かなり深い開析谷の土地利用の結果である。第Ⅲ区の南西隅でも谷地形の一部が検出されており，この谷は別に報告する伏尾遺跡（Ｂ地区）に向かって延びるものである。このように段丘上は多くの開析谷によって分断されている。その形成は古く，徐々に埋没していったものと思われるが，第Ⅲ区で検出された浅い埋没谷は全体図の地形にも現われているが元来そう深いものではなく，弥生時代の頃にはかなり埋没が進んでいたものと考えられる。その様な時期に弥生人の開発の手が段丘上に延び，谷に堆積する埋土の中に弥生土器が混入したものと思われる。その後は谷地形がほとんど認識できなくなってから古墳が築造されるが，その時には谷地形の整地なども想定され，実際に古墳周溝の谷部側の肩の検出はやや困難であった。

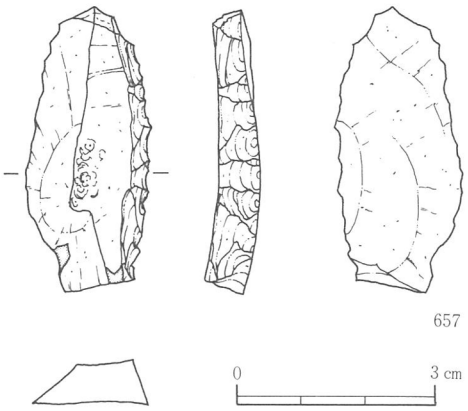


第165図　第Ⅲ区基本層序図（1/80）

第３節　遺構と遺物

第１項　旧石器時代（第166図，図版128）

旧石器時代に属する遺物は，Ｃ10ＷＧの包含層から出土した国府型ナイフ形石器がある。石器は，やや風化の進んだサヌカイト製で，全長4.1㎝を測る。ほぼ典型的な瀬戸内技法による剝片素材を利用し，素材の打点は調整によって除去されている。ナイフの底面を形成する盤状剝片を得る際の打面，および打撃痕が残されており，盤状剝片石核から得られた最初の剝片がナイフの素材となったことがわかる。ただ，調査区内に遺物が包含する形跡はない。



第166図　包含層出土遺物（2/3）

第２項　弥生時代

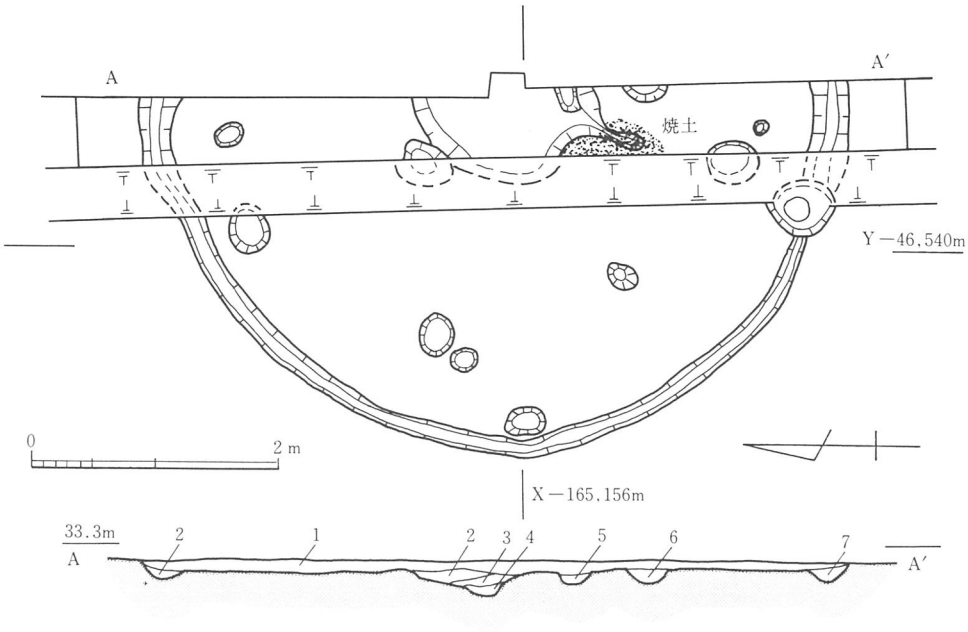
１．竪穴住居

70－ＯＤ（第167図・第170図の658，図版61・128）

70－ＯＤは，調査区東端，Ｃ10ＮＰ付近の最も高い位置で検出した。東半分は調査区外にあり，推定規模は径約６ｍを測る。残存状況は極端に悪く，外壁などは確認されない。壁溝内には小穴がみられるが，いずれも浅いか小さく，柱穴と認定するのが困難である。住居中央付近にほぼ円形の炉と思われる土坑があり，内部には炭混じりの埋土が認められ，南側肩付近に焼土がみられた。遺物は土坑から壷の体部片と蛸壷（658）が出土している。

503－ＯＤ（第168図・第170図の659，図版62）

503－ＯＤは，70－ＯＤの南南西20m，Ｃ10ＲＭ付近で検出した。後世の削平が著しく，現畑の段の高いところで僅かに壁溝と思われる弧状のごく浅い溝を検出したほかは，住居の炉と考えられる中央土坑と柱穴だけが残されていた。主柱穴は六箇所六角形に配置し，住居の壁溝からの推定復元規模は，径約８ｍになる。壁溝底と柱穴などの検出面との高低差は0.5mほどあって，本来柱穴はかなり深く，また住居の掘り込み面はもっと高いところであったことがしのばれる。炉には焼土や炭が埋積しており，柱穴から土器片が出土したが，残りが悪い底部（659）で時期は積極的に決めることができない。



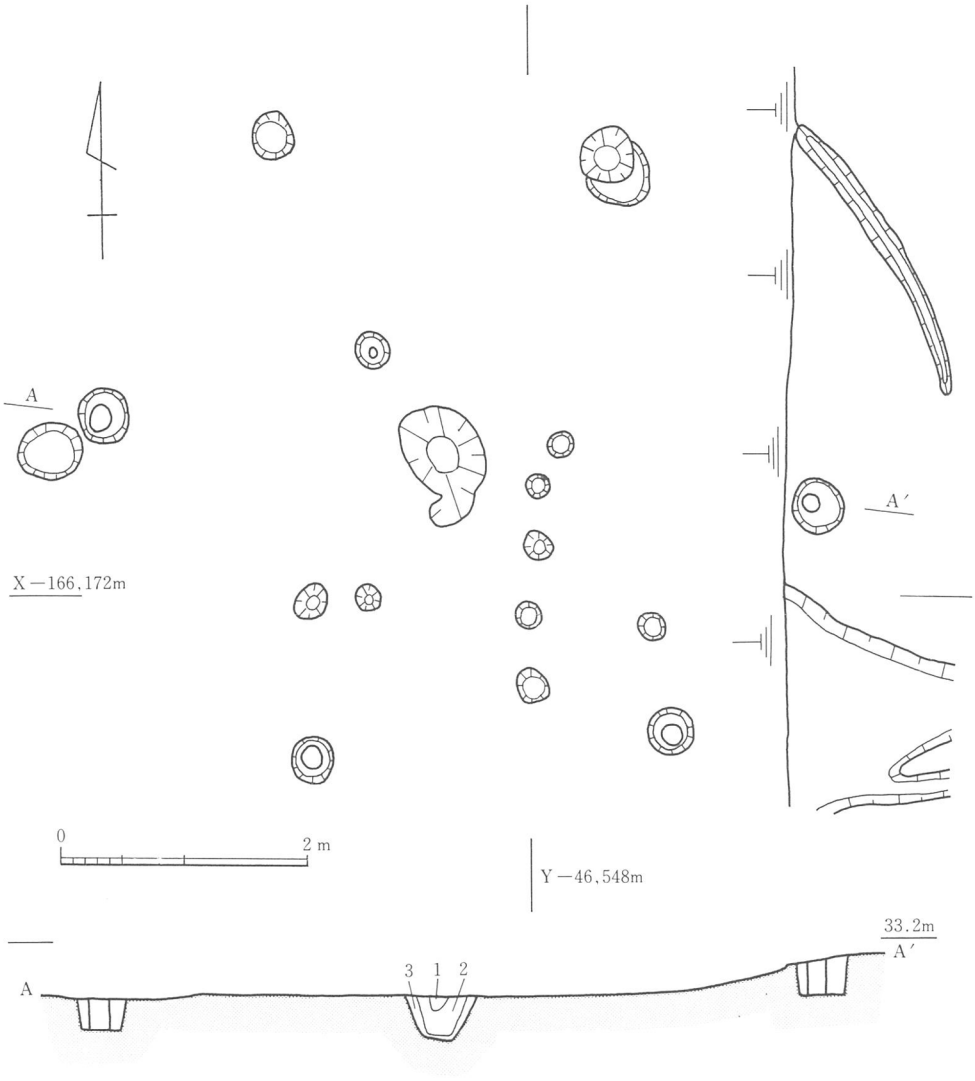
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(炭混る)
2. 10YR4/4 褐色粘質土(炭混る)
3. 10YR4/4 褐色粘質土(炭多く混る)
4. 10YR3/3 暗褐色粘質土(炭混る)
5. 10YR4/4 褐色粘質土
6. 10YR5/6 黄褐色粘質土(砂礫混る)
7. 10YR4/4 黄褐色粘質土

第167図　70－ＯＤ平面・断面図（1/60）

16－ＯＤ（第169図・第170図の660～663，図版61・63・128・129）

16－ＯＤは，503－ＯＤの西南西20m，Ｃ10ＵＧ付近で検出した円形の竪穴住居である。これも後世の削平が著しく，床面近くでも中世土器が出土する。壁溝が二重になっており，中央の土坑から放射状に延びる溝は確実に内側の壁溝を切っており，住居の建て替え拡張を物語っている。以下，住居を新古に分けて述べるが，北および西側は削平によって失われている。

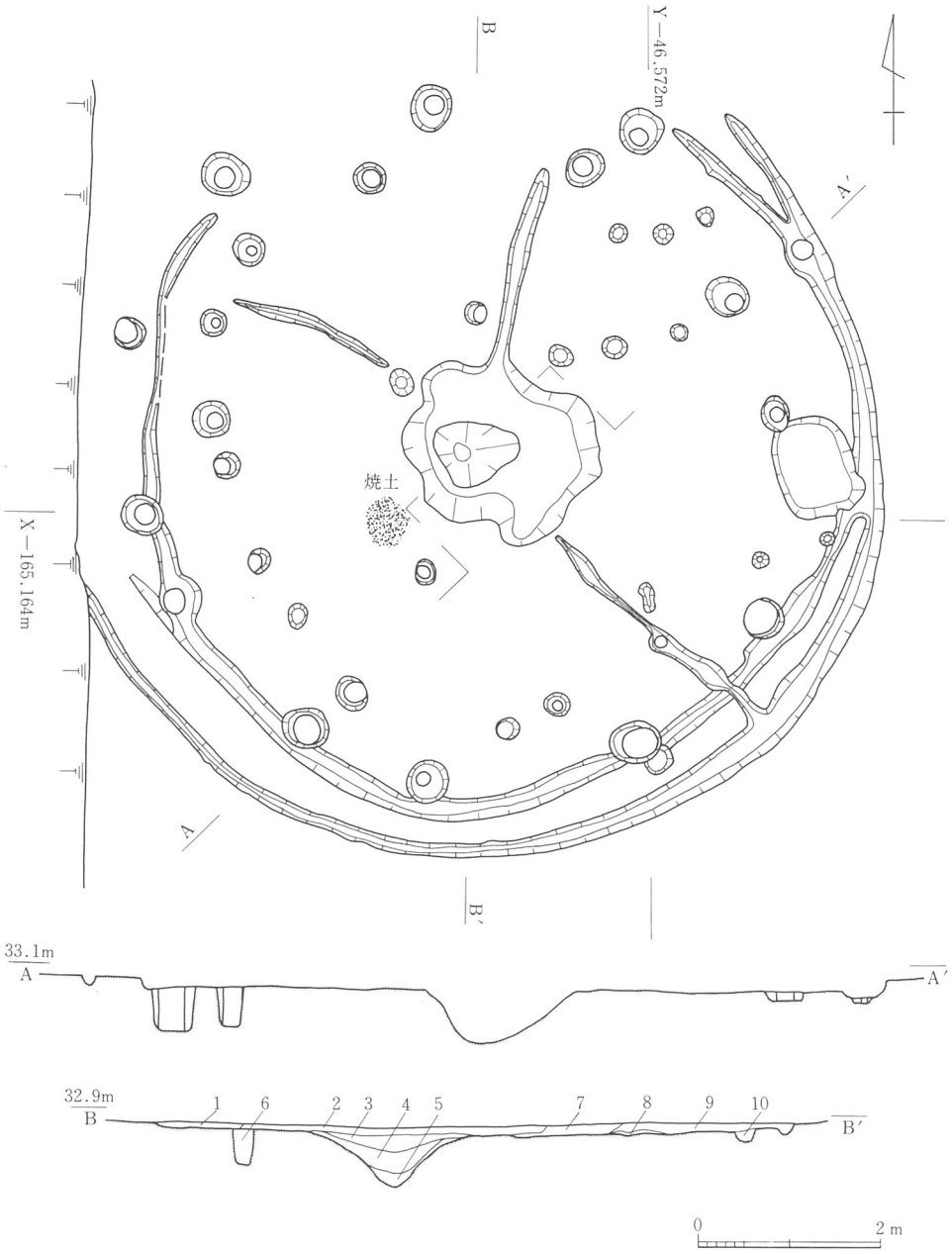
16－ＯＤを構成する遺構の内，それぞれが新古いずれに伴うかは明らかにし難い現状があるが，とりあえず古いほうからの記述を進める。いずれも床面は不明。古い方の住居は，壁溝の約７割が残存しており，推定径８ｍを測る。壁溝のいくつかの部分では，新しい住居に伴う溝・柱穴によって切られている。古い住居の柱穴は，壁溝内側１ｍまでの距離に円形に配されたピットを当てるが，十数個数えられる。炉と思われる中央土坑は，拡張の際破壊されており，様子は不明である。新しい住居は，ほぼ古い住居を包括して拡張しており，東側で壁溝が重なっている。壁溝の径は約９ｍに復元される。これも壁溝内側に沿っ



1．10YR8/3 浅黄橙色砂質土　　2．10YR5/8 黄褐色粘質土　　3．7.5YR7/1 明褐灰色粘土

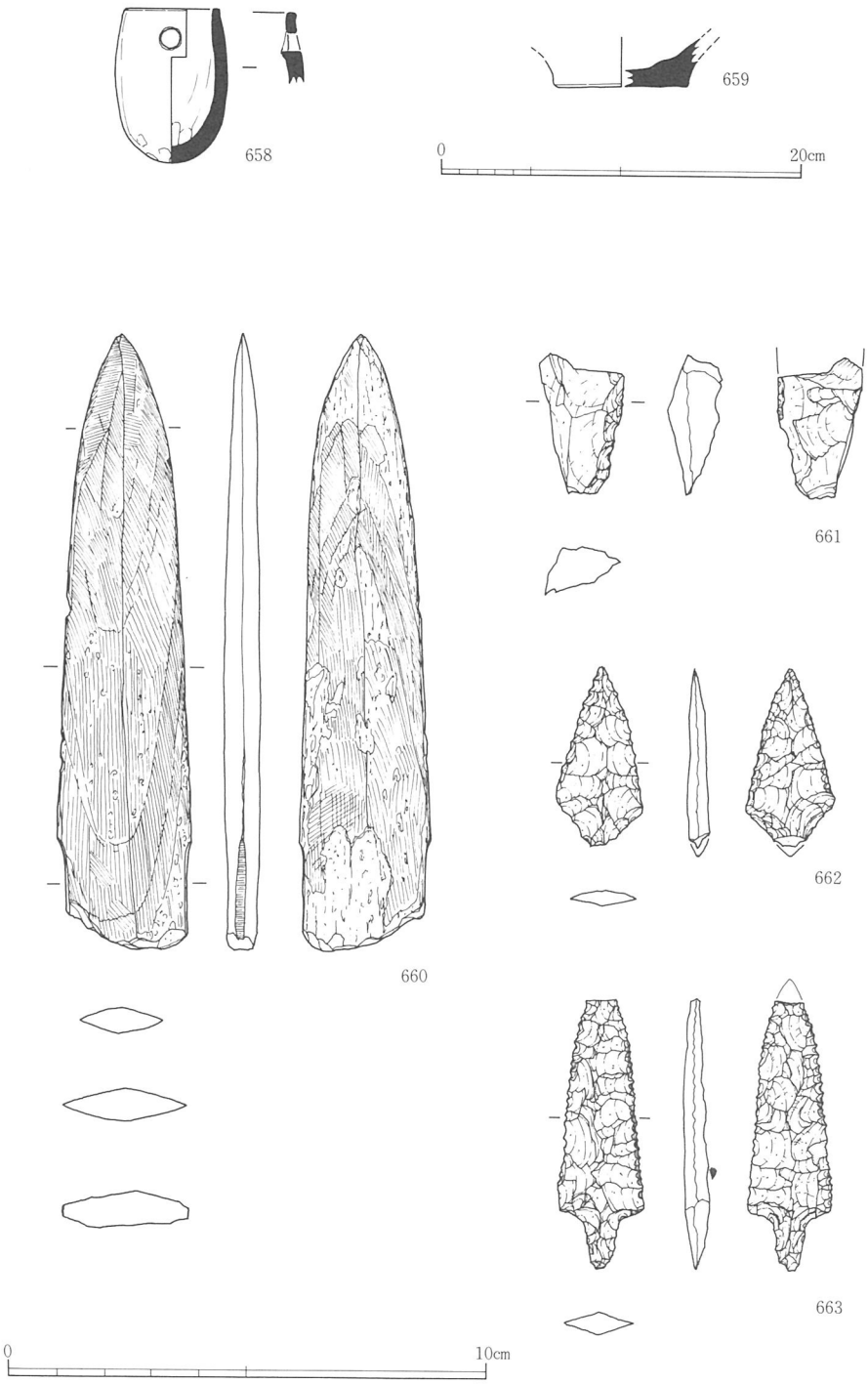
第168図　503－ＯＤ平面・断面図（1/60）

て，やや大きな柱穴が十個あまり配されているが，深い（最大0.6m）浅いという不揃いがあって，主柱穴の復元は明確さを欠く。中央に検出面からの深さ0.55mの不整形の土坑があって，底部には炭層が認められるが遺物は１点も検出していない。土坑の周囲に炉堤のようなものは認められないが，一部焼土の塊が認められた。土坑からは三方に向けて浅い溝が延びるが，北のものは土坑に連続し，南東方向のものは古い住居の柱穴と壁溝を切っている。住居の東縁側には土坑が見られたが，性格は不明。なお，この付近の柱穴は明確



1．10ＹＲ5/6 黄褐色粘質土
2．10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色粘質土
3．10ＹＲ6/8 明黄褐色粘質土
4．10ＹＲ5/8 黄褐色粘質土
5．黒色粘質シルト（炭多量に混る）
6．5Ｙ6/4 オリーブ黄色粘質土
7．10ＹＲ6/6 明黄褐色粘質土（炭混る）
8．10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色粘質土（炭混る）
9．7.5ＹＲ6/6 橙色粘質土
10．＝6（内側住居の壁溝）

第169図　16－ＯＤ平面・断面図（1/80）



第170図　16・70・503－ＯＤ出土遺物（1/4，2/3）

なものがなく，出入り口にあたる部分なのかもしれない。

遺物は，若干の図示不能の弥生土器細片がみられたほかは，以下の石器がある。いずれも床面検出中に遊離した状態で得た。

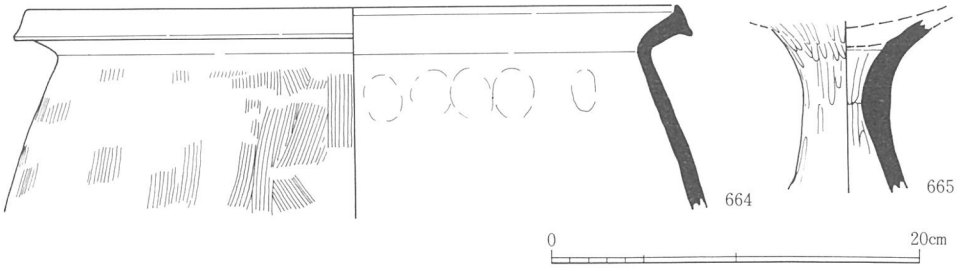
660は鉄剣形磨製石剣である。現存長12.8㎝，基部最大幅2.8㎝で身の中央にあまい鎬を磨きだし，基部にはわずかな段を持って茎を造りつけている。石材は白っぽいが黒い硬質の石理が浮きだしている。

661はサヌカイト製で，粗い調整を施す不定形な削器であるが折れて全体形状が不明である。他はサヌカイト製の石鏃で，三角形状の茎を持つやや大型の662（推定長3.9㎝）と，長身で明確な茎を造りだす663（推定長6.0㎝）である。663は両側縁に細剝離によるギザギザを意図的に造り出しており，調整も丁寧なものである。

２．土坑

688－ＯＯ（第171図の664，図版128）

688－ＯＯは，弥生時代土坑群中の一基でＣ09ＱＹに位置する。径0.3m，深さ0.12mの円形の土坑であり，埋土は二層に分れる。この土坑からは，弥生時代中期末から後期初頭の壺形土器（664）が出土した。この土器は，口径37.0㎝で口縁端部が上下に延びる。調整は体部外面にハケ調整を施す。この土器はＣ10ＴＡに位置する732－ＯＯ出土の土器と接合はしないものの形態，胎土，焼成が酷似しており同一個体と判断した。

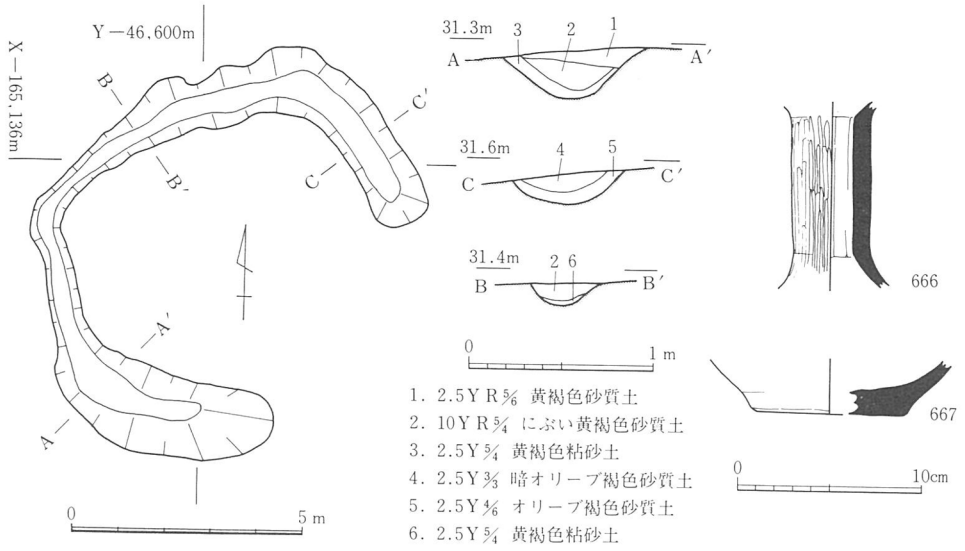


第171図　688・732－ＯＯ・埋没谷出土遺物（1/4）

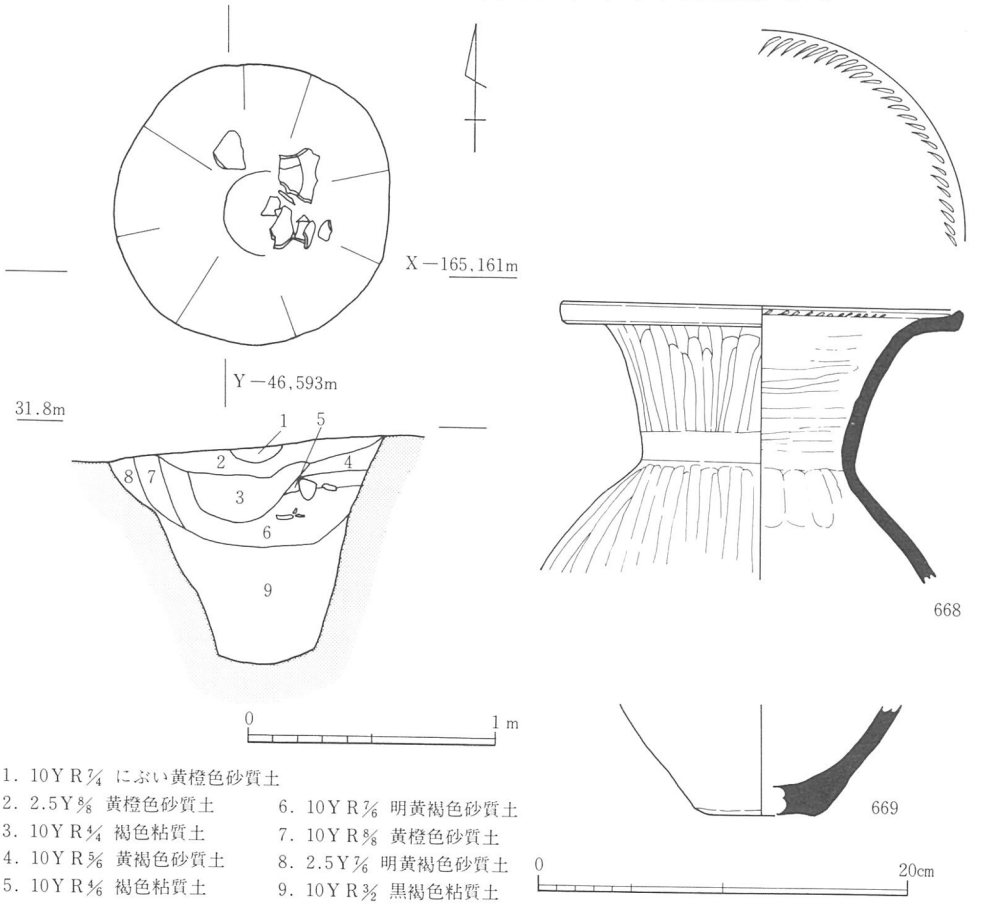
３．溝

687－ＯＳ（第172図，図版64・128）

687－ＯＳは，Ｃ09ＩＸ付近に位置する溝状遺構である。溝は方形ないし不整円形にめぐるが，西側で一部途切れる。溝は北側と南側で幅広く，深くなり（北側・幅0.6m，深さ0.16m　南側・幅1.0m，深さ0.25m），西側では幅が狭く，浅く（幅0.3m，深さ0.12m）なっている。この遺構は「概要」や「基本層序」でも述べた浅い埋没谷上に位置する。



第172図　687－ＯＳ平面・断面図（1/80，1/40），出土遺物（1/4）



第173図　625－ＯＷ平面・断面図（1/30），出土遺物（1/4）

出土土器についてみると，高杯（666）は脚部のみ残存し，棒状を呈し，外面はヘラミガキを行う。他に，弥生土器底部（667），甕片，サヌカイト剝片などが出土している。

４．井戸

625－ＯＷ（第173図，図版64・129）

625－ＯＷは，Ｃ09ＰＢに位置する，径1.1m，深さ0.88mの井戸と考えられる。湧水はなかった。埋土は九層に分れ，遺物は第６層付近から，弥生時代後期初頭の壺形土器２点（668），土器底部（669），サヌカイト剝片が出土した。668は，口径22.0㎝で口縁部は外反し端部はつまみ上げる。また，口縁内部には列点文を施す。頸部，体部外面には縦方向の，頸部内面には横方向のヘラミガキを行う。体部内面はナデである。669は弥生土器底部であるが，調整は不明である。この井戸も埋没谷上に位置する遺構である。

５．埋没谷（第171図の665，図版128）

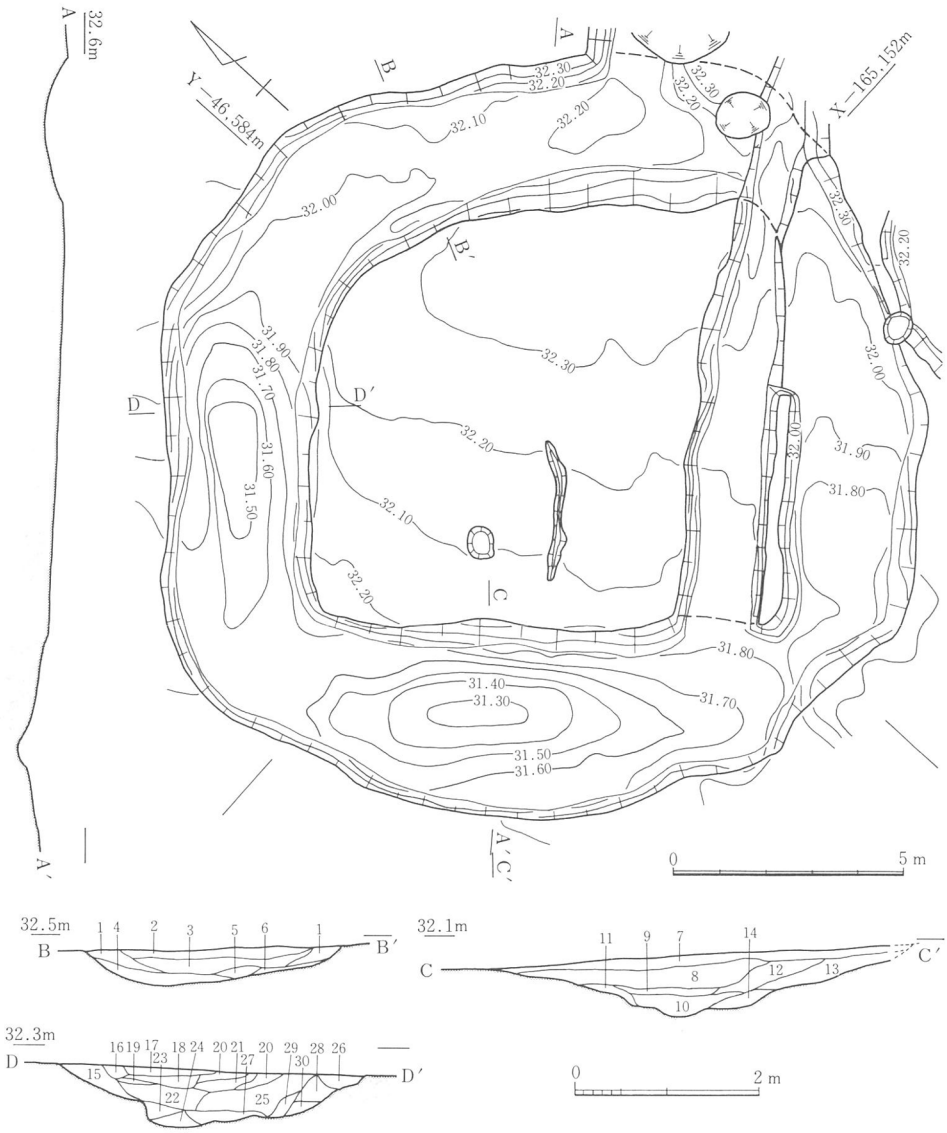
埋没谷は「概要」・「基本層序」の項で述べたものである。埋没谷は調査区中央付近から北西方向に向けて下るもので，調査区内ではＣ09W付近で最も深く0.9mである。谷の埋没過程で堆積した土中から，弥生時代中期末の土器が出土した。665は高杯脚部で裾部が開くものである。外面はヘラミガキを行い内面にはしぼり目がみられる。

第３項　古墳時代中期

古墳

41－ＯＧ（第174～191図，図版65～67・129～143）

41－ＯＧは，Ｃ10ＭＥ付近に位置する一辺10～11m（周溝肩を含むと16m）の方墳である。この古墳は先述の埋没谷上に立地する。周溝の幅は北東・北西・南東各辺は３m，南西が４mであり，各辺とも中央付近が深く，角部は浅くなっている。周溝は深いところで現地盤から0.6mを測る。この古墳は中世以降の開発により墳丘の盛土が削平され，周溝のみが残存するという状況である。主体部については平面的精査，または墳丘のたち割りによる探索を試みたが，既に削平を受け残存しなかった。また，周溝についても中・近世の溝により南東部の一部が破壊されている。遺物は墳丘上から周溝内に転落した状態で須恵器・埴輪が多量に出土した。遺物は，周溝に転落して，深い部分に集中して出土した。本来あるべき破片が少なかったりするので，周溝埋没までに多くの個体は破壊され，失われたようである。遺物は，この古墳に伴う須恵器・埴輪の他，混入の弥生土器，後代の須恵器などが出土した。以下，略述する。



1. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
2. 10YR7/6 明黄褐色粘質土
3. 10YR5/6 黄褐色粘質土
4. 10YR6/6 明黄褐色粘質土
5. 10YR5/8 黄褐色粘質土
6. 10YR5/8 黄褐色粘質土(礫混る)
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂土
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(微砂混る)
9. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土(微砂混る)
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘砂土
11. 10YR5/6 黄褐色粘質土(礫少し混る)
12. 10YR4/4 にぶい黄褐色粘質土(微砂混る)
13. 10YR5/6 黄褐色粘質土(礫少し混る)
14. 10YR5/6 明黄褐色粘砂土
15. 10YR5/6 黄橙色砂礫土
16. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂土(礫混る)
17. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(砂礫混る)
18. 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土
19. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
20. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(微砂混る)
21. 10YR5/6 褐色粘質土
22. 10YR3/3 暗褐色粘質土(砂礫混る)
23. 10YR5/6 褐色粘質土(砂礫混る)
24. 10R5/6 黄褐色粘質土(砂礫混る)
25. 10YR3/4 暗褐色粘質土(砂礫混る)
26. 10YR5/6 褐色砂礫土
27. 10YR6/6 明黄褐色粘質土(砂礫混る)
28. 10YR5/6 黄褐色砂礫土
29. 10YR4/6 褐色砂質土(砂礫混る)
30. 10YR5/6 黄褐色砂礫土

第174図　41－ＯＧ平面・断面図（1/160，1/80）

第175図　41－ＯＧ遺物出土状況図１（1/30）

須恵器（第177～179図，図版129～132・143）

須恵器は689～695が古墳に直接伴わない後代の混入品であって，それ以外は古墳の時期を示すものと考えられ，まず，古墳に伴うものから述べる。

杯蓋（670～673）は４点あり，少なくとも２点につまみが付き，高杯の蓋も含まれることを示している。いずれも回転ヘラケズリは天井部のほぼ全面に及んでいる。

杯及び高杯（674～684）は11点ある。674・675は杯とするが底部が遺存せず，高杯の可能性もある。高杯（676～684）には有蓋のものと無蓋のものが存在する。無蓋のものは二方向に把手のつくもの（681）があり，やや浅い。脚部は全て短脚で，四角形の透かしを

第176図　41－ＯＧ遺物出土状況図２（1/30）

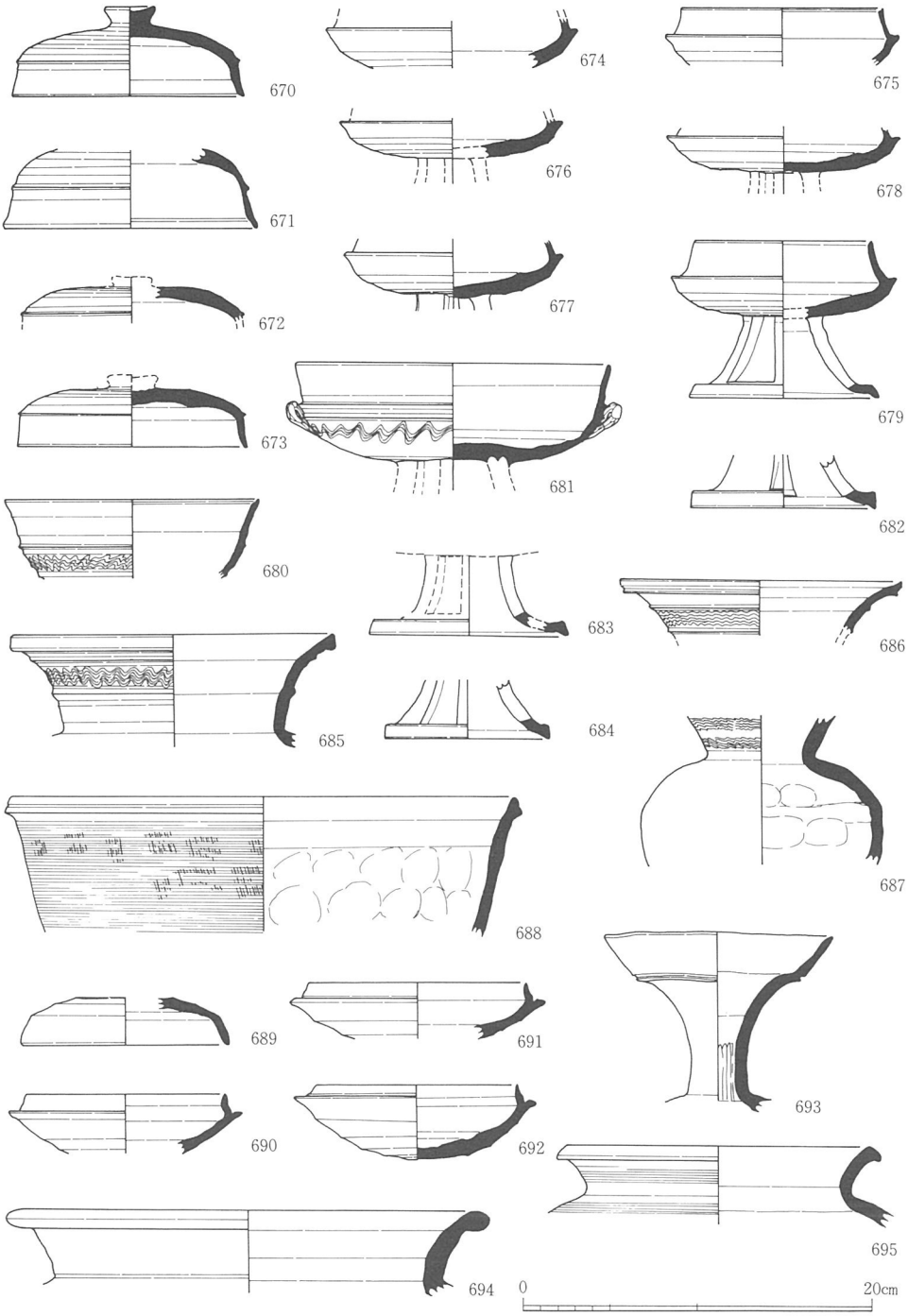
持ち，透かしの数は三方と四方の二者が存在する。

壷（685～687・696・698・699）は，大型のものと小型のものが存在する。口頸部には凸帯と波状文を一条ないし三条めぐらすものがあり，699は胴部にも波状文を配する。いずれも内面はナデ調整が観察される。口縁端部の形態は様々である。

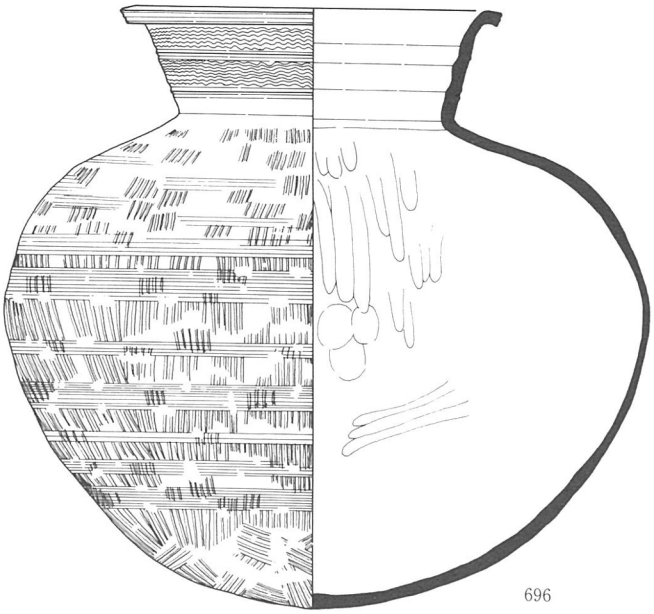
器台は通有のもの（697）と勾玉装飾付筒形器台（700），器台上部が不明だが筒形胴部を持つ（701）がある。696と697はセットの可能性があり，697の器台は，脚部に五方の三角形透かしを配している。700は器台受け部に剝離痕があり，器台と一体化した底のない壷が付いていたものと思われる。700・701は各々同一個体と思われ，全体が波状文で飾られる。700は勾玉装飾が６個，筒部の透かしは五方，裾部は三角形を五ないし六方で，上段には円孔を間に配する。701の透かしは筒部，裾部共に四角形を四方に配する。

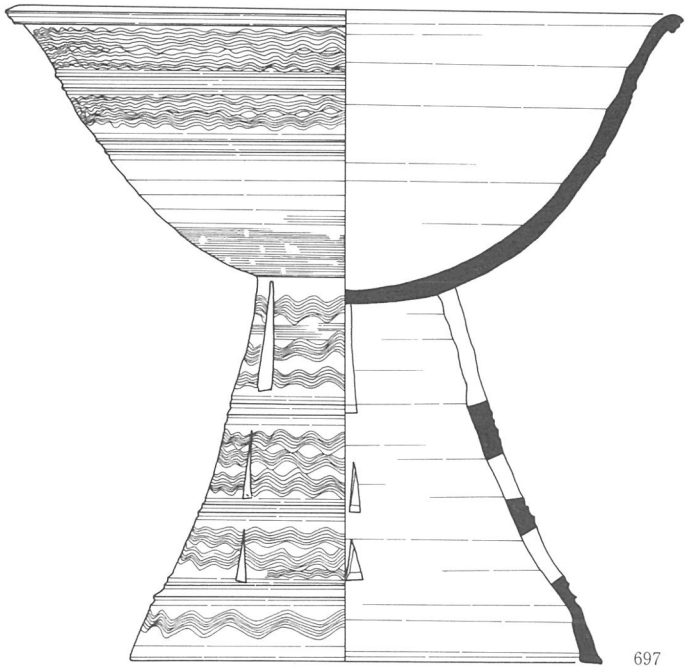
他に，甑片（688）がある。以上の須恵器類は，５世紀後半の古墳の時期を表すものと考えられ，696～701は確実に古墳を飾る供献土器類であったと言えよう。

689～695は，古墳周溝内部から出土したが，混入と考えられ，器種は杯蓋（689），杯身

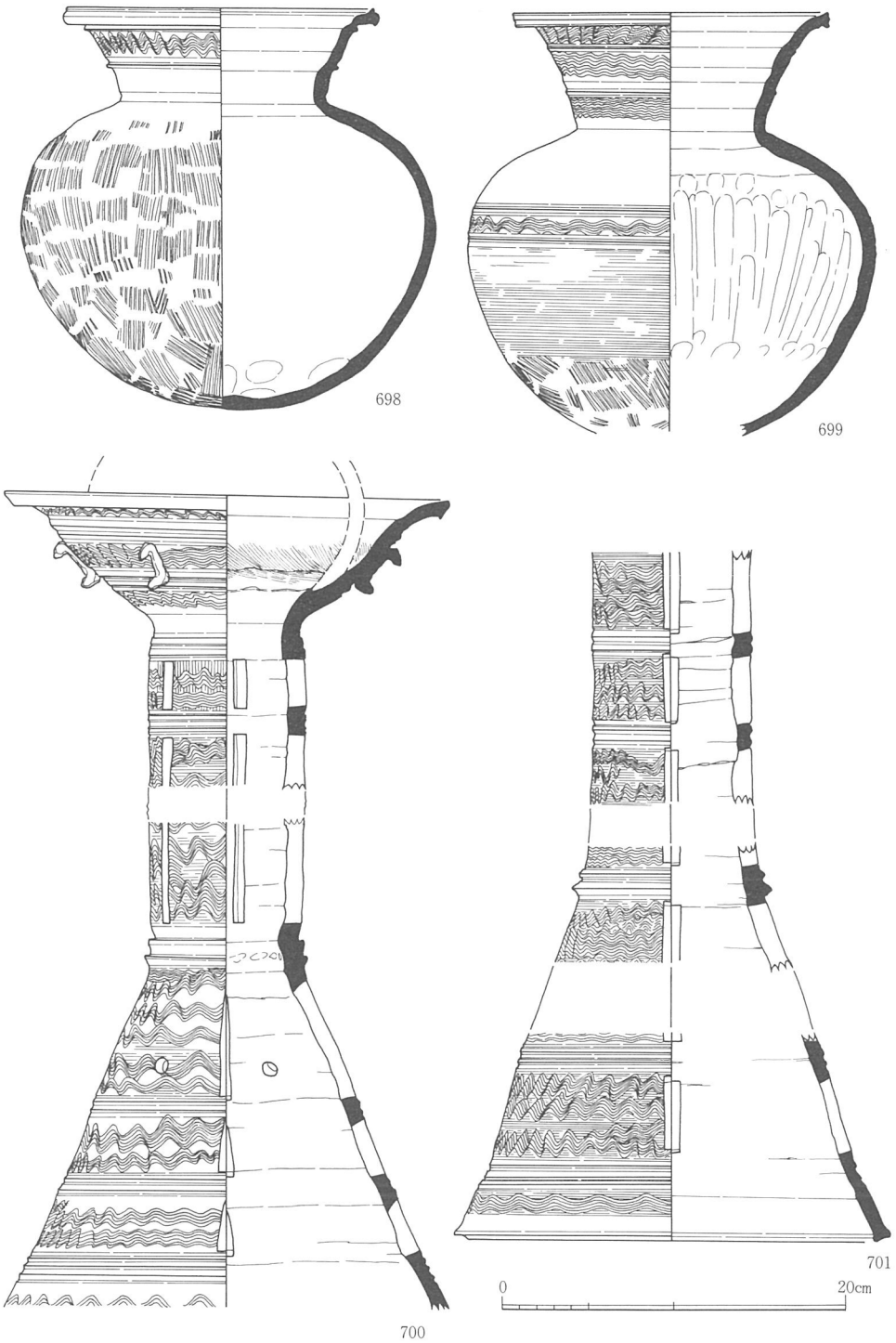


第177図　41－ＯＧ出土遺物１（1/4）





第178図　41－ＯＧ出土遺物２（1/4）



第179図　41－ＯＧ出土遺物３（1/4）

（690～692），瓻（693），甕（694），壷（695）がみられる。これらはいずれも6世紀後半のもので，古墳には直接には伴わないが，後述の土坑群の時期と一致しておりそれとの関係が考慮される。

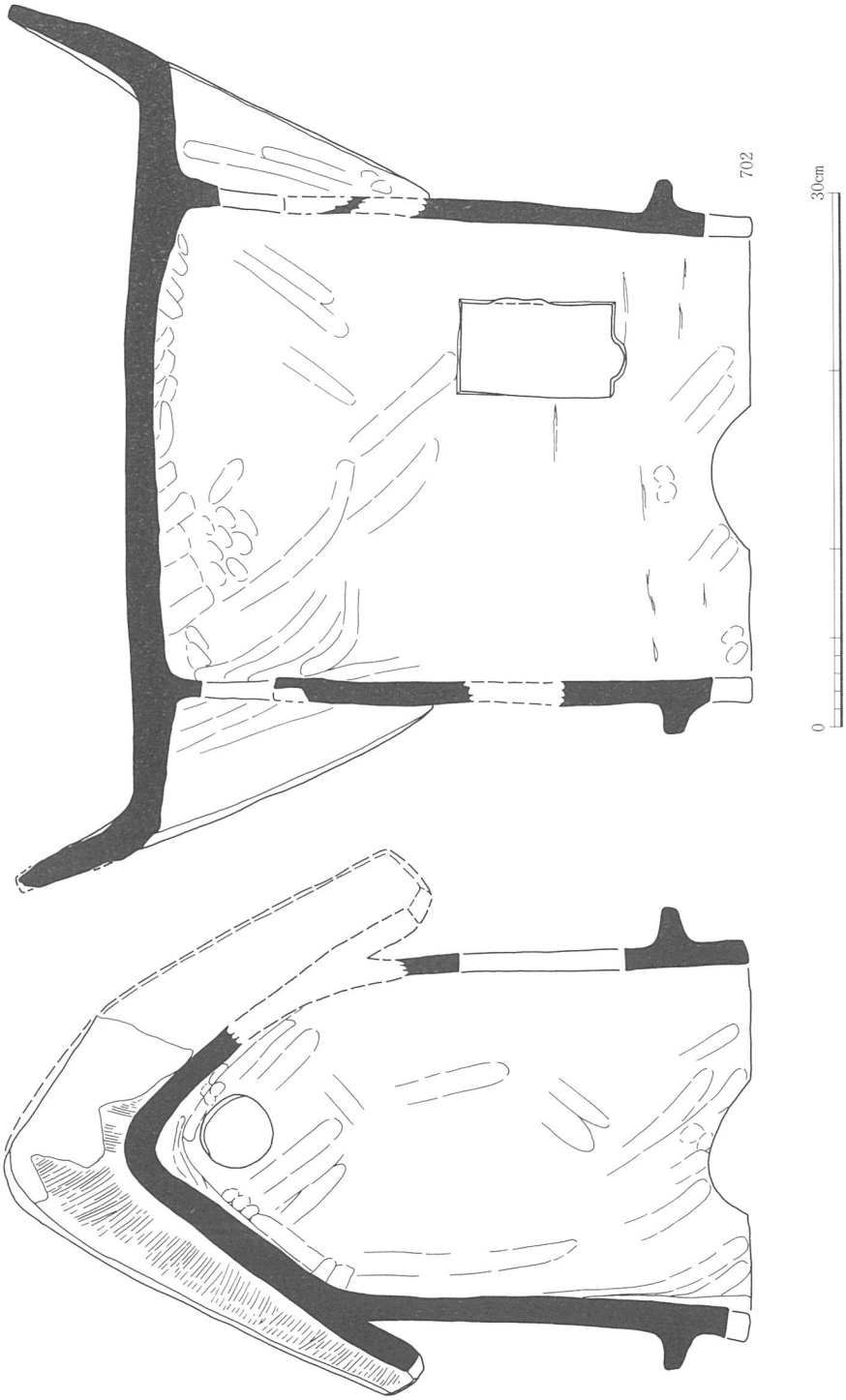
埴輪（第180～191図，図版133～143）

形象埴輪，朝顔形埴輪，円筒埴輪が多数出土した。ここでは焼成と外面調整によって以下のように分類するが，焼成は土師質・須恵質に加えて須恵質，土師質どちらともとれる焼成のものが存在する。土師質の硬質なものか，須恵質の軟質なものかの区別は出来ないので，それらの一群は通有の土師質ではないということから，須恵質に含めて述べる。また，朝顔形埴輪・円筒埴輪の外面調整についてはまずタテハケ（一次調整），その後ヨコハケ（二次調整）がみられ，順序が逆転する例はない。そのうちヨコハケは，A類が断続的でハケを器面から離して短く横に動かす。B類は連続したハケで工具は器面から離れずに一周するが，その間に数回工具の動きを止める。C類は連続したヨコハケで，工具は埴輪から離れずに一周すると考えられるもの。以上の三者を認識するが，施す場所によって異なる場合や，破片の為いずれとも決め難いものも存在する。

また，内面についてはハケを施すもの，ハケのちナデを施すものがある。但し，この類については実際にハケのちナデを行なったものか，実はそのハケがナデによる凸部のみにあたったものであるか，どちらとも観察し難い個体が多い。また，ナデのものもハケ調整を行なったのちそのハケ目を完全にナデ消したものが含まれる可能性がある。

家形埴輪（第180・181図，図版133）

家形埴輪（702）は，部分的に欠損しているが，完形に復元できた。屋根の形態は切妻造りであり，調整は外面にはハケ，内面はナデによる調整を行う。また，外面には丹を塗っている。妻両側の破風板は，直立に近い傾斜である。屋根には堅魚木などの造形は無く，丸くつくられ，綾杉文による網代の表現がみられる。妻壁には径4㎝の円形の孔があけられ，その円孔直下から格子文によって立柱の表現がみられる。また，横方向の四本の綾杉文は立柱を境に段違いのものもあるが，横木を表現したものと思われる。平側の片面には左寄りに出入口と思われる長方形の孔があけられ，その下辺に半円形の切り込みが表現されている。出入口のある面には，妻側と同じく横木と思われる表現が三本みられる。その裏側にも柱と思われる表現がみられ，立柱もみられる。しかし，平側と妻側の横木の位置は，ずれている。床と思われる部分は，四方に張り出しており，床下の裾廻りは四方に半円形の切り込みがみられる。この家形埴輪は，床板や扉の表現が略されるが，柱の表



第180図　41－ＯＧ出土埴輪１（1/4）